

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」(紙数六一枚)の記載あり、〕

五四七 文久二壬戌年四月十六日島津和泉上京

近衛殿工奏上浪士ノ趣意書

謹テ奉密奏候、当時天下ノ形勢駸々トシテ、^(略カ)黠夷外ヨリ逼リ、^(殆カ)滔々タル大奸内ニ誇リ、其機ノ安カラサル事、^(機カ)譬ハ人体ニ癰疽ノ両痛ヲ相醸候如ク、実ニ国体之存亡命脈ノ断続、此時ニ御座候段ハ、今更申上候迄モ無御座候、即敵覽之通ニ御座候、然ル上当戌十月ニハ華庫^(庫カ)境ノ三津開港ノ期約済候也、若此三津開港ニ相成候ハ

、例ノ商館ト号シ、城郭様ノ物ヲ修補シ、群虜ヲ屯セシメ、軍艦ヲ繫キ礮台ヲ構へ、水陸ヲ要塞シ候ニ至テハ、神州中斷ノ像ニテ、譬へハ竜蛇ノ胴中ヲ裁断セラレ候如ク、首尾変然応援ノ道運送ノ便ヲ失ヒ、乍恐鳳闕之御危鷄累卵ヨリモ甚敷、万一期ニ速ニテハ、^(及候カ)外寇攘夷ノ策ハ可絶無術、手ヲ束ネテ左衽蠻文ノ風ニ^(掃蕩カ)変シ、乍居腥羶ノ正朔ヲ奉候外所望有間敷義ハ、鏡ノ影ヨリモ明白ニ御座候、右ニ付両三年来殊ニ心配仕、^(候脱)是非々々当春ニハ、義旗決挙不仕候テハ不相成義ト、^(撫カ)鎮西有志ノ者等密々結義仕居候得共、義徒烏合計リニテハ、僅ニ数百人之事ニテ、志ヲ不遂而已ナラス、却テ後書ヲ引出シ候様ニ至リ申間敷哉ニ付、必一大諸候ヲ^(頼カ)奨マスシテハ不叶事ト因循仕候内、^(妹カ)皇女様ニハ関東御降ニ相成、恐多候得共、幕廂ニ於テ^(各々)国学者共ニ申付、忌ノ処御不吉例ヲ取調候様脱漏仕候故、何時暴虎憑河ノ機ニ至リ候モ難計、彼是以テ天下有志ノ者共、^(握カ)握腕憤激仕義氣十分震立候機節相願候ニ付、既ニ去酉年十二月、一書ヲ携へ薩ノ関所ヲ犯シ、鹿兒島府へ入込申候処、一藩案内奮起仕居申候故、則一封ハ修理大夫殿実父和泉殿工相達申候、其頃同藩ニ

テ申候者、当春修理大夫殿出府候処、俄ニ延引ニテ当
秋ニモ可相成勢ニ御座候、其後上京ノ所ニ至リ申候、
出府ト申事ニ決定シ則此節上京之儀ニ至リ申候カ、
如斯之薩ノ一國ノ挙ハ全ク勤王之儀ニ相決、西海・山

陽・南海ノ有志共如此奮起、或ハ亡命脱藩上坂仕、京

攝ノ間ニハ潜伏仕居候者モ数多有之、実ニ追々不可止

ノ勢ニテ、必死確決ヲ以是非々々此度ハ大挙シテ、千

基ヲ開キ候含ニ御座候、斯ク人氣奮立候大機會是迄所ナシテ脱カ

百世之一時ニ御座候、若此義ヲ遁レ候テハ、臍ヲ嚙ト

モ其詮ナク、決テ不可成一機ニ御座候、一旦如是決発

仕候上ハ、悠々トシテ不断ノ所置ニ落候心遣ハ毛頭無

御座候得共、同敷ハ決氣仕候中ニモ上策ニ出候ヘハ、

カヲ尽シ其功十分ニ御座候、若下策ニ落候ハ、勞シ

テ無功而已ニ非ス、後害ヲ醸シ候儀モ有之者ニ御座候、

夫故乍恐神武不_(思カ)因議之

叡決ヲ以、第一策ニ出候様有御座度、差当リ一着ニ手

ヲ下候所ノ三策、試之為ニ相認候テ奉侍

天覽候、宜_(上策脱カ) 聖断奉仰願候、

一島津和泉滯坂中、綸命下リ、直ニ華城ヲ拔キ、彦城ヲ

火シ條城ヲ屠リ、同時ニ一勢ヲ率シテ和泉出京、幕吏

ヲ扨ヒ、青蓮院宮之幽閉ヲ解キ、_(奉リ脱カ) 参_(上)

庭之上_(奉カ) 鳳輦ヲ促シ、蹕ヲ華城ニ奉還_(還カ)

皇威ヲ主張、以テ七道ノ諸侯ニ命ヲ賜、陛下親ク兵衆

ヲ率玉ヒ、函嶺ニ暫行宮ヲ鎖シ、幕府ノ罪科ヲ正シ、_(御)

前非ヲ悔ヒ罪ヲ謝スル時ハ、官職ヲ剝キ爵禄ヲ削リ、

諸侯ノ列ニ加ヘ、君命ニ反ル時ハ、速ニ征伐スルモノ

ヲ上策トス、

一和泉出伏之上、_(輪カ) 命下リ上京、直ニ幕吏ヲ扨ヒ、宮之

幽閉ヲ解キ、條城ヲ拔テ、是ニ抛リ、_(栗田ノ脱) 命ヲ四方ニ

下サレ、義侯ヲ募リ、其後華城ヲ拔テ是ニ遷リ、宮ヲ

奉シテ、幕罪ヲ正ス、是ヲ中策トス、

一和泉出京、陽明家ニ參殿ノ上漸決議ニテ、幕吏ヲ攘

ヒ幽閉ヲ解キ、條城ヲ拔テ是ニ抛リ、官軍ヲ募リ、_(栗田ノ脱)

皇威ヲ主張シ、幕府ノ姦徒ヲ誅シ、幕府ヲ扶ケ尊_(吏カ) 王

攘夷ヲ議ル者ハ、是ヲ下策トス、

右三策ノ外、公武御合体夷狄攘扨ト申説ハ、根元姑息

平穩ヲ好候、_(心カ) 不断隘慮之胸臆ヨリ出候義ニテ、仮令事

行ハレ候テモ十分之落着ハ無覺束、_(符カ) 六大海州之果迄モ

皇威ヲ輝シ、万々歳

神州安全之基ハ開ケ申間敷候、御合体ノ機會ハ既ニ

五ヶ年前ニ有之、_(御宗カ) 家族ニテハ尾張・水戸・越前、外侯

ニテハ、土・因・薩ノ如キ英傑之方々ノ面々、_(之カ) 奇ヲ計ル

ト雖トモ整ハサリシ故、轍ニテ其後益衰弱窮リタル幕府ヲ憑ミ攘夷ヲ策ルハ、古今愚策ニシテ、勢決テ行ハレ申間敷、殊ニ如此醜虜ト親睦仕居候幕府ニ御詔ヒ、御合体ノ義ハ、乍恐矢張外夷工御合体モ御同様ニテ、

今ヨリ三年モ過ル中ニハ、居ナカラ腥壇之属国トハ成

果候ハ必勝敷ト奉存候、此度ハ一際拔群之

叡断ヲ以、海内蒼生之弊心一洗憤發仕候様、
勲志ヲ励サレ、

皇国之存亡、玉体之安危此一举ニ御座候得ハ、何卒

々々第一等ノ上策ニ出候様、神速ニ

天決奉仰願上候、誠恐誠惶、頓首敬白、

(文久二年四月八日脱カ)

筑前脱民

平野二郎國臣判

(平野國臣伝記及遺稿・平野國臣伝・勳主文庫・國士模範平野國臣伝にて補誌)

五四八 島津和泉上京ニ就キ供方人名(他藩人所聞)

(島津茂久 薩州藩主)

(久光)

松平修理大夫殿実父島津和泉殿事、此度三郎ト改名、

戊四月十日大坂表土佐堀屋敷工着、中三日滞留、同十

四日川船ニテ登リ、伏見表上板橋屋敷ニ中五日滞留、

同十七日ヨリ京都屋敷へ滞留ニ相成、同五月廿二日朝

辰ノ刻関東エ発駕ニ相成候、併シ夫々持高ノ程ハ相成難候、名前左ノ通、

大管頭御側動
万石以上

小松 帶 刀
(清鷹)

番頭御側御用人
側役兼動

谷川次郎兵衛
(久西)

御馬預リ

志岐小左衛門

小納戸奉行
小納戸兼動

中山中左衛門
(実善)

三郎殿御付

山本五郎右衛門

御小納戸
御供目付
惣頭兼動

大久保一藏
(利遇)

御供目付

原田才之丞

御供目付

有川直次郎

御勅定小頭
新口之頭

奈良原喜左衛門
(清)

表御小姓

大山仲兵衛

御記録方
御ノ間

山田小平太

御馬廻リ

三雲藤一郎

新番

千田傳一郎

御小納戸見習
奥御小姓

種子田市兵衛

御小納戸見習

富山半次郎

御小納戸見習

國分市十郎

御小納戸見習

木藤角太夫

三郎殿御方
奧御小姓

谷村昌武愛之助

河南仁左衛門

新納孫二郎

大山彦之丞

坂元愛之丞

指宿雄四郎

岸良真之丞

相良重右衛門

川上助七

奧勇之丞

中神織右衛門

肝付万之丞

和田郷左衛門

中島健次

田中八郎右衛門

大野藤太郎

城井佐八郎

朝稻三益

山口不及

新納軍悦

奧御小姓御見習
番所詰

御小姓

三郎殿御附

御広敷御用人格
奧御医師

御茶道頭

奧御茶道

奧御醫師

山本俊齊

御家口座
御役

白尾元貞

御用部屋書役

井上直左衛門

三郎殿奧御茶道佐

種々島正八郎

奧掛方役

多東悦

川越方惣奉行
御口士目付場

本郷源左衛門

御勘定方小頭
御側御用人座
書役御側御用人座
書役御側御用人座
御徒士目付
中小姓ノ場

竹下覺之丞

惣奉行見習
横目付

久保八郎

中小姓宿割役人
内御口札
長崎御付人格
御用部屋口役

得能新左衛門

御口士目付

森八郎次

御代官格横目

伊集院直二

中小姓

丹生彌兵衛

惣奉行蔵方
目付勤
人馬掛り御庭奉行御
衣物掛裏方見聞役之場
旅方并御納戸
御進物御納戸
御口目付

四本助之丞

中小姓

御代官格
横目付

相良壯之丞
日高六右衛門
松方三之丞

伏見ニテ深手

同役伏見
ニテ即死

伏見ニテ
深手

折田平兵衛
藪田新平
森岡善助
道島五郎兵衛
吉田清藏
江夏仲左衛門
山口中吾

深手

同薄手

御膳所頭御包丁
頭勤

御膳所御料理人

御勤定方小頭
御旅方換

鈴木源五右衛門
川畑赤四郎
宮内彦次
谷山新助
奈良原喜八郎
次田幸右衛門
戸次半兵衛
湯治十左衛門
石原半右衛門
山内傳兵衛

御包丁人頭
御使番役所
出役

御旅御台所
役人

馬医

御持筒役ニテ御挨拶
長持其外御行列外上
穿領

御時計師

御納戸書役

御仕立物役并
御納戸刀

御刀箱并御用櫃
宰領御納戸刀
御小人頭

御口ノ絡
御私兼場

同御納戸

同御納戸□刀

御總并

町田作右衛門
寺尾新藏
町田作次右衛門

野村傳之丞
大山郷兵衛

阿久根新右衛門
益山新藏

小倉喜兵衛
千葉勇四郎

本田良八郎
滿尾彦右衛門

真川善兵衛
犬童喜平次

榎田作左衛門

玉置直左衛門
永田甚兵衛

吉井善左衛門
尻玉源五右衛門

山下清左衛門

御膳配役御酒
部々兼一代御
小姓

行列□付役

御酒□ヤ御膳配役
御納戸□万

山口 覺助

岡田 右衛門

竹下 林兵衛

水間 十太郎

平瀬 仙隆

倉内 正九郎

内藤 善次

宮内 一郎太

窪田 直八

右之外御軍用方

八千石

北郷久徳作左衛門

右北郷作左衛門事ハ、七八年已前琉球国工魯西亜国

ノ賊船乱妨之節、薩州ヨリ大将トシテ出張、焚打勝

利ヲ得候大豪傑ノ由、此度列〔北郷作左衛門琉球国云々虚説〕

勅使大原左衛門督殿御供ニテ、御警衛ノ大〔マヤ〕

□凡三百余人ト申事ニ御座候、

此外人数百五六十人モ御座候得共、略之、

五四九 培覆論

一橋侯ヲ將軍トシ、越前侯ヲ後見トシ、其外可然人才

ヲ選ミテ有司トシ、幕府ヲ扶テ以テ外寇ヲ攘フト申ス

御説ハ、去年来堀〔伊地知貞憲〕・大久保両兄ヨリモ拝承仕、且当春

密表之趣モ矢張御同様之由、然レハ御一藩之御定説歟

トモ被察申候、乍併実ハ幕府之犯罪ヲ正シ、天朝

ヲ尊奉シ内政ヲ整へ、外夷ヲ御攘斥被成度御了簡ニ被

為在候得共、若然スル時ハ却テ内争ヲ引出シ、外寇ニ

隙ヲ窺ハレ、終ニハ恢復モ攘夷モ行ハレ間敷トノ御懸

念ヨリ止事ヲ得ス、権道御用可被成候トノ御趣意、一

応御最ニ相聞申候得共、其説ハ癸丑年砌〔幕威〕ニ未タ

衰ヘサル時ノ事ニテ、既ニ宗族ニハ水戸烈公・尾州公・

越前侯杯打揃ハレ、列侯ニハ順聖公ヲ初メ土州・宇和島

侯杯、色々手ヲ尽シ忠告竭力有之候モ、却テ淫罰ヲ蒙ラ

レ、一事モ行ハレス候、子細ハ已ニ英斷録ニモ認メ置

候通、天然ノ帰スル所ニテ、徳川氏自滅スル所以無

疑モノ歟、勿論其頃迄ハ、久敷徳川ニ制令ヲ受候余恩

モ有之、人心未全ク離レサル時ニ候得ハ、右良族賢侯

等之策尤当レリト云ヘシ、若シ其時誤テ事ヲ挙ケ候得

ハ、承久ノ乱ノ如ク、却テ関東ノ為メニ傾覆ヲ取候事

必然歟、然ルニ當時ノ勢ハ、江戸旗本ヲ初メ府内ノ人

民ニ至ル迄、聊物ヲ弁ヘタルモノハ皆、幕府ヲ恨ミ侮リ候程ノ事ニテ、増シテ諸國ノ士民ハ路頭ノ咄ニ迄、不断惡口輕蔑イタシ候程ニ至リ候、幕府ヲ如何ニ扶候共徒ニ骨折ニテ、迎モ角テモ行ハレ間敷、迂論窮ルト云ヘシ、假令

天威ヲ契奉リタル上、勅詔下リ候共如何成人^(レ)ハ、一橋侯ヲ城中ニ請シ入可申哉、益姦賊ハ姦計ヲ震ヒ、^(被脱力)当將軍年若トハ雖モ、廢官ヲ快トハ思ヒ申間敷、夫ハ兎モアレ、カク迄天道已ニ叛キ、人心ニ離レタルモノヲ、何ヲ憑ニカヲ尽ヘキ哉、畢竟天下ノ士勢ヲ智ラレサル僻論トモ云ヘシ、唯形ヲ以テ覽被成タル上ヨリノ事ニ御座在ベク候、惣テハ大小衆寡ハ形ニテ、画図ニテモ見ラレ候モノニテ、約スル所死物ニテ御座候、人心合離強弱張弛ハ勢ニテ、刃陸ニ居ナカラ見ラレ候モノニテハ無之、極テ活物御座候、是ニ因テ考見候ニ、先日向田ニテノ御議論ニ出ル処、形ヲ以御覽被成候処ヨリ起リ候カト相窺レ申候、古來英雄豪傑之所置多ク勢ニ拠テ、形ニハ抱ク^(拘リカ)不申敷ニ候、譬ハ元弘之乱新田氏ワツカノ兵ヲ以、鎌倉十^(真力)万ノ勢ヲ追落シ候モ、北條氏人心離タル故ニテ、義助ノ見ラレタル処ハ則勢ニテ御

座候、是又大小衆寡ハ、曾テ論セサル処ニテ御座候、扱、先日敵ノ多ケレハ多キ程味方ノシマリト申上候モ、コ、等之事ニテ、所謂小敵ノ虜ト申類ニテ決テ無御座候、怒策ヲ發候余リ、細密ノ弁論ニ涉リカタク、一時^(氣力)ノ暴言ハ御ユルシ可被下候、且當時天下ノ勢ハ、^(形脱力)假令ハ帆船ノ河水ヲ泝カ如ク、風帆ハ台令ノ陽形ニテ、水流ハ 綸命ノ陰勢ニ御座候得ハ、一度順風ヲ止シムル

時ハ、忽チ水勢ニ随テ流レ下リ候義、本然ノ勢ニ御座候、其上苞桑ノ勢タル 幕府ヲ、压倒成カタキ位ノ御微運ナル 天威ニ被為在候ハ、イカニ我々如キ微臣粉骨ヲ尽シ候トモ、恢復ハ勿論四夷万国ヲ蹂躪、東海ニ帆影モ不見様、夷船殲滅ハ思ヒモヨラサル処可有御座候、能々御考、^(可被成脱力)角迄犬羊ノ夷等ニ踏付ラレ候様ナル勢ニ相成来候時節、久敷御隱居御同様ニテ、九重ノ上ニ被為込、楊柳桃李ノ手ニ御生育マシマシナカラ、^(古今)不^(不世出ノ力)出世ノ 明天子適 御即位被遊候事、決テ偶然タル儀ニテハ有之間敷、必冥々タル 天祖 大祖ノ余烈、自相顕レ候モノニテ、コ、ニ至テ天朝恢復、明末ヲ扶ケテ西土ノ主トシ、三韓ノ如キ旧貫ニ復シテ、日本ヨリ府ヲ立、年貢ヲ捧ケシメ、永ク

兄弟ノ交ヲナシ、我ヲ兄国トシ彼ヲ弟国トシ、カヲ合

セ百蛮蠻文ノ戎奴ヲ馭制シ、諸蛮屈伏、華ヲ以夷ヲ變

シ、天之所覆地之所載、万緒億端、我

神州ヨリ興起シ、皇化之四表ニ光輝スル時節到来ト

可被思召安候、愚見ノ処大略如此ニ御座候、返々モ

天命人心御戻シ被成、柔弱ノ御説ハ何国迄御除可被成

候様、乍憚御異見申上候、穴カシコ、

右之説ハ全ク御親征ニアラサレハ、天朝恢復ハ難

相成ト申処ヨリ起候訳ニテ御座候、御苦勞ト申ス迄モ

ナク、無勿体事ニ御座候得共、天命ノ歸スル所勞ノ一

ツニ御座候ハ、申迄モ無之、御案内之御事ト奉存候、

御親征ノ功アルコトハ、承久ノ乱義時ノ如キ大惡逆サ

へ、泰時引返シ相尋候時ノ答、若

上皇ノ御親兵ニ逢奉ラハ、脱甲断弦、奉命ノ外更ニ所

置アルヘカラスト申候事モ御座候得ハ、

鳳輦錦旗勳候時ハ刃ニ不血シテ、忽チ天下一統シ候義

無疑カルヘシ、一着ノ上朝鮮遊歴、長毛匪ノ交会相案

居申候、可笑、

天皇ハ神ニシマサハ内外ノ醜ノ夷等タチムカハンヤ

壬戌正月 二日脱之

〔薩藩脱之〕

〔梁山〕

道隆賢兄

寒羽両賢兄

〔別之〕

掛紙曰、

〔稱口録三〕

ンサスカ歎ニ

トノ説ハ、

断テ死地ニ入、

策ニ無之、

五五〇

文久二壬戌年ノ三月頃

中ニ於テ御老中久世大和守殿へ被申述候

大意ノ簡

長州侯建白之旨ハ兼々申立モ有之候処、

城ニテ久世候エ面会被申述候趣、

之御為、存意建白仕度段申立置候処、

追々天下之形勢変革仕、

大御改革無之テハ相成間敷、

節ハ、井伊殿了簡ヨリ万事御暴政之筋而已ニ成来候処、

國臣拜「平野」

〔采〕

〔折〕

〔分〕

〔研北脱之〕

〔正治〕

〔春秋、魯の季孫行父〕

〔在之〕

〔平野國臣伝記及遺稿にて補註〕

井伊殿退役後ハ安藤殿專權ニテ、井伊段御在職之有様

(信睦、老中)

ヨリ甚敷御暴政ニ相成、天下中人心尽ク徳川家ヲ離レ
居候、既ニ鍋島家杯内願之趣ニテ、隱居被 仰付候処、

右ハ 徳川家最早迎モ不被救事ト存、内実ハ専ラ一国
富強シ、目論見ニ有之、大藩共各一国々々ヲ守候様之
形勢、皆 幕府之御仕向不宜処ヨリスハ相成、 徳川
家御為誠ニ苦心之至ニ御座候、夫ハ扱置

和宮様御下向之義ハ、御下向ニサへ被為成候へハ、

將軍家直様御上洛ト申事、各方御調印モ在之、誓書御
立被成候程ニハ無之哉、然ル所其後之御様子致拜見候
処ニテハ、御上洛之処ニテハ無之、如何ニモ京師ヲ御
踏付被遊候訳ニテ、万事

天朝ヲ御欺被遊、御輕蔑モ最甚敷ト申、此節於京都

天子御逆鱗、宮堂上方一同憤激不一形、只今ニ 徳川
家如何様ニ欺相成可申哉、 上ハ京師之御模様ト申、下
ハ人心之背叛ト申、実ニ危急累卵之御場合ニ御座候、

大御英断不被為在候半テハ相成間敷旨、睨ト論談有之

(正問)

候処、久世侯愕然之御様子ニテ、其英断ハ如何様之義

ニ候哉ト被承候処、長州侯黙シテ久世侯之顔ヲ睨ミ、
稍久敷答モ無之処再三承り度被申候ニ付、左程迄ニ御

聞被成度之存意之事モ、御英断ニ相成候事ト相見へ候

間、可申述候、今日ノ処ニテハ御懿親ト申、人才ト申、

(松平慶志)

是非越前守殿御大老ニ御引上ケ、一橋殿ヲ御補佐ニ御

用ヒ被遊、折々御 登城ニテ御相談モ有之、其外川路・

佐々木等ノ如キ正義ヲ以、廢黜仕候者、有志之者不殘

御役方へ御用ヒ被遊、往々は迄之御政事、御復古之御

手段之外ハ有間敷旨被申述候処、其勢如何ニモ恐敷、

久世侯答ニハ、誠ニ御申聞之趣御尤至極ニ御座候、何

分尽力可申候、乍併私一人エ御申聞ニテハ差支候間、

(信睦)

(金吾)

同列一同エ御申聞被下候様トノ事ニテ、内藤・本多等

一同列席ノ上、前条ノ意味又々被申述候処、何モ驚人

候様子ニテ更ニ無言ニ有之候間、長州侯殊之外憤激有

之様子ニテ、御答モ無之ヲ見レハ、愚意ノ趣御決断ニ

不相成事ト相見候哉ト被申候処、一同決テ左様ノ訳ハ

無之、微力ニテ如何共不安心ニ存候旨、及答ニ候得ハ、

長州侯重テ弥幕府ニ於テ紀綱御一新之勢モ無之、京都

エ御申訳モ不被遊、人心ヲ御慰撫之御手段モ無之候ハ

、最早此上ハ

天子ヲ挾テ、四方エ号令仕候外ハ無之、此度薩州・肥

州等申合候事モ御座候間、弥御決断モ無之候ハ、右

様仕心得ニ御座候、左様相成候節ハ、流石丸ル御肩申心得モ無之候間、急度御了簡被成候様トノ事ニテ、老中一同其雄威ニ恐レ、早々申合可申旨答ニ付、長州侯被申候ハ、京師ノ御模様御疑惑ト成候ハ、家來長井雅楽ト申者、此義能々心得居候間、此者ニ御尋可被成旨申述、退散被致候由、何分老中一同顔色ヲ変シ、早速長井雅楽ヲ呼出シ被尋候処、成程長州侯被申述候ヨリモ大變成有様ニテ、一段苦心モ相増、何事ヤラン十二日幕命ヲ以、長井雅楽京都エ発足致候趣、

長井雅楽、五月初旬又々出府致候由、

(毛利元徳)

長州若殿長門守殿四月末京着、依

勅定在京之事、

右長州侯家中エ問合候処ニテ、何様ニモ——説ニハ無之趣御座候、則毛利家ノ人付札致候、右之両隠居之処鍋島ヲ名差不申由、天子ヲ挟ミ口上不申由、丸肩不申由、

三公御役人モ皆是ヨリト申事ニ御座候、

五五一 亞露英佛四州盟約書和辞

我各国往年来、日本國ヲ属國タラシメンコトヲ謀ルト

雖トモ、彼國ハ我紀元ノ始ヨリ諸州ニ独立シテ他ヲ交ヘズ、加之勇壯一、世界中其右ニ出ル國ナシト、淵底恐怖ノ心無ニ非ズ、此頃年墨國其魁トナリ、書ヲ以テ和親ヲ求メ、驕威ヲ以テ互市ヲ謀ルニ驚易シテ許諾ス、是ヲ以テ察レハ柔弱清國劣レルコト遙ナリ、實ニ累年延期セシコトヲ悔、知弁ノ不足モ又嬰兒ヲ欺クニ類ス、因此遠謀成就近キニ有ヘシ、彼八港ニ商館ヲ開クトキハ、國則ヲ以テ國民ヲ近傍セシメサルコト甚シカルベシ、故ニ推歩モ数里ヲ以テ限ルヘシ、八港ノ外漂流滞船ヲ可許ス、然ルトキハ日本ノ費用ヲ不借ヲ以テ誓約セハ、滞泊数日ニ及ト雖モ、愚昧ノ國吏委諾其妨ナカルベシ、是我大幸トスル処ナリ、商館ニ在滞セハ、近界商家利弁ノ利潤ヲ得セシメ、耕民ニハ往々我租税ノ薄キヲ説キ、愚民ニハ我教法ヲ説諭スヘシ、加之風波ニ託シ、漂流ト称シテ数艘ヲ八港ニ集湊シテ、臨機応変、兵庫ヨリ発起テ京師ニ入ラハ、王都ヲ握ランコト掌ヲ指ガ如ケン、同時神奈川ヨリ蜂起シテ江府ヲ襲ハ、東西ニ惑足シテ和兵手ヲ束ヌニ至ラン、于時下田(静岡縣)・浦賀(神奈川縣)ノ兵ハ東西ノ遊軍タルベシ、新潟ノ商館ハ北越ノ運送ヲ可妨、箱館又同奥羽兩國ノ糧ヲ動スコ

ト勿ラシムベシ、如是ンハ必勝日ヲ以テ可數、情々紀

元ヲ復考スルニ墨国智ト云ヘシ、始メ書ヲ以テ和シ、

次ニ互市ヲ乞ニ信義ヲ以テ謀リ、是ヲ許諾スルトキハ

募ル^(ニカ)、弱ヲ以テス、功勞最第一トスベシ、書簡贈答ノ

延速ヲ以テ強弱ヲ知ルコト神妙ナリ、返翰ノ拙文ヲ以

テ、言行ノ危ヒ一ト愚ナルヲミルニ足レリ、速ク事就

ノ上ハ、入貢米穀ヲ第一トセン、下田ヨリ以東ハ亜国

領スヘシ、以西ハ兵庫ヲ限リ魯国領スヘシ、兵庫以西

ハ佛・英兩國領タルベシ、前条違乱不可仕盟約状如件、

此書フシギニ薩州ノ手ニ入シヨリ、皇都警衛ノタメ

諸侯在京ノヨシ、併秘中ノ秘ニシテ、猥ニ世上ニ洩

シコトヲ恐ル、決シテ愚輩ニ洩スヘカラズト云、

五五二 戊五月朔日松平長門守へ被仰下候

御沙汰書

其元此度通行ニ付、暫於京都滞在候様

思召候儀ハ、元來其家ノ儀ハ元就被重

朝廷候儀ハ、今更御沙汰モ事新敷候、右等御由緒モ被

為在候処、先達テ父大膳大夫、我夷跋扈御国威遠巡之

儀ヲ被相歎、勤王ノ志ヲ主トシテ幕府ヲ助、至治ノ基

本ヲ被立度趣意ニテ、柳宮申談之上公然ト公武ノ御間
ニ被周旋、全

叡慮ノ被為問候処、幾重ニモ丹精可有之趣、以家臣永

井雅樂委曲ノ事情内々言上、国忠之段深

御満悦被為在候、然処雅樂儀ニ帰府ニ付テハ、大膳大

夫建白之旨趣未徹底、御残念ニ 思食候処、幸其元上

京ニ付テハ、父朝臣ノ深慮ニ随イ、程能周旋可有之御

依頼思食候、此段内々可申達トノ 御沙汰候事、

但當時浪士蜂起鎮静之処、内々島津工御沙汰被為在

候得共、其藩ニ属候輩モ不少旨ニ付同様取締、并

方今非常之變何時不生モ難計形勢候、其節ハ薩州

ノ力ヲ合可有鎮静ノ計、是又

御沙汰之事、

五五三 文久二壬戌年五月廿日藤堂候上書写

先年ヨリ愚存ノ趣申上候儀ニ有之候処、天下ノ形勢殆

累卵之場ニ相成候得共、此上ノ御所置毫髪モ御謬誤被

為在候時^{ハカ}ノ被対

天朝ニ御申上訳モ無之、且ハ 神祖ノ御鴻業モ忽墜地

可仕、左候テハ忠孝ノ道ニモ被為背、万民塗炭ニ陥リ

候事、実以不堪痛哭之至候、尤右ヲ挽回可仕策略等無御座候得共、世上ノ光景御心得ニモ相成可申哉ト、不憚諱忌左ニ申上候、

一凡物事ニハ本末ト申儀有之、其本末不失順序候時ハ、雖国天下可治、若顛倒仕候得共、一家一身如キモ不齊事、古今同一ニ帰シ申候、既諸蛮於横濱港互市通商御許容ニ相成候根元ヲ細訳仕候ニ、一時之權道ト申ニモ無之、又ハ有無ヲ通シ、四民一統融通相附候筋ニモ不相成、其実ハ必竟夷狄之跳梁ヲ被爲厭、因循苟且之御政事ニ帰シ候儀ト奉存候、其大概ヲ挙テ申候得ハ、兼テ臣国条約ノ儀ニ付、禁廷工御伺ニ相成候処、深被爲惱歎慮候ニ付、諸大名存念書指上候様被

仰付候内、魯・匝両国ヨリ英・佛ノ軍艦近々渡來可仕、諸国全勝ノ勢ニ乗シ押掛候ニ付、応接甚御面倒ニ候間、夫迄ニ仮条約御承知之調印相濟候ハ、英・佛ヲモ如何様ニモ可申諭ト亞使節申上候処、右ハ

禁廷工御申上濟ニ相成不申候テハ、御取計モ難被遊、併清国ノ覆轍ヲ踐候テハ不容易候ニ付、不被爲得止調印ノ上、使節工御渡ニ相成候、其節モ同志ノ面々連名ニテ申上候通、如前条危殆ニ相及候ハ、不被爲得止御

所置ニモ可有御座候得共、迅速ニ御使ヲ以、右ノ事情一応天意御伺モ可有之、乍去

勅答以前ニ大患相生候場合ニ相成候テハ、御不本意ニ付、臨機ノ御所置モ無御余儀訳ト奉存候得共、

天意御伺之御使不被差上調印御渡ニ相成候テハ御違

勅ニモ相当リ、御尤ニモ不奉存候段申上候事ニ候、其後

前条ニ付、尾張中納言殿・水戸前中納言殿・松平越前

守登 城、種々議論等有之趣ニ候処、過激切迫不敬ノ

儀共ニ付慎致^(被) 仰付、猶又委曲ト心得不申候得共、於

京師鷹司殿始夫々慎被 仰付、其外匹夫ニ至迄罪ノ輕

重有之候得共蒙嚴咎候杯、是以無御余義御訳柄トハ奉

存候得共、其本ハ尊 天朝惡夷狄候ヨリ事起候得ハ、

道理ニ於テハ正敷事故、今一段御斟酌有之可然歎ト奉

存候処、前願ノ通忠肝義膠^(烈乙)ノ士モ被爲刑候ニ付、右之

党類弥増々憤怒激發仕、遂ニ彼是狼藉等有之候得共、

異人交易相始候テヨリ、何一ツ本邦ノ御爲筋ニ相成候

事モ無之、加之物価ハ追々騰貴ト相成、閭閻ノ小兒ニ

至迄異人ヲ惡候事、蛇蝎ヨリモ甚敷、上ハ從

朝廷下士庶人ニ至迄一体同心ノ事ニテ、幕府而已格別

御優待被爲在候様ニ相見候、其内異人トシテ本邦人ヲ

防禦致候様ニ相成、右等総テ本末顛倒トモ可申奉存候、
諸英国ヨリ相願候沿海測量可仕段御触御座候処、私領
分伊勢国ノ義ハ

神廟切近ノ事、寸土モ夷狄ニ被為穢候テハ不相成候間、
其段追々願置候ニ付、先志州海岸ハ碇泊モ不仕通船
相濟、此儀ハ難有奉存候事ニ候、然ル所近来御殿山ヲ
夷人館ニ御取定相成候杯ハ、有志ノ者長大息仕候儀ニ
テ、左候テハ海中ノ御炮台ハ悉皆夷狄ニ被下候モ同様
ノ儀ニ御座候得ハ、此一事ハ早速ニ御破却ニ相成候様
致度奉存候、前条申上候通、士氣踊躍仕候折柄、如漢
土為夷人不被致誘導候事ハ恐悦至極ニ付、此上ハ士氣
相奮候様御報舞有之候様奉懇願候、斯相成候得ハ、夷
狄何程之難題等申出候テモ、応接ノ上御手引相成候事
モ御座有間敷ト奉存候、何レ夷人ヲ此レニ御差置候テ
ハ、

御国辱ハ申上候迄モ無之事故、攘夷ノ処御英断ノ程偏
ニ奉希上候、此舉被為在候ニ付テハ、如当節人心携
式、各疑惑ヲ抱候様ニテハ、事ニ触レ禍起蕭牆可申候
間、不取敢 公武御合体・海内一致ニ相成候様御仕向
被為在度、甚差越候儀ニ御座候得共、其御所置ト申テ

外ニハ有之間敷、嚮ニモ粗申上候通、近来被對

天朝御不実御不敬ノ儀モ有之、安政^{五年}以後ノ御政事
何トナク御苛割^{刻力}ノ様ニ奉存候ハ、右ノ件々宛然如日月

ノ蝕御改被為在候事ヲ、天下へ御示シ被遊度、其内此
頃承知仕候ニ、先年慎被仰付候堂上方并尾州殿ヲ初、
今般御有免被仰出候趣、至極御尤ノ御儀、為天下可賀
事ニ御座候、其外匹夫連モ赤心報國ノ輩ハ、御善視被
為在候時ハ、自然緩急ノ節屹度御一臂ニモ相成候事故、
吳々モ如先年嚴刑峻法ノ御沙汰無之様仕度、左候得ハ
却テ反噬ノ御憂ハ無之事ト奉存候、乍去先右ハ一小事
トモ可申、第一 禁廷エノ御詫不被 仰上候テハ相濟
申間敷、細ニ申候ハ數ヶ条可有御座候得共、其大綱
ヲ挙テ申候ヘハ、

皇妹御降嫁杯ハ御模様モ被為在候趣、然ルヲ曲テ被為
任御願候トハ、返々モ無勿体御事故、此度御改正ノ期
会ニテ、

大樹公御上洛被遊、御直ニ

皇妹御降嫁ノ御礼ハ申上候迎モ無之、夫ヨリシテ近来
御不実御不敬ノ御断等被仰上、且責テ被慰

宸襟候様ト申御廉ニテ、春秋二季ニハ行幸被為在候様

相成候ハ、稍天下ノ士拜伏モ可仕、猶又御上洛モ中古御廢絶ノ事故、俗吏共ハ不可然様可申上モ難計御座候得共、近ク

〔徳川幕〕 慎徳院様日光 御社參ノ儀モ有之候得ハ、右モ大同小異ト奉存候、此儀弥御治定ノ上ハ、夫力為ニ海内疲弊不仕、可成文御手輕ノ義被 仰出候得ハ、一同感服可仕ト奉存候、斯相成候得ハ、自然

公武御合体ニテ、海内一致ニ相成可申候間、其機會ニ乘シ夷狄御打払有之、征夷大將軍ノ御名為輝可申、左候時ハ被為協

天意候而已ナラス、万民安堵可仕、実ニ

神祖ノ御鴻業ニモ被為劣間敷ト奉存候、斯ク相成候モ本末順序ヲ瞭然ト被遊、被為得機會候故ノ儀ト奉存候、对 政府右様ノ儀申上候ハ、所謂遠東白豕ニ御座候得共、万一御採用モ被成下候得ハ、本懐ノ至奉存候、已上、

五月廿日

〔高取、津藩主〕
藤堂和泉守謹白

五五四 勅使大原左衛門督殿衆ヨリ兩伝奏衆へ被

差出候書付

今度 勅使〔天原風運〕左衛門督殿関東工御下向ニ付、往還路上ハ勿論、在府中登城并諸家被行迎候節、夷人往来ヲ堅ク被相禁度被存候、此度ハ出格之

勅使ノ儀ニ付、於途中夷人共行逢等猥リケ間敷義ハ、御朝威ニモ相拘リ候儀故、嚴重ニ被加制正候様、夫々工急度相違被置候様被致度、此段宜武刃工通達ノ儀頼入被存候、

五月

大原左衛門督

雜掌

〔風堡〕
廣橋様

雜掌御中

〔後志〕
坊城様

雜掌御中

大原殿五月十六日御發駕可有之処、御持病眼疾差起、十五日夜ニ御發駕御延引被 仰出、
同月廿二日巳ノ下刻御發駕ニ相成候事、

五月十一日ヨリ

議奏御加勢

〔廣志〕
日野中納言殿

〔信濃〕
長谷三位殿

五五 文久二壬戌年五月阿州侯上書

不肖ノ私、不輕

御大政彼是申上候如ハ奉恐入候得共、当今内外ノ御処置、公平之二字御專務ト奉存候得ハ、御近親ニモ相列罷在候、旁越俎之罪ヲ不憚見込ノ次第申上候、御忌諱ニ触候儀モ御座候ハ、御取捨可被下候、抑十箇年来天下ノ形勢朝暮ニ變化シ、幕府ニ於テ御手ハ尽サセラレ候得共、外患ノ事ハ

神祖御貽謀之 御意表ニ出候事ニテ、日新究理ノ外夷ニ対シ、膠柱刻舟ノ法ハ行ハレカタク、然ラハ交易通商御許容ハ素ヨリ、御深慮ノ上御事ト奉存候得共、是迄外夷ノ御取扱或ハ正太ノ道ヲ失ヒ、彼ヨリ申立候願筋ハ、何事ニヨラズ遁辞ヲ以固ク御拒、再三申募候ニ至テハ無御抛、彼力存意ノ尽ニ御許容相成、日本海岸枢要ノ地悉巨大ノ港ヲ開キ、其猖獗ノ情態人々痛歎ニ堪ヘン、畢竟 幕府打統御代相促シ、御政務御多端ノ御時會、自然因循苟且ノ御策ニ出候御事ト奉存候、此形勢ニテ推移候ヘハ、終ニ腥羶ノ域ニ趨リ可申候、既ニ江戸表ニ於テ度々ノ狼藉モ有之、猶又

輦轂ノ下ニ浪士聚嘯致シ、不容易ノ事柄申立候モ、全ク人心ノ不服ニ起リ候儀ト奉存候、此度

勅使參向ニ付テモ、勅諭ノ御旨趣ハ素ヨリ難奉恐察候得共、兼々外夷御取扱ノ儀ニ付テハ、

御慮御不滿ノ御儀モ被為 有候哉ノ風聞承知仕候得ハ、自然右等ノ事件被 仰進候御事ト奉存候、然ルニ於テハ、公武ノ和不和、皇國ノ御安危至極御一大事ト奉存候、就テハ此度ノ御一挙ハ深く御慮ヲ被為廻、廟堂ノ御謀議、勉メテ公平穩妥ノ道ヲ尽サセラレ候様、不肖ノ私到願不_(志)過ノ奉存候、抑太平ノ宿弊ヲ除キ、十年来ノ御所置ヲ一新シ、天下ヲ盤石ノ堅キニ措キ、無窮ノ御國運ヲ御保被遊候モ全此機ニ御座候、將又公武ノ確執ヲ生シ、応仁ノ乱兆ヲ醸シ、國勢瓦解シテ、足利氏ノ覆轍ヲ蹈セラレ候モ此會ニ可有御座候、仰願クハ非常ノ人材ヲ選ハレ、御國政ヲ更張シ、万人ノ眼ヲ防_(志)觀シ、永ク蒼生ノ塗炭ヲ免カレシメハ、上ハ宸襟ヲ安フシ奉リ、次ニ

神祖ノ御遺刻ヲ継セラレ候ハ、無此上 御忠孝ト奉存候、尾張殿・紀伊殿・水戸殿・一橋殿・尾張前中納言殿ハ、田安殿同様折々登 城被 仰付、存志ノ次第御

尋、御親敷 御相談被為 有度奉存候、誠ニ 御一門ノ御一和天下御安全ノ御基ニ候ヘハ、松平春嶽御委任ノ御儀モ実ニ御の当ト奉存候、其外松平閑叟ハ賢明ノ聞ヘ有之、時事ニ練達ノ者ニ候上、当時隱居ノ自分ニ候ヘハ関東エ被 召寄、御參謀ノ御一助ニ御備ヘ可然奉存候、藤堂和泉守・伊達春山等老練ノ者ニテ、国政モ彼是行届候趣ニモ候ヘハ、平素折々登 城被 仰付、何角御尋等被為有可然敷、加賀・薩摩・仙臺ハ巨大ノ雄藩ニテ、東西北ニ鼎峙シ、全国ノ休戚ニモ係リ候国柄故、別シテ御優待ノ御品被為有可然奉存候、其他五畿七道ノ大小名、長州・肥後・筑前・安藝・備前・因州・土佐・久留米・米澤・柳川等ヲ始メ、孰レモ時事憂慮イタサザル者ハ有之間敷候ヘハ、得失利害 御尋等被 仰付、 御勤奨被為有候ハ、可然奉存候、次ニハ御旗本ノ面々、有志ノ者モ数多可有之ニ付、同様ノ御処置被為有候ハ、可然奉存候、水戸故中納言殿・松平故薩摩守ハ不凡ノ才識有之候人故、在世中建白致シ置候儀モ候ヘハ、御斟酌被為 有度奉存候、其余故江川太郎左衛門・故向山源太夫ノ類、御旗本陪臣共識見有之候述言ノ内ニハ、定テ良策モ有之ニ付、御取捨

有之度奉存候、右ノ姿ニ全国忠義ノ氣ヲ鼓舞シ、輿端御取用被遊、猶又於

廟堂精々御參酌被為 有、勉メテ公平的の當ノ御道ニサエ帰シ候ヘハ、上 天子ヨリ下万民ニ至ル迄、聊異論ノ生シ候道理モ有之間敷候、公私ノ二字ハ治乱ノ根元ニテ、実ニ可慎可畏ノ至ニ御座候、北條時宗身ハ四位ニ在ナカラ、外ハ蒙古ノ強敵ヲ挫シキ、内ハ衆情ヲ鎮静仕候モ、全ク処置公平ニ起リ候事ニテ、後世伝ヘテ美談ト仕候、方今天下ノ御勢ヲ以テ被思召込候御事ハ、何ニテモ可被為遂候、然ルニ却テ彼カ功名ノ下ニ屈ヲラレ候ハ、無限御口惜シキ御事ニ御座候間、此等ノ事ニモ御感激被為 在、一度御処置ノ御道ヲ被為成候ヘハ、

皇国ハ勿論 御威徳遠ク海外ニ溢レ可申、返ス／＼モ不肖ノ私、身分ヲ顧ス暫愚ノ妄説奉瀆 御聴候敷ハ奉恐入候得共、臣子ノ私情犯人ノ憂ニ堪難ク、尚又管見ノ次第左ニ申上候、

一世上ノ風聞承候処、
皇妹降嫁ノ上ハ、
公方様御上洛可被遊、於 京師ニモ只管 御企望被為

有候ヤノ趣、此事 公武ノ御美事ニシテ、君臣

御婿舅ノ御間柄、御尤ノ御事ニ御座候、釐降ノ義ハ、

武家未曾有ノ盛典ニシテ、御当家ノ御栄花御面目被

為余御身、幕廷ノ有司大小侯伯士庶ニ至ル迄、歎欣

抃舞ノ懷、何事カ是ニ過可申、依之降嫁ノ御上ハ、速

ニ

御上洛被遊、御親敷

天顔ヲ拜セラレ、御婿舅ノ御情 公武ノ御親ヲ厚フ

セラレ、且外夷開鎖ノ御意味モ被 仰合、益忠孝ノ御

道ヲ尽サセラレ候ハ、実ニ 〔徳川家光〕大猷院様御已来ノ御補闕

ニテ、群下ニ於テモ懇願ニ御座候、去ナカラ方今外夷

猖獗ノ兆ヲ顯シ、海防多虞ノ时会ニ当リ、遽ニ久絶ノ

盛典ヲ挙サセラレ候ハ、第一度 〔支度力〕支ノ經費莫大ニテ、御

軍國ノ御預備ニ関係可仕哉ト奉存候、其外大小名ノ罷

弊宿駅人馬ノ勞擾モ如何計可有之哉、且外患孔熾ノ折

カラハ、御軍艦其外器械ノ御製造、御台場 〔築船力〕ノ御建、大

小砲ノ御鑄造、御旗本・御家人ノ御营救等、最緊要御

専務ト奉存候、然ハ仮令如何様被 思召込候ハ、

御上洛ノ御事当時御行 〔取脱力〕ニハ難相成候、若又強テ御取行

ヒ被遊候ハ、前条申上候御軍國ノ御預備、是カ為ニ廢

欠シ、貔貅八万ノ士御手当御行届兼可申、万一罽隙遽

ニ開時ハ、一敗塗地ノ御形勢ニ御座候、依之始テ三四

千日程ノ御延引被 仰出、右ノ件々遂ヘ御奏聞有セラ

レ、天下ノ為ニ 御私情ヲ御奪ヒ被成、御武備充実、

天下小閑ノ時ヲ待セラレ候様奉存候、

一京師エ被進候御賄料、御手薄ト申上候儀ニハ無御座候

得共、当今ノ世柄ニテハ如何テ有御座哉、尤鎌倉已来

天下ノ万機都テ武家エ任セラレ、垂拱無為ニ太平ヲ被

為受、御所向御經營其外御用途臨時ニ被為 進候得

共、十箇年来諸物ノ価翔貴シテ下リ不申、若クハ旧来

ノ御高ニテハ、御欠乏ノ御事可被為有哉トモ奉存候、

何卒旧日ニ一倍之御増被進候様相成候ハ、御尤ノ御

道ト奉存候、

一王室御代々ノ山陵ハ泉涌寺御収ノ外、往古遷都ノ御事

度々有之候故、五畿内所ヲ定メズ、或ハ煙没シテ其前

ヲ失ヒ奉り候モ有之哉ニ相聞候得共、別テ御拝掃ノ典

故相行レ候様ニモ不奉伺、是等ノ御事ハ実ニ

皇国忠孝節義ノ氣ヲ引起シ候御基ニモ可有之候間、何

卒闕東ヨリ時々御修復等ノ御世話モ被為 在、歳時御

拝掃杯ノ御礼モ行ハレ、祖宗在天ノ靈ヲ慰メラレ候

ハ、御祚運御長久ノ御基ニモ可被為 有ト奉存候、

一方今海内ノ物騒其根底ヲ勘定仕候処、畢竟慷慨氣節ヲ相唱候浪士共、深ク外夷ノ猖獗ヲ憤歎致シ、一度ヒ彼

ト豐隙ヲ生シ、廟堂ノ御策ヲシテ、必攘夷ノ御処置ニ

帰セシメ度存込候ヨリ起リ候儀ニシテ、其跡頗ル不勤

弁ニ類シ候得共、兎角身命ヲ抛チ、御国体ヲ尊崇イタ

シ候情実ハ可憐ニ悲ノ至御座候、此度京師ニ於テ島津

和泉久光ヲ要訴致シ候事柄モ、全ク右ハ同趣意ト奉存候、

其外尊王誠忠ト相唱候派モ御座候趣ニ相聞候得共、全

公刃御法度ヲ犯候儀故、万々御差免ハ難被成候、乍去

一々本科ニ処セラレ候様相成候ヘハ、彼等素ヨリ必死

ノ徒御座候ヘハ、必益固結致シ、大猷院様御代島原ノ

賊ハ、全ク逆乱之兇徒ニテ御座候得共、僅々タル一城

天下ノ兵力ヲ尽シ、板倉内膳重員、深澤等モ正是力為ニ戦死シ、猶彼

カ飢斃ヲ待テ纔ニ凱歌ノ功ヲ奏シ候、況專崇國ヲ相唱

候浪士、断然必死ノ心ヲ極メ候時ハ、外国多患ノ折カ

ラ、如何ノ形勢ニ相成可申哉ト深心痛仕候、此儀頗御

寛典ニ従ハセラレ、其形迹ヲ罪シテ其情実ヲ恕シ、諸

国浪士都テ旧主ヨリ穿鑿ヲ遂ケ、不勤弁ノ次第能々申

論シ、悉旧職祿ヲ安堵セシメ候様被 仰付、或ハ於旧

主最難見免科条有之候其脱力、此度ニ限り一先大赦ノ例格ニ

ナラヒ候様被 仰付度、国家ノ御為ト存込候者ニ御

座候ヘハ、権道ヲ以右ノ御処置ニ被 仰付方可然奉存

候、

一五外国ミニストル館ノ儀、品川御殿山御貸渡相成、此

頃外牆其余共大凡出来ノ旨ニ御座候、右土地御貸渡ニ

相成候御趣意柄ハ不奉存候得共、元来外夷通商御差免

ニ相成候儀タニモ、全国人心折合ニ係リ候位ノ事ニ候

ヘハ、昔年

公方様御床几ヲ居ヘサセラレ候御場所、外夷工御貸渡

ト申事ニ相成候ヘハ、御威光ノ陵遲ヲ悲シミ、人情

ノ憤歎ヲ引起シ候ハ、其筈ノ儀ト奉存候、且右場所カ

ラノ儀ハ、江戸肝要ノ土地ニ御座候上、海道ノ咽喉ニ

テ、北ハ 御府内ヲ掌ニ指シ、南ハ内海ニ臨ンテ若干

ノ御国力ヲ費サレ、新規御築建ニ相成候御台場ノ儀モ、

無用ノ贅物ニ相成、万一右場所落成上、外夷ト御取合

ヒノ儀モ有之候ヘハ、海中船艦ト掎角シ、海陸兩般ノ

御患ト相成可申、乍然一タヒ御差免ニ相成候事ヲ今更

御断ノ儀モ、不容易ノ御事ト奉存候得共、人氣騒擾自

然是等ノ御事ヨリ、口実ト致候儀モ可有之候ヘハ、右

場所御断ニ相成、外御場所御貸渡シニ相成候へハ可然奉存候、本来各国通親致シ、諸物交易仕候儀モ、各国ヨ富シ候大趣意ニテ、各国平穩ヲ求メ候儀ニ候へハ、目前一国ノ人民承伏セス、全洲ノ安危ニモ係リ可申儀ヲ、実意ニ談判仕候へハ、承引不仕義ハ有之間敷敷、尤我騒乱ハ彼カ大利ニシテ候へハ、必事ヲ左右ニ託シ、品々恐喝之所為モ可有之、或ハ我ノ夷約ヲ咎メ、兵端ヲ開キ可申杯掛候儀モ可有之候得共、彼モ亦義名ヲ好ミ候得ハ、各々事理ヲ分明ニ申諭シ候へハ、纔ニ承引可仕候、然上ハ御殿山猶又其俣嚴重ニ御出来、海道咽喉ノ鎮衛内海御台場ノ牙場トナシ、親藩ノ内御預ケ被 仰付、可然奉存候、且右御殿山替地ノ儀ハ、本所・深川・小石川川辺ノ内、可然地勢御見立ニ相成、御貸渡被 仰付候へハ、自ら人心モ静リ、御威令御届ニ相成候一端ニモ可有之、且仮令非常ノ異変御座候トモ、内海御台場夫々御用立可申、隅田川モ一ケ度ノ御要害ト相成候へハ、

御府内ノ御手都合宜御儀ト奉存候、若又事筋ヲ分ケ御諭ニ相成候テモ、一度御許容ノ廉ヲ以テ外夷承伏不仕候ハ、御殿山ノ儀ハ其俣是迄ノ通被仰付置、右近傍

ノ地勢小高キ処ニ於テ、一二ヶ所御見立ニ相成、ミニストル館ニ倍シ候岩様ノ物御取建相成、平生彼カ館中ヲ見ヲロシ、逐一其動止ヲ点検シ、万一変事御座候節ハ、速ニ此処ヨリ彼居館エ打入候形勢ヲ示スニ相成、且二本榎辺ヨリ御殿山エノ通路ヲ絶チ、裏手田面ノ迂路一条ヲ残シ置候へハ、何トナク平生彼カ驕抗ノ氣ヲ斥シ、非常ノ御要害可然奉存候、乍然此儀ハ何分御失費莫大ナルヘク候へハ、前文本所・深川・小名木川辺〔石川カ〕エ地所御遷シノ義、精々御諭シ可然奉存候、

一都下ノ人心何トナク外夷ヲ恐怖シ、御廟議モ亦随テ姑息因循ニ出、彼カ兵端ヲ開クノ虚喝常ニ貪婪ヲ恣ニスルノ根本ト相成、容主ノ勢処ヲ換へ候モ、全 御府内土地ノ形勢御取改無之ニ起リ可申ト奉存候、然ハ全洲ノ士氣ヲ鼓動シ、制御一変有テ、外夷防禦ノ御実備被為立候半ニハ、御府内ノ御模様替、内海ノ御備向等御処置有之ニ可有御座候、其御仕法ハ左ノ二件ニ帰シ可申敷ト奉存候、其一ハ兼テ品川洲崎ヨリ起リ、六ヶ所ノ御台場御築建御座候ハ、至極之御妙策ニテ深奉感服候得共、右御台場計ノ儀ニテ、外ニ御備ノ御品無之候へハ、形勢雄壯ニ候得共、畢竟

御実備ニハ相成申間敷候、誠ニ数百万ノ人カヲ費シ、御取迷（建カ）被仰付候得共、其事全キニ至ラサレハ有モ無カ如シ、尚此上四五ヶ処ノ御台場御築立ニ相成可然奉存候、随テ内海ノ形勢、品川ヨリ芝辺マテノ六ヶ処ノ御台場ニテ、仮成ノ事ニハ可有之候得共、鐵砲洲・佃島・深川辺ニ至候テハ一箇砲ノ御備モ無之、六ヶ処御台場ノ彈丸モ及ヒ申間敷敷、就テハ深川・洲崎・佃島・濱（同中央区）御庭三ヶ所工新規御台場御築建ニ相成、尚又中川・刀根両処ノ川口ヘモ御台場御築建被仰付候ヘハ、内海ノ形勢其觀ヲ改メ、所々犄角シテ御実備相立候共可申候、其二ハ右ノ通御台場御築迷（建カ）ニ相成候ヘハ、内海ノ御防禦御堅固ノ姿ニ候得共、

御府内立錐ノ地モナク、人家稠密ニ有之候テハ、非常事変ノ砌、都下一時騷擾ニ彼力火攻其機ヲ得可申ト奉存候、然ハ品川御殿山ヨリ起リ、深川洲崎ニ至ルマテ沿海ノ地、武家・町家ヲ分タン、都テ土地ノ形勢ニ從ヒ、幅四五丁或ハ十四五丁御取払ニ相成、或ハ茂林或ハ竹籬或ハ溝渠・池沼・深田ノ類トナシ、或ハ濱御殿御庭ノ左右肝要ノ場処等ニハ、尚又御台場御築建ニ相成候ヘハ、自然御警衛ノ人数モ省ケ、精銳ノ士卒ヲ以

テ枢要ノ地ヲ守リ候様相成、平生ノ御冗費モ大ニ減損可申ト奉存候、随テ御取払ニ相成候替地ノ儀ハ、青山・四谷・大久保・王子・築井ノ辺ニ於テ、諸大名ノ下屋敷巨大ノ地有之候ヘハ、割合ヲ以被召上、其地へ夫々移住為致候ヘハ大概相約リ可申、米穀諸物ノ運漕等ハ孰モ其道相立可申ト奉存候、然ル時ハ人心自然鎮靜致シ、

廟堂ノ御策略モ右ニ準シテ御施行被成易ク、御武名早々海外ニ轟キ可申、此二ヶ条ハ頗巨大ノ御所置ニテ、多分ノ御失費モ可有之候ヘハ、万一兵端ヲ開候時ハ、御府内百万ノ人民塗炭ニ陥候而已ナラス、御失費モ亦百倍可致、若唯今迄ノ形勢ニ被差置候ヘハ、外夷如何程ノ志願ニテモ、御聞届ノ外御道ハ有之間敷ト奉存候間、返々モ御処置ノ品被為有度奉存候、

一惣体都下ノ人口衆多ニ過、元禄年間ニ比較致候ヘハ、十倍ニモ至可申候、畢竟大平ノ余風ニテ、只管繁華當実ニ誇テ、世界第一古今希代杯申ナラシ候ハ、婦女子ノ識見ニテ、実ハ海内罷弊物価騰踊ノ根本ニ御座候、当実繁華ハ悪敷事ニハ無之候得共、人情安逸ニ耽リ易ク、諸州僻遠ノ土民、一度江戸ニ御奉公居住致候ヘハ、

多分田舎ノ辛苦ヲ厭ヒ、終ニ都下ノ居住ヲ營ミ申候、

是ニヨテ遊手ノ惰民日増ニ弥増シ、徒ニ驕奢ノ風習ヲ

長セシメ候、右ニ付テハ人家ハ追々稠密ニ建継、自然

大火災モ頻年ニ相成、貧民乞食ノ日増ニ多ク相成、実

ニ方今ハ江戸混雜ノ極ト奉存候、前条申上候江戸地勢

御沿革被仰付候ハ、此御処置モ御世話被為 有、都テ

江戸出生ニ無之者ハ本国ノ原籍工復帰セシメ、且諸国

領主・地頭・御代官エモ御達相成、已來人民生国ヲ離

レヌ渡世致候様御取究被 仰付度、右ノ如ク相成候上

ハ日本國中自然遊手ノ惰民少、米麦其外ノ物産共、方

今ニ倍シ候作高ニ相成候ハ必然ニ御座候、如斯都下人

口相減、物情鎮靜仕候上ハ、風俗モ質樸ニ帰シ、物価

次第ニ引下可申、火災モ自ラ稀ニ相成、御膝元一大

楽土ニ化シ可申奉存候、

一右内海御台場御築建、御府内土地ノ形勢御取改等ノ

儀被 仰付候へハ、差向候御実備相立候ニ似候得共、

兵制御變改、御軍制御明備ニ相成不申時ハ、矢張首尾

相調候トハ難申御座候、当今ノ風習其本立スシテ、一

ト通り武技鍛鍊仕候様、被 仰出候迄ノ事ニ候へハ、

十二八九ハ憤発モ仕間敷候、然ハ旧來御制度ノ中ニ就

キ、古今斟酌シ、一万石ニ付テハ士分何人・足輕何人・

軍馬何疋ト割合ヲ定メ差出候様被 仰付、此向ハ於公

刃合シテ一軍ノ御制度ニ取成置、猶又御台場兼々御預

ケニ相成候向ハ、矢張是迄ノ通被 仰付置、其土地ノ

大小形勢ニ準シ、相当ノ実備相立候様、御役々平生致

見分、人数操練ノ次第等、時々御取調ニ相成、右御規

則御一定ノ上ハ、操練軍術折々 上覽モ被 仰付、漸

々斟酌シテ御世話急ラセラレス候へハ、終ニハ孰モ精

明ノ極ニ至リ、御武備充実可仕ト奉存候、就テハ此上

於關八洲ノ御取締ヲ始メ、京都・大坂・堺・伏見・奈

良・長崎・新潟・箱館・蝦夷・伊豆ノ島々等ニ至ル迄、

孰モ從來ノ御制度御改正無之候テハ、是非トモ難被為

叶御時勢ト奉存候、乍去何分御膝元ノ御軍備ヨリ御手

始メ不被為 有候へハ、只有名無実ノ事ノミニ相流レ

可申ト奉存候、

一海軍ノ御所置ハ、皇國全洲ノ安危當今最大ノ御急務

ニ候得共、其事誠ニ不容易候、第一ニハ御軍艦御製造

ノ諸職人ニ乏敷、二ニハ操船ニ熟シ候者少、第三ニハ

天文測量按針ノ備ニ長シ候者多カラス、第四ハ船三鉄

造銃砲ノ鑄造所乏敷而已ナラス、其技ニ長シ候者モ多

ラス、第五ハ製造ノ入費ニ堪ヘス、第六ニハ仮令軍艦御製造ニ相成候トモ、只今ノ御制度ニテハ御經費御償ノ道ハ相立申間敷候、然ハ事ノ尤難キ物ニシテ、俄ニ御所置ナリ難キハ海軍ノ御一事ニ御座候、併此儀ハ精々御手ヲ尽サセラレ度、就テハ左ノ姿ニモ被 仰付候ハ、海軍御所置ノ御速取ニモ相成可申哉、

一第一

公辺御軍艦ノ儀ハ、当時御有合セノ上エ、猶又通信ノ各国エ被 仰付差向候処、十五六艘程モ蒸氣帆前取交製造被 仰付、出来ノ上ハ即其国人ヲ御雇ヒ、御旗本御家人等、船ニ応シ諸役乗組被 仰付、船上諸般ノ芸術伝習仕候ヘハ、四五月ニハ仮成相熟可申ト奉存候、乍然只今内海ニ碇泊シテ、非常ノ御備ニノミ被差置候テハ、船上諸般ノ御經費御償ノ道有之間敷候ヘハ、御法令御厳密ニ定メサセラレ、或ハ御廻米ヲ運漕シ、或ハ武家町家ヲ分タス、諸国運漕ノ諸物尋常ノ免錢ニ減シ、御積廻シ等ニ相成候ヘハ、自然

皇国ノ形勢、海上ノ難易ニ熟練モ可仕、時トシテ北辺魯西亜ノ地境ヲ巡察シ、或ハ朝鮮ノ地・廣東・香港ノ辺、呂宋・瓜哇等ノ諸島ヲ探索巡行シ、我ヨリ交易ノ

道ヲ開キ候ヘハ、御償ヒノ道モ相立、御当国ノ御一端ニモ相成可申ト奉存候、

第二

全国ノ海軍相整ヒ、海岸ノ御警衛速ニ相立可申儀ハ、五畿七道ノ地、一道毎ニ造船場・鑄砲局何ヶ処ト御定メ被 仰付、船工ヲ初メ諸職ノ者、万端習熟致候迄、外国巧芸ノ者共ヲ御召寄ニ相成、鉄砲軍艦ノ製造ヨリ、船上ノ諸術礮台建築ノ法ニ至ル迄伝習仕ラセ、製造軍艦銃砲各国ニ分布致候ヘハ、全国ノ御守備相立、海軍モ漸々相備リ可申ト奉存候、就テハ造船場鑄砲局ノ儀、五畿ニテハ大坂・兵庫境ノ辺ニ御取立、東海道ハ江戸表・駿府・尾張・北陸道ハ越前・加賀・越後、東山・南海ノ二道ハ紀伊并領国阿波、其他山陰・山陽・西海ノ諸道モ夫々大藩ノ向ニ於テ、一道毎ニ一二ヶ処宛御取建ニ相成、猶国々ノ貧富分限忒シ、或ハ外国ヨリ調上ケ、或ハ自国ニ於テ製造致候共、大凡ノ御取究ニ於テハ、右ノ姿ニモ御定被 仰付、可然哉ト奉存候、右、申上候件々極メテ迂腐ノ常談ニ御座候上、事実ハ專道塗ノ風評ヲ取用ヒ、建白仕候儀ニ御座候得共、伝承謬誤モ定メテ多ク有御座ヘク候、乍然最初申上候通、

御近親ニモ相列罷在候身分御座候間、自国ノ改事モ行届兼候、不肖ヲ不顧奉申上候、芹曝ノ微衷御憐察被成下、長舌ノ罪御許容被下候ハ難有奉存候、以上、

戌五月

松平阿波守

五五六 戌五月廿二日勅使御発興前被

仰出候節別段大原殿へ被 命候叡慮ノ趣

五五六ノ一

朕国家ノ為ニ日夜憂ニ堪ヘズ、而テ幕吏苟モ安カラシ

事ヲヌスム、仍テ方今汝ヲ関東ニ下シテ、アマネク

朕カ固有ノ志ヲ宇内ニ顕ハシメント欲ス、願ハ汝カ腹

心ヲ尽シテ怠事ナカレ、且當中廟論ノ日、万一幕吏曲

直ヲアヤマリ、島津ト争論ニ及ソ事モ計難シ、然則汝

大道ヲ以テ是非ヲサトシ、天下ノ一大事ヲアヤマラシ

ムル事ナカレ、今日ノ事 朕一ニ汝ニ委ヌ、汝勤メテ

祖神ノ震怒ヲナグサメヨ、

五月

五五六ノ二

六月朔日

国持 大名

御譜代大名

外様 大名

鷹之 間詰

菊之間縁頼詰

今日

上意ノ趣誠以厚 思召、国家ノ御慶事無此上難有事ニ

候、昇平殆三百年其流弊綱紀モ相馳ミ、武備御行届ニ

相成兼候折柄、近来外国ノ事務煩ニ御差湊ヒニ相成、

右御取扱振ヨリ、自然天下ノ物情ニ差

叡慮候ニ至深恐入 思召、素

公武ノ間柄、聊モ御隔意被為在候事ニハ無之候得共、

何トナク御情実御通徹相成兼候故之儀ニ付、速ニ御上

洛万端 御直ニ被 仰上度トノ思召ニテ、則御内ニ被

仰出ニ相成候、併 御上洛ノ儀ハ、寛永以来御慶典ニ

相成候御式ニ候得共、万端ノ取調急速ニハ御行届ニ難

相成候ニ付、暫クノ処年寄共ヨリ御猶予相願候処、此

度ノ儀ハ御旧例ニ不被為拘、格外御省略御行粧等、万

端御簡易ニ被遊候 思召ニ付、急々取調次第ト被 仰

出、甚御急 思召候事ニ候、万事御誠実ノ

思召御直ニ被 仰上、御合体御熟算ノ上、従来ノ弊

風御一洗、御武威被遊御振張、

皇国ヲ世界第一等ノ強国ト被遊候 御偉業ヲ被為在候
上ハ、天朝ノ

宸襟ヲ奉安、下ハ万民ヲ安堵為致度トノ 思召候得共、
何レモ厚ク奉得其意、御政事向御変革ノ筋等各見込ノ
儀モ可有之候へハ、聊モ不憚忌諱、国家ノ御為第一ニ
相心得、心底ヲ尽シ可被申上候、猶追々被 仰出候儀
モ可有之候間、飽迄其意ヲ□□^(ママ)シ可被抽忠誠候也、

六月

右

入御以後、於御黒書院御下段中務大輔申渡、老中列座、
(脇坂安宅)

五五七 文久二年三月初旬ヨリ追々大坂表集会諸

浪人之内名前書

中山家元六位侍

田中河内介 (經敬)

同嫡左馬介 (嘉敬)

清川八郎 (正明、元庄内藩士)

出羽大谷雄蔵

本名安積五郎 (武貞)

武蔵木村恕之助

筑前平野 次郎 (国邑)

肥前中村 主計

京都青水 頼母

備中飯店 曾平

久留米 随 吾

荒木半三郎 (荒巻半三郎真刀)

酒井傳三郎

古賀 曾二

鶴田 陶司 (道徳)

中垣 俊太郎 (健、幸進)

小川 彌右衛門 (二敬、岡藩士)

田近 陽一郎 (長橋、岡藩士)

赤座 彌太郎 (正道)

堀 鎌之助 (鎌力)

夏川 淳平 (百九、輝九)

樋口 勝之助 (藤力)

安野 學次郎

井上 金五郎 (右九)

高野 直左衛門 (右九)

田邊 龍作

文久2年(1862)

森 玉次郎

宇野 關藏

福原竹三郎

高崎善右衛門

廣瀬友之助

矢野勘三郎

弥右衛門儀甚三郎

直左衛門召連之者庫兵衛

友之助儀茂三郎

甚三郎召連之者

喜助

勘平

學次

寄太郎

光太郎

右十六人 岡藩

秋月海賀宮門

同 人儀 長兵衛

同 光四郎

薩州

本名吉種広助
久敷水戸住居

伊牟田正平

清川八郎

家老島津左衛門

喜入攝津

川上式部

關山糺

桂小吉郎

△小松將監

菊地源吾

有馬新七

田中謙助

是枝柳右衛門

堀忠左衛門

橋口壯助

柴山愛次郎

中山直助

永山歸山

元田源次郎

半田小三郎

山形典次郎

西山大和

〔飛〕
隈本藩

轟武兵衛〔寛撫〕

阿蘇大宮司〔是答〕

長岡監物〔是答〕

小山門藏

△松村源藏〔深藏力〕

△山田十藏〔千郎信通力〕

△魚住源次兵衛〔物〕

△川上彦助〔彦齋力〕

△住江八右衛門〔采〕〔以上△△説聞〕

長井金吾

加藤榮太

堤友左衛門

松村乙五郎

佐々順次郎〔厚力〕

本名大清

瀬高船村清藏

〔本名〕
瀬高松前天真

〃蒲生次郎

〃竹下熊尾〔重權〕

〃内田清〔志田〕〔秀行力〕〔雄力〕

五五八 六月廿三日所司代ヨリ伝奏衆へ差出書付

此度出格之御改革被 仰出候ハ、深御仁意モ被為在候儀
之処、積年之流弊有之事故、両三年中ニ普ク御徳□シ及
至候様ニモ相成間敷ヤ、就テハ極老之者共、若其時相果
御仁恵ニ相洩候者モ有之テハ歎ケ敷、且養老之儀ハ風俗
ヲ厚ク為致候第一之儀ニモ有之、旁今度江戸・京・大坂
ヲ始、遠国奉行支配并諸国御代官所御預等之諸民、八十
才以上之モノ米・銀・錢之内可被下旨被
仰出候間、得其意銘々支配所之分早々取調、相応ニ被下
方可被取計候、尤遠国之分ハ伺ニ不及候間、員数等勘弁
致シ被下方夫々取計、追テ委細可被申聞候、

六月

別紙書付差越候間、当地町奉行へ可申渡候、尤伏見奉行・
奈良奉行へモ可達段年寄共ヨリ申来、則相違候間、写一
通為御心得差進候事、

六月

五五九 大橋順藏建言

(金明) 前宇都宮藩主
戸田因幡守家来

大橋 順藏

右之者此節伝承仕候処、近日死刑ニ被取行候哉之風聞ニ御座候、尤罪科之程ハ如何之儀有之候テ入牢被仰付有之候哉、其筋合之儀ハ敢テ承知不仕候へ共、何分ニモ當時天下有名之士ニテ、此度之御改正御變易始ニ付テハ、格別之御仁恵ヲ被為施行、何卒御手始ニ御赦免被成遣候ハ、天下有志之者共人心感服仕、如何計カ難有可奉存候、右様被 仰付候節ハ、此左衛門督ニ於テモ大慶至極ニ奉存候、依テ此段不顧憚歎願仕候、以上、

戊七月

右御願ニ由テ助命被仰付、主人因幡守へ御預ケ被成候事、

是全大原殿御願ニヨツテ、如此助命被 仰付候儀

ニテ、戸田家ニ於テモ深難有奉存候由、

戸田家下野宇都宮城主

老万七千八百石余

順藏号朴庵

辟邪小言 作者

四册也

五六〇 文久二壬戌七年於江戸表町触

市中取締之儀、前々ヨリ触渡之趣有之候処、年歴ヲ経候ニ随ヒ追々相馳^{馳カ}候ニ付、天保度御改革之節、尚夫々嚴重之触申渡置候処、近年取締向キ相馳ミ、追々奢侈之風俗ニ相成、衣服其外共都テ高価之品ヲ相用候故、年々ニ手ヲ込候新規之品拵出シ、売買致シ候趣ニ相聞へ以之外ノ事ニ候、世上奢侈ニ相成候ハ困窮之基ニ付、簡易質素之風儀ニ立戻リ、人々暮易相成候様迎御主意ニ付、市中取締之儀ハ不申及、前々触申渡之趣堅ク相守、質素節儉専ラニ致、分限不相応之儀決テ致間敷、猶近々触示シ候趣モ有之候へ共、是迄弊風ニ泥ミ、右触面之趣不相用候者於有之ハ、無用捨吟味之上、嚴重之咎可申付条、心得違無之様可致候、右之通不洩様早々可相触モノ也、

戊七月

五六一 八月三日中務大輔宅へ松平修理大夫家来

呼出被渡書付

〔島津茂久〕
松平修理大夫家来

元小納戸
京都留守居兼帯 堀次郎
〔伊地知貞雲〕

右之者於京都浪人共為騒立、其外対

公迎不屈之所業有之候、急度モ

御沙汰可有之処、格別之訳ヲ以修理大夫手限敷敷取計可
申付候、

五六二 文久二年戊八月廿五日土州侯上京同夜家

老山下総ヲ伝奏御役宅へ被召而役立合

御渡

勅諭

蛮夷渡来以後、

皇国之人心不和ヲ生シ候処、既去夏以来

帝都モ彼是不穩之暴説〔備脱カ〕モ有之、薩州取鎮之後先静謐候へ

共、万一京師騒擾之事有之候テハ、追々国乱之程難計、

彼夷族之胸算ニ可陥ト深被惱

宸襟候、〔於脱カ〕〔山内重範〕松平土佐守ハ自関東兼テ大坂御警衛モ被申付有

之候儀、幸此度通行之由被

聞召候間、非常臨時之別儀ヲ以暫滞京有之、御警衛御依

頼、被安

叙慮度 御内沙汰之事、

五六三 閏八月五日於土佐屋敷右御書付家中へ拜

見被申付且申渡之書取

我等今般不存寄

朝廷御警衛之儀蒙

仰、不肖且若年之身分恐入候へ共、当時勢重キ

勅諭之儀難有御請申上候、因テ一統ニ猶又猥之儀無之様

可相心得候、以上、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」(紙数四三枚)の記載あり〕

五六四 〔島津久光札 四月二十六日〕

御礼奉申上度愚札呈上仕候、先以益御機嫌能被遊御座
恐悦御儀奉存候、然ハ私此節之心底

天朝不浅被為在

御満足為

御賞誉、從來

御物之 御短刀極密拝領被 仰付候

叡慮ニテ、一昨日其 御殿迄

勅書御添御下^{〔二テ九〕}手相成、仍昨日帶刀被召呼、右之趣委細^{〔候脱九〕}

被 仰含候由、同人罷帰詳ニ承知仕、誠以恐入候次第

何共可申上様モ無御座候、今^{〔般之儀脱九〕}

未奉安

宸襟候程之微効^{〔思〕}モ無御座候処、箇様之 御品拝戴仕候

事、実以武門之冥加当家之面目不奉堪感佩、幾久敷重

宝伝来可仕卜、別テ、難有奉存候、以来愈以赤心奉

報

皇恩度千万奉存候、右之旨趣中々紙上ニハ難尽御座候間、

何卒深被遊 御汲取、御礼宜敷被 仰上被下度、伏テ

奉希上候、且

勅書御写目出度御讓被成下、是以御文面之趣恐入難有

拝領仕候、随テ此品龜薄之至ニ御座候得共、極密御礼

奉申上候驗迄、其 御殿迄差上候間、不苦被 思召候

ハ、御披露被 仰上被下度奉願候、先ハ右御礼厚奉

申上度、如斯御座候、誠惶謹言、

島津和泉

四月廿六日文久二年壬戌

久光

和

上

極御内密申上

追啓、為御礼私參 殿仕候儀相当ト奉存候得共、

御内密之御事ニテ、參 殿ハ却テ不宜旨帶刀江被

仰合候由御座候得ハ、乍略義以愚札御礼奉申上候、

敬白、

五六五 〔島津久光札 五月二日〕

乍恐一筆敬上仕候、先以益御機嫌能被遊御座、恐悅御儀奉存候、然ハ

左府公御一条御運ヒ被為成、誠以恐悅御儀奉存候、就

テハ御祝儀旁御目通奉願候間、御都合ヲ以御許容被成

下候様被 仰上被下度、伏テ奉希上候、将又先日ハ献

金之儀ニ付、

叡慮之趣

御書ヲ以其 御方様迄被

仰聞候由、細々之 尊書被成下難有拜見仕候、

叡念之程誠以奉恐入次第御座候、此上ハ先見合申候外

無御座候間、今日帶刀差上申候ニ付、細事同人ヨリ御

聞取被下度奉存候、右一条ニ就テハ種々 御厚配被成

下、別テ難有奉存候、先ハ右旁奉申上度奉捧愚札候、

誠惶謹言

島津和泉

五月二日〔采〕 文久二年壬戌

久光

御内用

追啓、御請書早速差上可申筈之処、色々取紛遅延仕、不敬之罪偏ニ御宥恕奉願上候、以上、

五六六 〔島津久光建言 閏八月二十二日〕

攘夷之儀ハ方今之一大重事ニテ、

公武御隔意之根源ト奉存候、尤當時於閩東、約条取替

シ相成候上之事ニ御座候得ハ、無故攘夷ト被

仰出候テモ、決テ故障申立御受有御座間敷、左様御座

候テハ、

第一

朝廷御威光ニモ被為拘、不輕御事ト乍恐奉存候、殊ニ

此次第伝承仕候ハ、浪士共又々蜂起可仕敷ト懸念奉

存候、横濱・長崎等在留之夷人マテ掃攘之儀ハ、閩東

ニ被

命候ニモ及不申、乍不肖小臣一手ヲ以、十分ニ逐斥仕

事御座候得共、其後之処置当座ニハ御受難申上御座候、

兎角

皇国全体之力ニ無御座候テハ相成間敷奉存候、其故ハ約条取結之上、無故此方ヨリ兵端ヲ開キ候ハ、夷人共ニ義非道申立、同盟之諸国牌シ合セ、迅速ニ軍艦數十艘差向ケ、江戸海ハ勿論諸国要地之津湊ニ乱妨仕、防禦空虚之処ヨリ内地ニ致侵入候儀、顯然ニ御座候、小臣武門之身ヲ以箇様申上候ハ、不似合儀ト可被

思食候得共、

皇国中三百年來之太平、人心驕墮之風習ニテ、偶慷慨之者モ有之候得共、徒ニ氣象迄ニテ、実場不案内之武士共必勝之策無覺束奉存候、併陸戦ハ古來ヨリ我力長スル処ニ御座候得ハ、敗走而已ハ仕間敷、夷賊共陸戦勝利無之ト存候節ハ、数十艘之軍艦諸国要地之海口ニ出没仕、江戸・大坂ハ勿論其外津湊之運路ヲ妨候ハ、是非我ヨリモ軍艦差向、逐斥不仕候テハ相成間敷、水戦ハ我力短ナル処ニ御座候得ハ、勝算無覺束奉存候、然時ハ

皇国中自ラ窮迫ニ及ヒ、不戦シテ屈辱セラル、ニ至リ候儀、必然之勢ニ御座候、其時ハ如何程切齒扼腕仕候テモ無詮事ト奉存候、就テ熟考仕候処、兎角於關東大

政之旧弊一新、武備充実之処、

御内命被為在候儀御急務ト奉存候、徒ニ筆紙上計ニテ、御実意ニ御世話無御座候テハ、席上之空論ト相成、苟且因循之四字消失仕候期有御座間敷、長大息之次第ニ御座候、窃ニ伝承仕候得ハ、速ニ攘夷之御趣向ニハ不被為在候得共、即今攘夷不被 仰出候得ハ、武備充実之期無之トノ

朝議ニ被為在候由、是亦御尤之御事ニハ御座候得共、攘夷顯然ト被 仰出候テハ、不謂禍害ヲ醸出シ候半敷ト危念至極奉存候、其子細ハ激烈之士諸国ニ充滿仕候得ハ、此

御内命伝承仕候ハ、弥憤発仕、武備不充実之時世モ不計、端的ニ横濱・長崎等攻撃之策ヲ運シ、幕府モ鎮撫難相成時機ニ至リ候ハ必然ニ御座候、右通御座候テハ

皇国一統騒乱之基ニテ、清国之覆轍ヲ被為蹈候御事、是則外夷共姦計之中ト別テ恐入奉存候、依之前文申上候通、於關東大政之旧弊一新、武備充実之御世話御実意ニ被行届候様仕度奉存候、乍恐
東照宮以來、天下之大政只

皇國中迄静謐之為、尾大不掉之患無之様トノ御処置ニテ、外寇防禦之儀ハ、決テ難相成 御国体ニ御座候、

方今之時節ニテハ武備充実シテ、外夷ノ輕侮ヲ不受様

ノ御処置專要ト奉存候、其於御処置ハ第一諸藩之疲弊御救ニ御座候、疲弊之本ハ參勤・妻子在府・火消御手

伝等ニ御座候得ハ、右件々此涯総テ御猶予ニテ、武備

充実仕候様御実意ニ被 仰渡候ハ、諸藩モ是ヲ以必

定憤発興起可仕ト奉存候、若其上偷安遊墮之弊習不相

改者ハ、屹ト嚴罰被 仰付度奉存候、右様之御処置ニ

御变革御座候ハ、武備自ラ充実仕、士氣愈盛大ニ相

成、夷賊ヲ万里之外ニ攘斥仕候儀、掌握之中ニ御座候、

雖然當時之模様ニテ、於關東右様断然タル御処置ハ急速

相成間敷、ヤハリ暴威ヲ以諸藩ヲ屈服之手段而已ニ可

有之推察仕候得ハ、乍恐

聖上之御英断ヲ以、嚴重ニ不被 仰下候テハ、迎モ武

備充実、外寇攘斥之期ハ御座有間敷、偏ニ嘆息痛恨仕

次第ニ御座候事、

右ハ奉応

御内命、愚考之趣書取ヲ以昨日申上候処、攘夷之儀

尚又申上候様承知仕、鄙陋之趣意献言仕候、尤昨日

モ申上候通、乍恐 御秘密ニ被 召置候儀、同様奉
存候、誠惶謹言、

閏八月廿二日文久二年壬戌 島津三郎

源久光

五六七 大原卿久光公ニ往復書彙

五六七ノ一

口上

小太郎

今日ハ堀へ被遣何モ承り候、巨細御答申入置候、然ル

処又々角右衛門被遣、御献白ノ御写被下、拝覽一読、

実ニ無二ノ忠言感佩此事ニ至、末文御採用ニテ、猶又

存慮御申上ノ処、実ニ勤要ニ候、此処御採用モ無之候

得ハ、実ニ徳川モ是限リト存候、御尋可被申ト存候、

右ニ付テハ何トモ御面働ニ候得トモ、此御存慮ノ辺ハ

何様ノ廉ニ可申哉、何レ被尋候ニ付テハ出候御返答ニ

ハ可有之候得トモ、先御心積リノ処覚語イタシ度存候、

何卒頭文一同ノ事可宜哉、

明日・明後日ノ内御見セ被下候様、御頼ミ申入度存候、

小子モ一寸存付文ノ儀ハ、堀ニモ咄シハイタシ候得ト

モ、猶出殿可掛御目ト存候事ニ候、早々要用耳、

七月十二日

〔島津久光〕
三郎殿

〔大重〕
重徳

五六七ノ一

口上

〔越前公〕

明日越面会、貴兄中將ノ事咄シ御座候、右ハ御面会ナ

ラテハ不安心、人伝ニハ申入カタク存候得テ、小子マ

イリ度存候得トモ、外人不出逢届ニテモ、今日ノ事今

日下知ハ不行届趣承リ居候故、明午刻早々従是マイリ

委敷御咄シ可申候、此段申入候、且又昨日京師御使ニ

長門守ト、於当地面談取計等ニモ相成候様トノ御沙汰

ニ付、各出立ノ事ニ候ト申来候故、何レ面会不致テハ

不相濟哉ト存候ニ付、御二殿ノ事モ有、旁御面会申度

存候故、明日マヘリ御面会可被下候、早々要用耳、

八月十七日 乍例乱書失礼御免可被下候、

二白、長門守中將伺書押紙付ニ候、

本田彌右衛方〔編註〕同殿カヨリ貴兄方ヘ参リ御座候由、一覽

イタシ度存候也、

本文名トハ、近藤ト藤井トノ事ニ候、

重徳

島津三郎殿

五六七ノ三

全上

〔高橋五六郎重〕

過刻兵部ヲ以申入候書取ハ差越シ候、出殿ノ不日後見

ト申下々張候積リニ候、昨日ハ御申越ノ儀承知イタシ、

又御心切ニ御書取トモ辱大ニ力ヲ得申候、然ルニ御示

諭ノ通先方被越候、出殿ニ此候〔御示諭〕ハ難差出ク存候ニ

付、勘考イタシ御相談申入候事ニ候、能々御覽御存意

モ候得ハ、必々無御遠慮、朱ニテ御加書可給呉々御頼

申入候、扱御答次第二老中相招、トテモ輔弼御請ニ不

相成テハ、出格被立候 勅使ノ全不相立候間、尚以勘

考御請可有様ニト存候、右ニ付出殿ノ趣ハ一覽候得ト

モ、付札イタシ候次第二候間、能々熟考御請有之度存

候、且又全体ノ趣意モ差述候テ、昨日御遣シノ書取、

朱書ノ様ニイタシ相渡シ候ハ、如何候ト存候、此儀

便ニ御勘考御示教可給候事、今朝兵部ニ為持可上ノ処、

大急キ此文認候間ナカク候故、従迹掛御目候、御勘考

御示諭可被下候、御返事次第二老中相招申聞、此書取

モ相渡シ、猶御勘考早々御返答承度ト可申ト存候、早

々以上、
六月廿四日

三郎殿

重徳

五六七ノ四

全上

日々御無異御旅行芽出度存候、陳ハ從今朝被差向候大
 久保市藏利通、小納言頭也、於程ヶ谷駅四半比面会、何敷承り候御存意
 ノ趣御尤ニ存候、何ニモセヨ、上洛ニハ大変革ノ事ハ
 大樹公被申出候トモ、夫ハ大樹公ノ了見、尤 叡慮ニ
 モ被為有候得トモ、夫ハ先御止ニ相成、一橋・越前ノ
 事不被相改候事故、夫ハソレニ致、何分於 叡慮ハ一
 橋并越前ノ事ヲ難シ、以 勅使被 仰付候通りヲ可相
 達ト存候其上右様被説聞候事ハ、小子、不存候、
 事、右ニ付申達候事モ無違處ト存候、其申達候砌、從大
 樹公右大變革ヲ致シ、上洛ノ積リ誦聞セ、 禁中ヘモ
 言上イタシ候ト被申答候ハ、小子答ニ、其大變革ハ
 於大樹公ノ御了見、是ハ兼テ 叡慮ノ趣ニ候間、御上
 洛ノ儀ハトモカクモ、何分此儀御請ニ相成候様ニト存
 候、左ナクテハ即今 勅意立不申候、 勅意立不申テ
 ハ矢張諸人不服ニ候、諸人不服ナレハ又々浪士共蜂起
 イタシ、暴発イタシ候本ト存候、ケ様ノ次第ヲ以、可
 申張ト存候、ケ様ニ申張候処ニテ、 禁中ヨリ御差止

メ 勅詔トモ有之候ハ、其時ニ可相止候敷、夫モ不

都合ニ候ハ、只今内々承り候処ヲ以、内々以急使

奏聞へ、御返事ノ御模様ニテ、夫トモ一橋・越前ノ事

ヲ可申達御沙汰ニ候ハ、断然ト可申達候、其カハリ

ニ御返答有之候迄、暫所勞トカ申テ登城致ヌト申モノ

敷、此辺如何可有之哉、且又其上案シ候ニハ、上洛ノ

事モ内々ハ 叡慮ニ被為在候事ヲ差合、何程夫テモト

申御返事ニ基キ、如何様ニ申張候トモ、一円不被聞入

時ハ如何可有之哉、即違 勅ト申モノニ候故、更ニ違

勅ノ罪ヲ被正ト申モノ敷、ケ様ニ仰出相成候モ、実以

心配ナル儀ニテ、其後迄ノ儀ハ小子一向勤考付不申、

何分ニモ六ヶ敷次第ト存候、賢慮聞セ願入候、猶巨細

ハ大久保ニ能々御聞被下度存候、早々以上、

六月五日夜

重徳

島津三郎殿

〔島津久光公実紀卷二に同じ記載あり〕

五六七ノ五

口上

唯今高家兩人官原撰律守
土岐出羽守 来入ニテ、来ル十日大樹公 御

対顔可有内々噂ニテ、自然差支共無之哉被尋候、尤過

日ヨリノ心組ニ候間、速ニ御請申置候事ニ候、自然越
公御面会ノ御都合モ可有之哉ト存候間、早々申入候ト
テカ、今日ハ御面会ノ様ニ承リ候得トモ、為念ニ候間
申入候、早々要用、不典、

六月八日

重徳

島津三郎殿

五六七ノ六

口上

御細書ノ趣何モ承候、此御趣意ハ小子ノ存意ト同事ニ
候間、能々心ニ入候、必御案シ被下間敷、御写ハ柳留
イタシ置候、長州上洛一件御所ニモ強テ御望ハナク、
(忠能、謙姿)
中山殿ヨリモ一・越ノ処可申聞ト、今日又々有之候、
且又御出ノ一件ハ大久保ニ申聞置候、能々御聞取可被
下候、早々以上、

六月十六日

重徳

捧酬

五六七ノ七

全上

御返書拜誦候、連日快霽暑氣モ強難凌候、愈御平康珍
重存候、陳ハ堀ヲ以遣御書、外ニモ承リ安心ノ事ニ候、
尤越前ノ所存愚案ナカラ見貫候、大老ノ所作致間敷ニ
テハ決テナク候処明白ニ候、一昨夜申入候ニモ何歎興
応有ソフニ存候処、堀ニ承リ候得ハ、果シテ見込ノ通
少々存意有之由、併尤ノ事ニテ、名計ニテ実ハ何モカ
モ仕組タル上ニテハ詮ノナキハ元ヨリニ候、其上心ニ
落又事ニテモ、越前様モ御承知ニナリテハ実迷惑ナル
事勿論、左レハトテ一々不承知トモ難被申節ハ、実ニ
御迷惑察入候、何卒堀小太郎、(勝静、老中、備中松山藩主)
板倉方ヘ行向、用人何
トカ云清論人ニ説得有之、(板倉勝静、周防守)
周州納得ニテ何事モ組立ヨ
リ、越公掛り合一モ不承知無之事ニシテ、後ニ小子登
城其事ヲ可申述候間、堀ニモ等ト申合置候得トモ、猶
周州ノ処承知否相知り候テ、速ニ被仰下可給候、夫迄
ハ登城申来候トモ、所勞申立登城ハイタサス候、扱又
一橋ノ事ハ如何相談勘考相付候様、(取立)是モ何力有ソフニ
相見ヘ候得トモ、越公モ承知ノ事ナリ、大樹公小子ヘ
直ニ、一橋モ此間ヨリ日々登城ハナシモイタシ、隔意
無之ト御噂ニ候事故、御請被成カタキ廉モ有之間敷、
若被申立候トモ一家ノ差支ニ候半、夫ナレハ桑名駅迄
(三重県)

申候通りノ存意故、聊モ迹ヘハ寄不申候、何分一橋
ノ勤考付候ハ、小子ヲ可被招候、夫迄ニ周州ノ処程好
堀ヨリコシラヘ、又脇坂ノ処（安宅、老中、竜野藩主）、貴所御親族御行向御面
会ノ事故、程好御申解ニナリ候ハ、可然存候、其辺篤
ト落合候ハ、所労快ト申テ登城イタシ可相談候、越
前ノ事・一橋ノ事兩人トモ、若名ノ（勉力）不落候ハ、後見
同様大老同様トノ事、巨細ニ承知イタシ候マテニハ候
ヘトモ、今一案候得ハ、後見ハ輔弼トシ（此比後見相止又ト云
モ不都合ナルヘク候
半間輔（勇脱力）、大老ハ差支候ハ、政事總裁職ト差支ヌ様ニ被
仰出有之候事故、本人ノ処承知ニ候ハ、右輔弼政事
總裁職ニテ、両三度ハ押テ可申ト存候、是則 朝命ニ
候、乍併唐ラシクテ請ラレヌト達テ被申候ハ、後見
同様、大老同様ト申処ヘ落付、夫ニテ承知ニ候ハ、
以脚便 叡慮可伺候、其御返事次第又々可申入ト申テ、
功ニ可致ト存候、右故板倉・脇坂ノ辺分り次第、早々
為御知願入候事、勅使重徳旅館へ御出可被成ノ事、
高家へ可申入ノ事承知イタシ候ハ、内々御頂戴ノ御
書取脇坂へ被為見候由、重畳ノ事ニ候故、從小子可為
見候、併三通ノ内何レヲ御ミセニナリ候哉、明日大久
保ニ尋聞由（備力）御答待居候処、堀右書取落シ、宿元ニ

失念イタシ候由ニ候故、此人立寄セ折歸リノ上、高家
へ可申通呼寄可致応対候間、明日ノ事ニ相成ハ、左様
御承知可被下候、前条大老ノ事共、御直ニ咄シ申度存候
事ニ候、相分り候ハ、早々可申入候間、何卒早々御出
御頼申入候、何モ天下ノ御為ト存候、全体越公ニモ私
二面会イタシ度事ニ候、此辺モ御勤考願入候、又々乍
毎々京都便リ（備力）ニ家来へ相願候、何卒早ク達度存候、子
細長ク候故此使ノ人ニ御聞取可被下候、早々要用耳、
大乱書失礼御免御推覽可被下候也、

六月十四日

重徳

島津三郎殿

〔島津久光公実紀にて補註〕

五六七ノ八

全上

越前上京、朝議被相伺テ、於関東衆議大小名献白可
被召様ノ御連ニ相成度儀ニテハ無之哉、此御返答申候、
能々御覽御勤考、

全体ノ御事ハ仰ノ通りニ候得トモ、左様ニテハ最初ニ
立戻リ、午年ノ御仕直シ被遊候様ノ御事ニテ、夫テハ
事手間取埒明申間敷、却テ又人心動揺可致歎ト存候、

醫テ申セハ

悪党者ヲ召捕候ヘハ、其下役ニ取調罪状ヲ頭分へ申出ス、奉行頭分ノ者は非ヲ考ヘ、的当ナレハ其分ニテ治定、若不当ナレハ勘考シテ当然ノ罪ニ行フ事ニテ、下役ノ云分ニセネハナラント云事、元ヨリナキ事ナリ、併訳ノ分ヲ又奸吏ナレハ、任セテ議論モ致サセネトモ、ソノ為ニ一・越ヲ登庸候ハハ、正路ヲ申出サル、ハ的然ト存候、左候ハ、事速ニシテ相調、衆庶ニ悦服讒念無之ト存候、

以上若倉ヘノ写シナリ、但国是ハ兩人共ニ胸中ニ兼々可有之事ト存候、大体此様ナ事ニテ可宜哉トハ存候ヘトモ、後ノ処ニテ何事モ於關東治定ノ上伺ト申ノト、丸テ伺テ取計ノトハ大違ニナリ申候、御委任ノ廉モ候故、丸テ伺^{テカ}ト取計ト申様ニハ迎モマイリ申間敷、又於禁中甚御六ヶ敷可被為在哉ト存候得ハ、何レトモ決心イタシカネ候、御英断偏ニ御頼申入候、以上、

七月八日

重徳

島津三郎殿

(島津久光公実紀にて補誌)

五六七ノ九
全上

今朝ハ巨細ノ御答書辱拜披候、殊ノ外ノ快晴、御旅行モ御都合愈御安全珍重存候、陳ハ今日無滞御着芽出度存候、扱小子モ無滞公邊^{マツ}刻計着イタシ、無異乍憚御放念可被下候、扱例ノ城使板倉周州来入、如例ニテ相濟候、扱又外老中モ面会如例、更ニ四老中面会、御用談可致トノ事ニ候故、子細トモ聞入候カト存候ヘハ、左ナク御用御急キ候哉、御対顔ト申テハ御式モ有之、明日明後ト速ニモマイリカタキニ付、先へ御用小子ヲ被差向候程ノ御事、急カ又ニテハ無御座候ヘトモ、左レハトテ一日二日遅キトテ、夫カ御差支ト可相成ニテモ御座有間敷ト談、次テ御対顔ト申様ノ御事ニテハ如何哉ト申候ニ付、我等申ニ、扱ハ御用談御役方テ御聞取ノ御積リノ由、小子御前ニテ承リ候ニハ、大樹公直ニ老中方モ出席ノ処ニテ、可申達旨被仰付候間、御直ニ申入候積リト申述候、扱ハト申内ニ、又小子ヨリ御対顔ニハ御式等モ御座候ハ、先御用談ハ御用談ニテ相仕舞、扱初登城御対顔トハ別テニ被成候テハ如何ト申候得ハ、夫ハ却テ六ヶ敷候故、何分御直ニ申上、御対顔ハ御対顔テ仕舞、更ニ御用談トカ承候ヨ

シ被申候、左レハ一日モ早方可然存候間、中二日和書へ被遣物置ニテ申セハ、来十日ト申延ニハ相成間敷ト申候故也

ハハ、左様ニモ相成間敷哉ニ候得トモ、何分直ニ相伺、明日御返答可申入ト云テ相分レ候、此段一寸申入候、

越ニ御面談ノ間モ有之候テ、可宜哉トモ存候、何レダラ〜ト延日ハ、御急ノヨシ申候ヘハ、四人一同左様

ノ儀ハ決テ有間敷ト相對候、此段一寸申入置候、幸山科御召シ由ア脱カニ候間、同人ニモ篤ト申置候間、書面御分リナキ事ハ御聞可被下候、早々以上、

六月七日

追テ申、今日堀ワサ〜被下、何モ巨細ニ承リ安心イタシ候、同人大苦勞、乍憚宜御申可被下候、以上イットテモ大乱書、失礼御免可被下候、以上、

重徳

島津三郎殿

〔島津久光公夷紀に同じ記載あり〕

五六七ノ一〇
口述

扱々、嚴敷暑サ何ノ御障リ無哉、珍重ニ候、昨日ハ中山ニテ御示諭ノ条致承知候、則昨夜申遣候処、返答如此候間、今日ハ何ト敷可申述、其節屹度可申入ト存候、

扱又掛御目候御書付、乍御世話敷申出候早々、要用耳、不已、

六月廿二日

重徳

島津三郎殿

五六七ノ一一

全上

右ノ書状相認、昨日可申入存候処何等ノ沙汰無之、至今朝高家来リ、御馳走所ハ手狭ニテ、御用漏ニテモ如

何ニ候間、登城イタシ呉候越申越シ候間、別紙草稿ノ儘御目ニ掛候、然ル処へ越前家来参リ、内々持リ應答ハ春獄ノ所存ニ、御登城不被下テハ不相叶儀有之候由、登城ニテ面

会候ハ、其次第モ相分リ候事ニ候間、何卒登城イタシ呉候様申越シ候間、御用向ハ相達シ相談ニ相成、其

次第モ分ルト申事ニ候ハ、強テコジ付ルニモ不及、又々彼方ノ申分モ相立候ヘハ、崇 王攘第（突乙）旧弊ヲ破、

却テ申述ヨク請ネバナラヌ処モ可有之ト存候故ニ、何欺訳ヲ御申越可被成、左候テ登城ノ事承知可致旨申答遣シ候、右故明日敷明後日登城ノ事可申来候ヘハ、明日

可致登城ト存候、面会候ハ、被申越候御旨ハ勿論、又

可致登城ト存候、面会候ハ、被申越候御旨ハ勿論、又

所存モ承リ、崇王ノ道大變革ノ道等ハ、小子相心得候丈ハ、十分ニ可申述ト存候事ニ候、扱一橋殿ノ口上ニテ小子春嶽・三郎殿等御招被申候ト申事ニ候、日限無之候間、明日面会ニテ可承ト存候事ニ候、御出会可給候、昨日ヨリ可申入、中山モ案シタウ〜ト存候ヘトモ、不定分又事ヲ申候モ如何故、暫得々イタシ候内御尋ニ相成、無申分候、右ノ次第真平御免可被下候、早々不已、

七月十九日

重徳

島津三郎殿

追テ申、前日至極ノ都合有之処、ヘンナ処ヘ参リ何トモ残念ニ存候ヘトモ、一橋ヘ集會候ハ、御分懷モ可達ト存候事ニ候、猶其節万々可申述候、乍例乱書御免被下候也、

五六七ノ二

全上

昨日ハ始テ御面談辱存候、今日ハ意外ノ烈風ノ処、愈御安全無異御着珍重存候、陳ハ其砌段々無御腹藏御示諭被下、愚意モ不残申述明白ニ相分、安心ノ事ニ候、

猶又事ニ宜御頼申入候、扱御咄シ中追々激論ニ及、

叡慮ノ辺モ何歟輕卒ニ申述、チト申過ニテ心配イタシ候、決テ〜 叡慮ノ処ヲ輕々敷心得候ニテハ無之、

十二部モ十三部モ勤忍ノナル丈ハ元ヨリノ儀ニ候ヘトモ、マコ連モ〜 勤忍モナラヌト成候テモ、夫テモ鎮靜ニテハ攘第ノ場所ヘモ到ル間敷、左候ヘハ兼テノ

叡慮モ立タセラレヌ御事故、其時ニハト申事ガ余激語過候故、何歟 叡慮ヲ事モナケニ存候、左様ニ相聞ヘ候哉ト、其程誠々心配イタシ候事ニ候、御面会申候ヘハ其入訳ヲモ可申解候ヘトモ、本ノマ旅ト申モノ自由ナラザル物ニテ困リ申候、荒マシハ相認候ヘトモ巨細ニ難相認、尚中山ニ克々御聞取被下候様御頼申入候、仍早々要用已、不典、

五月廿六日

重徳

島津三郎殿

追テ申、明日御面会ノ事中山々々能々申置候、御聞取可被下候、以上、

五六七ノ三

全上

頃日御無沙汰、立秋ノ驗ニ候數少々凌易候、愈御清安珍重存候、陳ハ一橋へ越前御請ニ相成、天下ノ大幸獻慮モ被為達、誠恐悅於御互畏大安心ノ事ニ候、右ニ付近日一・越面会イタシ度事承知ニテ、御馳走所ハ被成候、愈十七日ノ積リニ候、猶明十五日ニ高家へ可相達候、刻限ハ如何可申入哉、貴兄モ御面会ノ事尤所望ニ候、其前ニ御相談申度存候間、午刻早メニ御出門可給間敷哉、左候ハ、未半刻ト申達可置哉御相談申入候、且又其時可申談次第、御出ノ砌ニ御咄シ申候テ宜事ニハ候ヘトモ、余リ速急ノ事故一寸出殿御相談申入候、御者可給候、例ノ御下札ニテ御答可給哉、種々思案イタシ、先此辺ノ事ニ候、且小太郎存意モ承リ、一寸書取セ候ニ朱カキ掛御目候、扱又過日ノ御献白拝読、再三一々御尤ニ存候、過日モ申候通り、御末文ノ次第ニテハ否哉御返答可有之事ニ候、今何ノ沙汰モ無之哉、押テ御存意不被尋テハ、幕モ是切敷ト存候程ノ事ニ候、定シ一・越兩賢可然被為採用候トハ存候得共、両老中不安心ナル事ニ候、真実誠ヨリ尊崇如何可有之哉、猶十七日面上万々可申承候、早々要用耳、不典、乍例乱毫失礼、御推覽可給候也、

七月四日子脱カ

追テ、一昨日ハ御使御祝トシテ生鯛一折、実ニ幾久敷ト祝入候、厚御礼申入候、以上、

又

被尋候ハ、御申出シノ廉々一寸承知イタシ度存候、

重徳

島津三郎殿

島津久光公実紀に同じ記載あり

五六七ノ一四

全上

連日秋雨鬱々候、誠ニ昨烏ハ緩談ヲ得本懐候、爾来御障リナク珍重万福候、陳ハ其砌風説人口ハ難禦事愚ノ

至ニ候ヘトモ、朝廷ノ御外聞ヲ恐レ候子細ヲ申述候ヘハ、成程トノ御答ニ安心致シ候、猶御合可被下候、且又御帰国ハ実ニ残念至極ニ存候、在様ハ十分言辞ヲ

尽シ、是非々々御留申候心得ニ候処、事ニムリナラサル御辞ニトント口アキ不申、御尤々々、乍併存意ハ貴

兄虎ニテ諸猥恐伏イタシ候故、只々泰然ト御在京候ヘハ、総テニ行渡リ都合宜、幕ヨリ尊崇不足ノ時ハ、夫テハ安心ナラヌ、帰国ガテキヌト貴兄ガ十分ノ処迄、推上々々被成候事モテキ可申、余ノ大名衆ニテハ、迎

モ其推ハキク不申ト存候ヘハ、尊奉十分ハ扱置、半分モ成間敷哉ト存候ヘハ、御帰国ハ実以残念トハ此事ニ候、然ルニ談末ノ一事地面ノ事ニ至リ、誠ニ御尤至極トントノ可申筋無之、降伏イタシ候、左レハ御留申候道ハ無之候故不申述候、然ルニ一橋ノ様子申述候大略御承知ノ趣、一橋其底意有之候テハ、何ト歎不安心ナル事ニテ、行ニ如何可有哉存候得ハ、心配此事ニ候、自然尊崇モ廉立候事モ無之、不当ノ儀モ有之、堪忍モ難致候ハ、尤 陽明公ヨリ御沙汰可有之候得トモ、小子ヨリモ可申入、其節ハ兼々御頼申置申候、尤從來ノ勤 王御忠誠ノ事故、安心ハ致居候得トモ、右為念申入置候、猶又前条不忍形勢モ有之候節ハ、小子ヨリモ申入度候ニ付、為其不断御書通申度心組ニ候間、此段御含可被下候、書余万々御ナコリヤシク存候、敬白不典、

後八月廿二日

二白、

追々秋冷増加可致、御旅中随分々々御厭可被成祈申

候、

呉々残念ニ存候也、

御答緩々可給候、

島津三郎殿

重徳

〔島津久光公実記にて補註〕

五六八 久光上洛ノ前頃密申書

口上手扣

〔頭註本〕文久ハ春中山中左衛門〔御内達ハ〕敷慮ニ対シタル御父子〔御内達ナリ〕一今般中山ヲ以御内情奉伺候処、猷芹ノ微志上達不容易
〔頭註本〕文久此例ノ事実旧報數録ニ詳記ス
御賜、且前左府様ヨリ御内達ノ御趣、大納言様御内書
〔頭註本〕大納言近衛忠房公御縁談一条云々久光家女御子高橋院殿入書云云
御拝領物被 仰付 実ニ武門之冥加不過之奉恐入候、
〔頭註本〕門島津兵庫久長力長女ナリ
依之其方内々使者差立候間、篤ト左ノ趣意相合御礼取
〔頭註本〕御縁談ハ大ニ所以アルコトニシテ内密數聞ニ達シタル等事実アリ一
束可申上、左候テ御縁談一条御請 御礼可奉申上候、
〔頭註本〕御縁談ニ
一 天朝之御危殆実ニ焼眉ノ急ニシテ、被為惱 敷慮候御
〔頭註本〕敷慮ヲ惱マサレシ事実、近衛公御父子中山へ御申聞アリシヲ、中山久光
儀、此節中山詳細之御左右ニテ、悲涙涕泣ニ堪奉ラサ
〔頭註本〕茂久ハ伝タル事実一片紙ニ尽シ難シ
二 次第二候、和宮様御下向ニ付、被為 仰合候御
〔頭註本〕和宮云々ノ事実モ全前
内策モ被〔為在タル脱カ〕

御由ニ候得共、是ハ決テ頼ニ不相成御事ニ有之マシク

ヤ、能々幕府ノ事情熟察イタシ候ニ、如何様小吏俗吏

タリ共当分ニ至リ、天下人心名分ヲ明カニシ、天朝ヲ

重ンシ、幕府ニ背キ候判然タル形勢ハ、既ニ一昨年上

〔頭註本〕井伊侯事件〕
已一挙以來、夷人殺害、水府ノ混乱、其外浪人奔走等

ノ次第ニテ、詰ル処無事不相濟、一身ニ疾痛ノ来ルト

イフ事ハ十分奸察イタシ、表ハ実無キ勢ヲ張り、内ニ深
淵薄氷ノ恐ヲ懷キ候義ハ、案中ニ可有之、シカレハ苟
且偷安ノ情ヲ以、天下國家ノ傾覆ハ少モ意トセス、榮
利ヲ失ハサル格護ノミニテ、明月ノ事ハ如何ニモアレ、
今日々々ノ全キヲ計當イタシ候義ニ有之、右具眼ノ者

ヨリ論シ候得ハ、彼レノ長久ヲ謀候事ハ、國ヲ失ヒ身
ヲ亡スノ危謀ニテ、少シ天下國家ノ上ニ心ヲ用ヒ、衆
思ノ向フ処ヲ取り、断ヲ用ヒ候得ハ、徳川家ノ興復隨
テ一身ノ榮耀無疑候得共、和漢古今衰世ニ當ツテ、國

ヲ乱ス賊臣ノ蹤跡ハ一徹ナル訳ニテ、是ニ依テ彼ヲ考
フルニ、和宮様無理ニ申下シ奉リ候ハ、一朝一夕ノ
好巧ニ無之、御下向成ラセラレ候上ハ掌中之物ニテ、

中々 勅意ヲ恐レ処置ヲ改メ候ハ、思ヒモ寄ラヌ事ニ
テ、此上ハ如何様ノ邪謀奉施候モ難凶至憂此事ニ候、
勿論奉申上モ恐多候得共、不謂之秘策モ有之候段承及、
決テ実説ニ可有之ヤ、仮令其説ナクトテモ、察セスン

ハ有ルヘカラサルノ時節ト存候、万一彼レニ先セラサ
レ、制ヲ受候テハ主客ノ勢ヒト相成、嚙臍ノ□マ、憂カ不久義
ト奉恐懼候、

一御一挙相成候義、篤ト熟思イタシ候ニ申サハ、兵ヲ動

スト申訳ニテ、國家重事ハ勿論、

天朝ノ御安危ニ關係イタシ候御義、誠ニ不輕次第ト恐入
候得共、前條通危急ノ御時節ニ付テハ、不被為得止御
時節ニ候間、不肖ノ我等タリトモ、苟モ王臣トシテ難

奉忍候ニ依リ、
皇國復古ノ御大業被為在度奉誠願候、就テハ京地御十分
ノ御守護不相備候テハ、仮令非常ノ

聖断被為在候テモ、戊午ノ覆轍ヲ蹈ム様ニテハ、返テ奉
増御難題甚奉恐入候ニ付、一回発拳之上ハ必勝ノ利ヲ

謀リ、興復無疑算ヲ尽シ、其上ノ処ハ臨機応変ノ処置
ニ出テ候様有之度奉存候、我等不智短丈ニシテ、深謀

遠凶モ無之、如此大事始終ノ得失ヲ謀ルニ其術ニ乏ク
候得共、内策ノ次第左ノ通ニ候、

一供人数五百人ヲ召列、不日ニ上京可仕事、
但陸行ニテハ急速ノ間ニ逢兼候間、久見崎又ハ阿久

根辺ヨリ天祐丸へ乗船可致、左候得ハ京地到着イ
タシ候人数ノ義ハ、一組六十人ニシテ、四組二百

四十人、仕長二十四人、組頭兩人、側役兩人、上
下二十人平均ニシテ八十人、次ニ定式方側向三十

人、同表方十八人、足輕四十人迄大凡見積リ、帯

〔頭註志〕尋常參府等副向ノ人ヲ云フ

刀以上五百五十人余ニ相及候、

一当地出立兩日間ヲ置キ、守衛人数五組三百人出立申付、

又兩日間ヲ置キ、四組二百四十人同断、小倉・下關迄

出張為致置候事、

但天祐丸大坂着ノ上、則小倉・下ノ關迄差廻シ、本

〔頭註志〕文出張ノ人数前後繰廻シ上坂セシメ、且カネテ用
〔頭註志〕下關白石正一郎〔密托シテ買入置キタリ〕

意致置候下關粮米、右人数一緒ニ積廻シ可申、尤

兩度ノ運送五日ヲ不出候間、其上ハ大坂碇船非常

ニ備置候事、

一人數凡テ上京ノ上、組頭一人へ三組百八十人ヲ召附、

江戸表芝邸為警衛差立候事、

一上京ノ上陽明家參殿、篤卜建議ノ上御内意奉窺、其上

乍恐滞京守護可仕候間云々

勅諭ヲ下サレ、擬右通御守護十分相備候上、非常ノ

聖断ヲ以、表向関東へ

勅使被差立候趣ハ、一橋公御後見、越前老公御大老ニ出

世相成候様云々、然シテ尾藩・長藩・仙臺・因州・土

佐へ別段

勅命被下度趣旨ハ、今般徳川家へ云々

勅ヲ下サレ候間、各談合ニ及、

皇国ノ御為メニ赤心ヲ尽可抽忠勤、万一違

勅ノ廉相頭候ハ、国家ノ奸賊執政安藤、速ニ可加殊伐旨

被相下度、左候得ハ有志ノ諸藩合従イタシ、勤王義拳

無相違、其節ニ臨ミ候得ハ、勢ヒ難及故幕役モ戦慄シ

テ、

勅意ヲ捧シ奉ラスンハ無致方、万一不軌ヲ謀リ候ハ、

長藩其外水府諸浪人四方蜂起シテ、義応可致ハ案中ノ

勢御座候、何レノ筋於関東成敗相決可申候、

一勅ヲ下サレ、則日九條御退職、左府公関白御帰職、青

蓮宮様ノ御幽囚ヲ御解キ、万機ノ事無大小御談判被為

在候様、被 仰出度奉願候、

一右様人数引列、上 京御守護仕候上ハ、要枢ノ場所、

地面御預リ被仰付度奉願候、

一当時種々議論モ有之、此期ニ臨ミ候上ハ、徳川家ヲ捨、

大義ヲ唱へ正々堂々天下ニ義旗ヲ揚、干戈ヲ用ルノ論

モ有之哉ニ候得共、夫ニテハ首尾ノ結リ甚難問ニ可有

之、畢竟罪ハ幕役有之候故、真実

皇国復古ノ赤心ヲ以尽忠ノ者候へハ、是非干戈ヲ用ヒス、

国体ヲ傷メス成就出来候様策ヲ立テ度、勿論先々ヨリ

徳川家御扶助、公武御合体ノ

〔頭註末〕先君遺志齊彬ヲ云フ、
叡慮ニテ、先君遺志モ其通候間、何ク迄モ右ノ御趣意奉

實度ト奉存候、乍併得止サセラレサル義到来ニオヒテ

ハ、不及是非義ニ可有之奉存候、

〔頭註末〕此ハ中山カ携ヘ近衛ヲ以テ敷聞ニ送タリト云フ事矣、一片紙ニ尽シ難
右ノ通概略ノ定策ニ候間、尚篤ト形行建白ニ及候ハ、

御趣意モ可被為在候間、巨細奉伺候上万扁治定、早々

駈下候ハ、夫ヲ期シテ日限等可相聞候、仰テ天時ヲ

〔頭註末〕小松中山大久保・通四名密議ノ痛シ久光密判シタリト云フ
監ミ、伏テ人事ヲ察シ候ニ不可疑ノ時機、此一挙ニ可

有之候事、

五六九 久光上京前近衛殿書牘

辛酉十二月比來轉津和、泉ヨリ文久二正十六陽明垂卿ヨリ正

三ハ内々被見、十七日本紙以源垂返上、

呉モ如何様共致度ハ十分候ヘトモ、本文ノ次第御察
被下候也、

極密御申越ノ条々実以勘要当然ノ義、左無候テハ後后
如何可相成哉モ難計、第一 皇国之安危ニ拘リ候義、

実以悲嘆不遇之候、尤上ニモ其刃深御痛心被遊候御事
故、申出度ハ十分ニ候得共、九條関白其余ニモ彼是ト

姦賊多端ノ事故、迎モ上ヨリ被仰出候義ハ御六ヶ敷、

〔頭註末〕
中山大納言・正親町三條ニハ誠実ノ人体、乍去新役ノ

義迎モ姦賊ノ人体出頭ノ折柄、中山大納言・正親町三
條兩人トシテ、 叡慮ヲ伺取計候義ハ所詮相成間敷、
〔頭註末〕
依正親町三條ニモ深心痛被致候様子、何分関白ニハ関

東一体ノ了簡、且又夫々随從ノ人多端ニ候ヘハ、迎モ
関白ヲ取退ケ候義ハ如何ニモ相成間敷義、呉々モ痛心

ニ迫リ候次第候、何卒薩州・長藩・仙臺・土佐其余有
志ノ向、諸藩幕府へ上書ニテ具ニ御申望、且又閣老へ

モ右之次第被示、其上御採用無之候ハ、表立諸藩ヨリ

叡慮ヲ被伺候事ニハ相成間敷哉ト察上候、何分公武姦
賊ヲ退ケネハ、 叡慮不被為立何モ恐入候事、何モ不

悪御察覽頼入候也、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」(紙数一〇一枚)の記載あり〕

官武通紀卷一

五七〇 日標

正月

一十一日、島津(編者曰、和泉ノ誤リナラシカ)因幡義御実父ニ付、此節実形身柄ニ被相

復御参府ノ節、御国政向被為取計度儀ニ付、松平修理(島津茂久)大夫殿ヨリ御書附被指出候、
(薩州藩主)

(右御書附、薩州始末第八ニ載ス)

一十二日、外夷掃攘ノ義ニ付、密謀相企候事件露頭ニ依

リテ、大橋順藏父子御召捕ニ相成申候、
(正順、正寿、宇都宮藩主)

(委曲ハ大橋順藏始末ニ載ス)

一十五日、坂下御門下馬前ニ於テ、狼藉者ニ被逢候義ニ付、御老中安藤對馬守殿御届書被指出候、
(信睦、磐城立藩主)

(右御届書、坂下狼藉始末第一ニ載ス)

一同日、御老中安藤對馬守殿疵所療治ノ義ニ付、御医師林洞海老ヨリ御届書被指出候、

(前同断、第三ニ載ス)

一同日、御老中安藤對馬守殿狼藉ニ被逢候節、坂下御番所取計振りノ義ニ付、御門当番ヨリ届書指出申候、

(前同断、第五ニ載ス)

一同日、前同断ノ節取計振りノ義ニ付、間部(詮勝、贈江藩主)下総守殿御家来ヨリ届書指出申候、

(前同断、第六ニ載ス)

一同日、前同断ノ義ニ付、櫻田御門当番牧野(忠恭、長岡藩主)備前守殿御家来ヨリ届書指出申候、

(前同断、第七ニ載ス)

一同日、水戸浪人ノヨシ、内田萬之助ト申スモノ(川辺元善)松平大膳大夫殿外櫻田御屋敷江罷越、御家来桂小五郎江相對申入レ致自殺候儀ニ付、御同人御家来ヨリ届書指出申

候、

(前同断、第八ニ載ス)

一十六日、御家来手負ノ儀ニ付、安藤對馬守殿御届書被差出候、

(前同断、第二ニ載ス)

一 本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、
一 島津(マツ)因幡義御実父ニ付、御会釈向格別重ク御取扱ヒ被

致度、且ツ和泉ト改名被致候義ニ付、松平修理大夫殿ヨリ御書付被指出候、

(右御書付、薩州始末第六ニ載ス)

一 同断ノ義ニ付、御親子ノ情難默止次第ニ付、実形身柄

ニ被相復御家内江被引取度義ニ付、松平修理大夫殿ヨリ御書附被指出候、

(前同断、第七ニ載ス)

一 公武御合体御国是被相定候テ、開鎖区々ノ論ニ御泥ミ無之様云々ノ義ニ付、松平大膳大夫殿ヨリ御建白書被

指出候、

(右御建白書、長州始末第一ニ載ス)

二月

一 無事

三月

一 五日、松平大膳大夫殿御見込ノ趣、於廟堂御老中久世(公岡、関備藩主)大和守殿等江御直話被為在候、

(委曲ハ長州始末第四ニ載ス)

一 十八日、松平大膳大夫殿御家来桂小五郎等、御咎被仰付候義ニ付、御同人御家来ヨリ届書指出申候、

(右届書、坂下狼藉始末第十三ニ載ス)

一 二十六日、御老中安藤對馬守殿坂下ニ於テ狼藉ニ被逢候後、御病氣被相逢候処、今日御本復被成候、

(委曲ハ安藤對馬守殿始末第一ニ載ス)

一 本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一 公武是レマテノ御凝滞御水解放メテ航海御開キ、武威(長)海外ニ振候様云々ノ義ニ付、松平大膳大夫殿御家来永

井雅楽(時座)

御所江建白書指出申候、

(右建白書、長州始末第八ニ載ス)

本月中ノ風説

一 去年三月頃、御手許ヨリ黄金御下ケニテ御救ヒ有之候

一件、近コロ武辺ニテ故障申出、終ニ

叡慮ノ通相成ラス、都テ御心得違ヒノ趣申立、九條家

ヨリ返上等ノコトニテ、(有之カ)是レハ違背ノ儀ト申唱ヘニ御座候、

一 当正月二日ノヨシ、南都春日社神鏡一面神前江落チ損シ候由、

帝始メ諸大臣等敬慎ヲ加ヘ、且ツ祈禱ヲ修シ候ヨシ、是レハ四ノ宮神鏡ノヨシナリ、是レカタメニ上巳ノ賀楽ヲ止ム、

一 当月四日、三ノ宮神鏡マタ落チ損シテコレナキヨシ、

帝始メ尚ホマタ敬慎シ、又祈禱ヲ修シ候ヨシナリ、
三月(マコ)

四月

一 六日、御家来ノ内御城下立チ退キ候モノ有之候ニツキ、
(久明、岡藩主)
中川修理大夫殿御書附被差出候、

(右御書附、浪士集会始末第二十四ニ載ス)

一 七日、夷狄掃攘

公武御合体ノ義ニ付、

勅書被

仰出候、

(右 勅書、大赦始末第一ニ載ス)

一 九日、御老中安藤對馬守殿御病氣御達相成申候、

(委曲ハ安藤對馬守殿始末第二ニ載ス)

一 十日、西国筋ノ浪人共多人数兵庫・大坂辺江集リ、暴論ヲ唱ヘ候趣、万々一於

王城地ニ干戈ヲ動シ、惱

宸襟候者於有之ハ、若州一國ノカラ尽シ可申、被遊御安心度云々義ニ付、御所司代酒井若狭守殿ヨリ、廣幡卿等江御建白書被指出候、
(忠札)

(右御建白書、御所司代始末第一ニ載ス)

一 十一日、御老中安藤對馬守殿御役御免、并ニ御刀拝領被仰付候、
(信睦、磐城平藩主)

(右御書附、安藤對馬守殿始末第三ニ載ス)

一 同日、御老中板倉周防守殿外国御用御取扱被仰付候、
(勝靜、備中松江藩主)

(右御書附、板倉周防守殿始末第一ニ載ス)

一 同日、御老中水野和泉守殿外国御用御取扱被仰付候、
(忠精、山形藩主)
右御書附左ニ記ス、

御老中

水野和泉守

外国御用取扱被仰付候、
(之カ)

右於奥相濟、

四月十一日

一十一日 (二九)

和宮様御称呼ノ義ニ付被仰出候、

右御書附左ニ記ス、

一和宮様御称呼ノ事、思召被為在候ニ付、於

御所向ハ是レ迄ノ通

(豫脱カ)和宮ト可奉称旨、被仰出候事、

一十五日、諸向供立相成ル可ク文ケ相省キ候様云々等ノ

義ニ付、被相触候、

(右御触書、御政事御改革向始末第二ニ載ス)

一同日、御病氣ニ付、途中ヨリ御帰国被成候義ニ付、松

平美濃守殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書、松平美濃守殿始末第一ニ載ス)

一十六日、島津和泉上京建言仕候事件ニ付、議・伝奏衆

方御参

内有之候、

(委曲ハ薩州始末ニ詳ナリ)

一同日、島津和泉京師滞在、浪士鎮静有之候様、從御所被仰出候、

(右御書附、浪士集会始末第三十一ニ載ス)

一十七日、島津和泉浪士為鎮静、京師逗留有之候様、被仰出候云々ノ義ニ付、松平修理大夫殿御家来ヨリ、御

所司代衆江届書指出申候、

(前同断、第三十三ニ載ス)

一同日、御領分出生二宮周三入牢被仰付候ニ付、加藤出

羽守殿御家来ヨリ届書指出申候、

右届書左ニ記ス、

一出羽守領分、豫州大汐邸出生ノモノニテ、二宮周二

ト名乗り、蘭人シーホルトニ随ヒ医術修業仕居リ候

処、去ル西ノ年十一月三日、神奈川表戸部御役所ニ

於テ御引渡有之、居屋敷江引キ取り置キ候処、昨夕

町奉行石谷因幡守様御役宅ニオイテ、御吟味中入牢

被申付旨、家来ノモノヨリ被仰渡候、在所ニ付此段

御届申上候、以上

月日

加藤出羽守内

堀 源太兵衛

一十九日、亜墨利加ニストル公方様御目見被仰付候、

但是迄詰合候ニストル番明ニ付、交代ニ参リ候ミ

ニストルノ由、

一二十日、先年御不興ノ筋悉皆御許被遊、以后平常ノ通

御心得可被成云々、徳川刑部卿様ヨリ被仰出候、

(右御書附、徳川刑部卿様始末第一二載ス)

一 二十一日、浪人御取押ヘノ義、島津和泉江被 仰付候

云々ノ義ニ付、

御所ヨリ被

仰出候、

(右御書付、御所司代始末第二二載ス)

一 二十三日、松平修理大夫殿御家来多人數、阿州牧方宿

通行京師江罷越候云々ノ義ニ付、永井飛驒守殿御家来

ヨリ届書指出申候、

(右書附、浪士集會始末第三十四二載ス)

一 同日、浪士共於伏見駅戦争(編者曰、薩藩土寺田屋争闘ノコトナリ)有之候脱力、

(委曲ハ浪士集會始末ニ詳ナリ)

一 二十四日、於伏見浪士ヲ刃傷ニ及ヒ候義ニ付、松平修

理大夫殿御家来ヨリ書付指出申候、

(右書付、浪士集會始末第四十七二載ス)

一 同日、先年御不興ノ筋悉皆御有免、以后平常ノ通可被

相心得旨、松平容堂老江被仰出候、

(右御書付、松平土佐守殿始末第一二載ス)

一 同日、御老中水野和泉守殿、朝鮮人來聘御用御取扱被

仰付候、

右御書附左ニ記ス、

(忠精、山形藩主)
水野和泉守

朝鮮人來聘御用御取扱被仰付候、

右於奥相濟、

一 二十五日、先年御不興ノ筋悉皆御有免被遊、以后平常

ノ通可被相心得、松平春嶽老江被仰出候、

(右御書附、松平春嶽老始末第一二載ス)

一 同日、前同断、尾張前中納言様江被仰出候、

(右御書附、大赦始末第三二載ス)

一 同日、浪士共処置ノ義ニ付、議奏衆ヨリ島津和泉江被

仰出候、

(右御書附、浪士集會始末第四十八二載ス)

一 同日、酒井若狹守殿御家来藤田権兵衛等、

御所向内外御用筋、御沙汰次第相同候様被仰出候、

(右御書附、御所司代始末第八二載ス)

一 同日、御勘定格京師御町奉行組与力加納繁三郎義、前

同断被仰出候、

(前同断、第九二載ス)

一 二十六日、島津和泉滞京ノ義、

御所ヨリ被

仰出候儀ニ付、(島津茂久、薩州藩主)松平修理大夫殿御家来ヨリ大目付衆江届書指出申候、

(右届書、浪士集会始末第四十九ニ載ス)

一同日、御家来御国元脱走ノ義ニ付、松平土佐守殿御家来ヨリ書附指出申候、

(右書付、松平土佐守殿始末雜集第五ニ載ス)

一 二十七日、白亀御献上被成度義ニ付、井伊掃部頭殿御(直憲、彦根藩主)家来ヨリ伺書指出申候、

(右伺書、井伊掃部頭殿始末第三ニ載ス)

一 二十九日、島津和泉、伏見集会ノ浪士取鎮候義ニ付、松平修理大夫殿御家来ヨリ、大目附衆江届書指出申候、

(右届書、浪士集会始末第五十二ニ載ス)

一同日、外国商法ノ様子見置、旁貿易御試ノ為メ、御勦定根立助七郎等二十四人、支那上海江被相遣候、

(右御書附、夷匪入港録上海行始末ニ載ス)

一 晦日、鷹司(輔應)入道様等御慎解、万事平常ノ通被仰出候、

(右御書付、大赦始末第四ニ載ス)

一 本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、(尚忠)一九條関白様等江御加増被仰進候、

(右御書附、鳩毒始末第二ニ載ス)

一 九條関白様ノ悪事ヲ認メ、御同家御門前江張置申候、
(前同断、第五ニ載ス)

一 九條関白様御退職御願書被指出候、

(前同断第六ニ載ス)

一 井伊掃部頭殿於京師被任叙從四位上中將、且ツ御太刀等拜領被仰付候段、御届書被指出候、

(右御届書、井伊掃部頭殿始末第二ニ載ス)

一 島津和泉ヨリ、粟田宮様等御慎解、并ニ閩老等黜陟ノ義ニ付、ケ条ヲ以テ

御所江建白書指出申候、

(右建白書、薩州始末第十八ニ載ス)

一 天下ニ大赦シ、三大臣等ノ幽閉禁錮ヲ被相赦、十年内ヲ被限、夷虜謝絶被遊度云々ノ義ニ付、公卿方江

勅書ヲ以テ被

仰出候、

(右)

勅書大赦始末第二ニ載ス)

一 松平長門守殿(毛利元徳)

御所ヨリ御滞京被

仰出候、

(右御書附、長州始末第十二載ス)

一 近来御改革向姑息ニ流レ候ニ付、コノ后御簡易ノ御制度、質直ノ士風ニ復古被遊度云々ノ義ニ付、御直書ヲ以テ被仰出候、

(右御書附、御政事御改革始末第一二載ス)

本月中風説

一 水野様(金勝)・板倉様(勝勝)御兩人新御老中ニ付、初心ノ為カ外国

方御所置柄モ、至リテ御決断無之、係リ御役人方却テ

安藤様(信勝)・久世様ヲ慕ヒ居候ヨシ、右御兩人ヲ小待ナト

、致誹謗候ヨシ、最初唱へ上候トハ相違ノ御人物ト相

聞得申候、然シナカラ実之湯屋嘶ニテ、突キ留メモ無

之事ニ御座候、

一日光宮様入洛モ道中ニテ滞留被為成、漸二十八日ノ御

着ニ相成候処、平常ノ御行列ト違ヒ、何カ心積リモ有

之候半ト相見エ、又機会ヲ伺候処却テ機会ニ後レ、跡

ノ仕業ト相成、未タ參

内無之、

勅許モ無之由、一説ニハ

和宮様御取扱ヒノ事ニ相係リ候由トモ云、実否不相知

候、

一 近日諸藩臣出奔ノコトヲ、若老酒井右京亮殿(忠敬、敦賀藩主)ニ御嘶仕

候者有之候由ノ処、御同人御嘶ニハ、都下ヨリ奔走ノ

人数八十頭・二十頭ノコトニ相聞へ候得共、薩国始西

陬ヨリ出奔ノ者二三千人ニモ至候哉トノ事ニ相聞へ候

処、何等ノコトヲ生シ候哉、イツレ近日西国筋不穩、

実ニ恐ルヘキ世ノ中ニ相成リ候ヨシ、

一 御老中御上京相成ルヘキコトニ、京都ニオイテ専ラ唱

ヒ仕候処、幕府ニ於テ御役人衆方一円不相知居候義ハ、

致上京候上、事ヲ決シ候人物無之候故ナルヨシ、強テ

被仰付候人有之候ハ、必スソノ人逃路ヲ求メ、上京

イタシマシク、外御三家方江被命候テモ同様ナルヘキ

ヨシ、実ニ幕府二人ナシトイフヘキヨシ、依リテハ奥

御右筆組頭早川(久文)次郎上京致スヘキヨシ相聞へ申候、

左ナク候ハ、近日京都ヨリ帰府相成候監察淺野伊賀

殿、又以テ御上京ニ相成ヘキヨシ相聞へ申候、

一 右監察伊賀殿御上京ノ義、追テ承リ候ヘハ、兵庫開港

期限ニ付、取調御用ニテ被相登候由ニ御座候、

一 先日魯西亞人登城ノ節、日本海測量相願申候処、此節

皇国人心居合不申、既ニ色々故障有之候間、先以テ当

分ノ処、見合呉候様被相諭候由ニ御座候、

一去冬以来、肥后熊本ノ飛脚道中ニ於テ兩度計御用状被奪取候由、外ニ金銀モ有之候得共、金子入ノ分一ツモ不取、御用状計奪取候ヨシ、何者ノ所業ニテ何等ノ訳ニ可有之候哉、相分兼申候、薩州ノ飛脚モ同様ノ由ニ相聞得申候、

一熊本ニテ御城内破損所有之、御普請中ノヨシ、且ツ当候ノ御母公并今御一人御后室御当地御屋敷被為入候処、三ヶ年御入湯御暇願被成候ヨシノトコロ、右御城御普請相響キ、御疑惑相懸候訳ニ可有之哉、右御暇相濟不申ヨシ、熊本藩遠山三左衛門ト申ス人、心配ノ様子ニテ相斷申候由、承リ申候、

一佐賀老侯カネテ賢明、当今ノ時勢如何被成思召哉、世上ニテハ所謂乱世ノ奸雄ナト唱申候処、四月中島津三郎始メテ上京、既ニ戦争ニモ相至リ候様相唱へ、洛中相騒キ候節、佐賀侯ニモ兵器ヲ蒸氣船へ御積ミ、大坂ノ洋マテ御出懸御滞船、暫ラク時勢ヲ伺ハレ、追々無事ニテ相濟候故大坂江御上陸、有馬湯治ト称セラレ、或ハ富商ノ家江御一泊相成候ヨシ実説ニ相聞江、御心中何共訝敷事ト唱申候、

五月

一朔日

公武ノ御間、程ヨク御周旋可有之御依頼思召候段、松平長門守殿江御所ヨリ被仰出候、

仰出候、

(右御書附、長州始末第十八ニ載ス)

一二日、今般公方様御上洛、御国初ノ御先蹤ヲ以テ、列藩予參被仰付云々ノ義ニ付、松平大膳宅利慶親大夫殿ヨリ御建白書被指出候、

(前同断、第十九ニ載ス)

一松平大膳大夫殿御家来ノ由、三十六人程江戸表江罷下候趣ニテ、駿府駅通行仕候段、同所御城代衆ヨリ御建白書被指出候、

(右御届書、浪士集会始末第五十六ニ載ス)

一三日、重立候御用向御談ノ義ニ付、松平肥後守殿江被仰出候、

(右御書付、松平肥後守殿始末第一ニ載ス)

一同日、不顧時勢遊行ノ輩有之由、風聞如何ノ事ニ思召候云々ノ儀ニ付、大炊御門家信卿等へ被仰出候、

右御書附左ニ記ス、

一頃日来道路風聞モ有之候ニ付、

御沙汰ノ次第有之候処、不顧時勢遊行ノ輩有之由、

風聞如何ノ事ニ

思召候、方今国体深憂ノコトニテ、為国家之抛身命候者モ不少候処、前件ノ次第度外ニ擱候段、進退不埒ノ至リニ候、夫レ々々人体急度可糾弾候処、今度ニ於テ被寬宥尔来心得違ノ輩於有之ハ、嚴重ノ御沙汰可被為在候事、

右之通、一紙ヲ以テ飛鳥井中納言被申出候、仍リテ

申入候、御廻覽(可也)一返賜候也、

一五日、松平大膳大夫殿御国忠ノ段、

御満悦被

思召候云々ノ義ニ付、大納言中山卿江、御同人御家来

浦朝負(元龜、長州藩家老)被為召、御書附御渡ニ相成申候、

(右御書附、長州始末第二十二載ス)

一七日、徳川刑部卿様御慎解以后、始メテ御登城被遊候、

(右御書付、徳川刑部卿様始末第四ニ載ス)

一同日、松平春嶽老御目見ノ上、御用向御相談等被仰付

候、

(右御書附、松平春嶽老始末第二ニ載ス)

一同日、御老中久世大和守殿御上京被仰付、且御金拝借

被仰付候、

(右御書付、久世大和守殿始末第三ニ載ス)脱力

一同日、尾張前中納言様、御慎解后始メテ御登城被遊候、

(右御書付、大赦始末第八ニ載ス)

一同日、大久保越中守殿等御上京、御用被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

大目付外国奉行兼役

大久保越中守

久世大和守江被相添、京都江可被相登候事、

御目附

浅野伊賀守

同断

奥御右筆

湯淺寛一郎

佐藤清五郎

同断

一同日、大原三位卿(重徳)関東

勅使被

仰蒙候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一同日、松平春嶽老御用書物御披見ノ節、西湖間へ可被罷出云々ノ義、被仰付候、

(右御書附、松平春嶽老始末第三ニ載ス)

一同日、大坂表ニテ浪人多人数出奔仕候ニ付、御持場増御人数被指出候義ニ付、本多主膳(康綱、膳所藩主)正殿御家来ヨリ書付指出申候、

(右書付、浪士集会始末第五十二ニ載ス)

一同日、浪士共於伏見騒々シクイタシ候ニ付、御人数被指出候様、大坂御城代衆ヨリ御達有之候ニ付、岡部筑前守殿御家来ヨリ書附指出申候、
(長寛)

(前同断、第五十三ニ載ス)

一九日、大原三位卿関東

勅使被

仰付、格別ノ御用筋ニ付、従二位左衛門督被任候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一同日、島津和泉

勅使為御警衛ノ、大原三位卿一同関東江罷下候様被仰出候、

一同日、田安大納言様被叙正二位、且御太刀等拜領被仰

蒙候、

右御書付左ニ記ス、

田安大納言殿

先年以来日々登城格別精勤、御満足被思召候ニ付、別段ノ訳ヲ以テ被叙正二位候、且ツ御年頃ニモ被為成候ニ付、御内願ノ通り御後見御免被成候、以後御政事向キ御相談ニモ可被遊ノ間、折リノ登城可被成候、

右於御前被仰出候、

御同人

御太刀美濃國 兼元代金式拾枚

御茶碗三島刷 毛目

右於奥ニ御手自拝領之、

御同人

思召ヲ以テ御一生ノ中、年々金千両ツ、被遣候旨、被仰出候事、

一十日、松平肥後守殿義、松平春嶽老ト座順、且ツ御用

筋ノ書類御披見ノ節ハ、西湖間江可被罷出旨被仰付候、

(右御書附、松平肥后守殿始末第二二載ス)

一 同日、若老衆酒井右京亮殿・加藤遠江守殿・稻葉兵部(忠世)・(加納久敏、一宮藩主)・(正吉)・(山藩主)少輔殿御出席ノ上、銃隊調練御見分有之候、

一 十一日、松平大膳大夫殿ヨリ御嫡長門守殿御所勞ニ付、(毛利慶總)・(元徳)

京師御出立御延引ノ義ニ付、御届書被指出候、

(右御届書、長州始末第二十一二載ス)

一 同日、二條右府様御昇官被

仰蒙候、

右御書付左ニ記ス、

二條右府(齊敬)

弁左近衛大將、左馬寮推任被賜隨身兵仗候段、被

仰出候事、

一 十三日、松平春嶽老御用ノ節、御用部屋へ可被罷出旨

被仰付候、

(右御書付、松平春嶽老始末第四二載ス)

一 同日、松平肥後守殿御用ノ節、御用部屋江可被罷出旨

被仰付候、

(右御書附、松平肥後守殿始末第四二載ス)

一 同日、大坂表ニテ浪人多人数出奔仕候ニ付、御持場増

御人数被仰出候義ニ付、永井飛驒守殿御家来ヨリ書付指出申候、

(右御書付、浪士集会始末第五十四二載ス)

一 同日、前同断、青山(忠敏、嶽山藩主)因幡守殿御家来ヨリ書付指出申候、

(前同断、第五十五二載ス)

一 同日、今四ツ時吹上江公方様被為成、銃隊調練御上覽被遊候、

但銃隊江罷出候面々江煮シメ被下ニ罷成、右人数共

千九百九拾壹人ト申、御取調相成候へトモ、罷出

候モノハ千八百九百人余ニモ罷成可申由ニ御座候、(初九)

一 同日、近衛大納言様御昇官被

仰蒙候、

右御書附左ニ記ス、

近衛大納言

兼左近衛大將左馬寮推任被

仰出候事、

一 十四日、御老中久世大和守殿御上京、御道中諸事御省

略等ノ儀ニ付、大目付衆江被仰出候、

(右御書付、久世大和守殿始末第七二載ス)

一 同日、前同断、諸向ヨリ附使者御断ノ義ニ付、大目付

衆江被仰出候、

(前同断、第八二載ス)

一同日、御領分百姓筆吉鑿出候金子御引替、同人江被渡
遣候義ニ付、水野肥前守殿御届書被指出候、

右御届書左ニ記ス、

私領分上総国市原郡婦崎村百姓筆吉居宅縁下ヨリ、

真字小判百兩鑿出候ニ付、取計方当三月十八日、御
用番松平豊前守殿江相伺候処、鑿出シ候金子ハ、御

勝手方御勘定奉行江問合セ候上、金座ニ於テ引替、

不残筆吉江渡遣候様、御付札御差図御座候間、御勘
定奉行小笠原長門守江問ヒ合セ、金座ニ於テ引替候

処、当時通用金三百六拾二兩相渡候ニ付、残ラス筆
吉江渡遣候、此段御届申上候、以上、

月日

水野肥前守

一十五日、御老中久世大和守殿御上京ニ付、御羽織御時
服御拝領被成候、

(右御書付、久世大和守殿始末第四二載ス)

一同日、御老中板倉周防守殿、御勝手懸御用被仰付候、

(右御書付、板倉周防守殿始末第三二載ス)

一同日、松平丹波守殿等、御暇被下間敷被仰出候、
右御書付左ニ記ス、

戸田光則、松本藩主
松平丹波守
本田伯耆守

御暇年ニ候得共御人少ニ付、御暇被下間敷候、

右御老中御申渡、

一十六日、大目付衆等御前江被召出、存慮被聴候、
右姓名左ニ記ス、

大目付

駒井山城守

大久保越中守

神保伯耆守

御目付

淺野伊賀守

服部一

藤澤九大夫

川勝縫殿介

右御前江被召出存慮被為聴候、

三奉行

大目付

御目付

勅使始末第四ニ載ス

御前江被召候外、不残御老中御列座、御用被為聽候、

一同日、
勅使御参向ノ義、大目付衆江被仰出候、

右濟テ於羽目間、肥後守殿・春嶽殿・御老中御列座

(前同断、第五ニ載ス)

ニテ御披ノ御評論有之、御退出御遅ク被為在候事、

一同日、酒井雅楽頭殿京都御取締御用被仰付候、

右風説左ニ、

(右御書付、御所司代始末第二十三ニ載ス)

一十六日、御前御用有之、引続御老中御列座、御披キト申御評談有之候由ノ処、御退出ノ節ハイツレモ面色土ノ

一同日、大目付衆等御上京ニ付、御金等拝領被仰付候、
右御書付左ニ記ス、

大目付

外国奉行兼帯

大久保越中守

一同日、

一金七枚

勅使左衛門督大原卿、今日京都御発足被

一時服三

仰出候処、御所勞ニ付、暫御延引被

一羽織

仰出候、

御目付

淺野伊賀守

(委曲ハ大原三位卿関東

勅使始末ニ詳ナリ)

一金五枚

一十八日、分部若狭守殿・仙石讚岐守殿

一時服三

勅使御馳走役被仰付候、

一羽織

(右御書付、大原三位卿関東

京都マテ罷越候ニ付被下之、御序無之御目見不被仰

付候、

右御老中御列座、和泉守殿被仰渡之、

一十九日、島津和泉儀、三郎ト改名イタシ候義ニ付、松

平修理大夫殿御家来ヨリ届書指出申候、

(右薩州始末二ノ第四ニ載ス)

一同日、蕃書調所御引移り等ノ儀ニ付、被仰出候、

右御書付左ニ記ス、

蕃書調所、此度一橋御門外江御引移り相成、洋書調

所ト唱へ替被仰出、来ル二十三日ヨリ諸科諸術トモ

相始メ居り候ニ付、御旗本・御家人并ニ悴・厄介等

ニ至ルマテ罷出、真実ニ修業致シ可申候、尤モ頭支

配ニオイテモ致出精候様、厚ク世話可被致候、委細

ノ儀ハ妻木田宮(頼起)・田村肥後守(直應)・杉浦正一郎(勝巻)へ可被承

合候、

右之通、向々江可被相触候、

二十日、

勅使江戸御着御延引ノ義ニ付、大目付柴江被仰出候、

(右御書付、大原三位卿関東

勅使始末第十二ニ載ス)

一同日、攘夷御英断且ツ

天朝へノ御不実等、早速御託被仰上候様云々ノ義ニ付、
藤堂和泉守殿(高嶽、津藩士)ヨリ御建白書被指出候、

(右御建白書、藤堂和泉守殿始末第一ニ載ス)

一同日、堀田鴻之丞殿、横濱御警衛被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

堀田鴻之丞(正崎、佐倉藩士)

横濱表外国人居留地江、警衛人数差出置候様可被致

候、委細ノ義ハ神奈川奉行へ可被相談候、

一同日、九ツ時過公方様俄ニ御白書院御下段へ出御、詰

合高家衆等江御尋有之候、右御役々左ニ記ス、

詰合

高家

同

詰衆

同

御奏者番

同

三番頭

同

御使番

右イツレモ緩々御目見ノ上、銘々家筋并ニ先祖武功等、委ク御尋ネ有之候事、

一 二十二日、此度関東ノ処置御委任ノ義ニ付、

勅使左衛門督大原卿江

勅書ヲ以テ被仰出候、

(右)

勅書、大原三位卿関東

勅使始末第十五ニ載ス)

一 同日、武州徳丸原江罷越シ、西洋調練可致旨被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第三ニ載ス)

一 同日、御改革向寛永以前ニ被相復候云々被仰出候、

(右御触書、前同断第四ニ載ス)

一 同日、常例音物ノ外堅ク相断候様云々、被仰出候、

(前同断、第六ニ載ス)

一 同日、御老中衆・若年寄衆江内玄関通相越候使者、都

テ相断候云々被仰出候、

(前同断、第七ニ載ス)

一 同日、

勅使左衛門督大原卿京都御発足ニ相成申候、

(委曲大原三位卿関東

勅使始末ニ詳ナリ)

一 二十三日、脇坂揖水老加判ノ列被仰付候、
(安宅、前屯野藩主)

(右御書付、脇坂中務大輔殿始末第二ニ載ス)

一 二十五日、公方様御誕生日ニ付、御祝有之候、

一 二十六日、佛蘭西^(Fr.)ドゥロワヌ^{Duchesse de Balenort}ニストル御目見被仰付候、

一 同日、御老中内藤紀伊守殿、御役御免被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

御座ノ間

内藤紀伊守
(信親、村上藩主)

加判ノ列御免、

溜詰格、於御前被仰付之、

右同人

一 御刀代金貳拾枚

加賀国家次

右御懇ノ蒙上意、御手自拝領之、

一 同日、御側御用人水野出羽守殿、御役御免被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

水野出羽守
(忠寛、沼津藩主)

御側御用人御免、

帝鑑ノ間於御前被仰付之、

右同人

一御時服七

数年出勤相動候ニ付被下之、
(精九)

右於奥御手自拝領之、又御印籠モ御手自拝領被仰

付候事、

一二十七日、御老中久世大和守殿、御上京等御免被仰付
(カ)

候、

(右御書付、久世大和守殿始末第十三ニ載ス)

一同日、御老中久世大和守殿、御役御免御願書被指出候、

(委曲前同断、第十四ニ載ス)

一二十八日、前同断御願書被差出候処、先其俵養生被致

候様被仰出候、

(右御書付、久世大和守殿始末第十五ニ載ス)

一同日、御曲輪御門御取締向ノ義ニ付、大目付衆等へ被

仰付候、

(御書付、左ニ記ス)

御曲輪御門々并ニ御城中御門々共、当時増番等有之
候得共、向后人数等前々ノ通相心得候様可相達候、

尤モ御取締向相弛候様心得違無之、前々ノ通りノ人

数ニテ、無油断格別嚴重御取締向行届候様、可被相

達候事、

本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一此度関東江

勅使被相下候ニ付、三事ヲ被為策、御問ヒ合セノ為メ、

公卿方江

勅書ヲ以テ被仰出候、

(右)

勅書、大原三位卿関東

勅使始末第十五ニ載ス)

一公方様御上洛御延引、且ツ

王室御取扱等ノ義ニ付、松平阿波守殿御建白書被指出
(録須賀寄附、阿州藩主)

候、

(右御建白書、松平阿波守殿始末第一ニ載ス)

一松平大膳大夫殿ト被申合、於幕府周旋仕候様云々ノ義、

御所ヨリ島津和泉江御演舌有之候、

(右御演舌書、薩州始末二ノ第一ニ載ス)

一宇治江御茶入被遣候節、無益ノ手数相省候様被仰出候、
(六月二日)

(右御触書、御政事御改革始末第八ニ載ス)

一御用多ニ付、暑寒等ノ節、御老中衆、若年寄衆江不及

御見舞候段被仰出候、

(右御書付、前同断、第九ニ載ス)

(六月二日カ)

一御礼廻勤ノ義、御月番御老中衆・若年寄衆ノ外廻勤ニ

不及段、被仰出候、

(前同断、第十二載ス)

(六月四日カ)

一養子縁組被仰付振リノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第十一ニ載ス)

(尚志)

一九條関白様御願ノ通、御辞職被

仰出候、

(委曲ハ鳩毒始末ニ詳ナリ)

(政通、前太政大臣)

一鷹司入道様等御還俗被

仰出候、

(右御書付、大赦始末第十一ニ載ス)

一寺庵鐘・太鼓等、諸国御大名方江差出候様、知恩院ヨ

リ支配寺江被相触候、

右御触書左ニ記ス、

乱世ノ時節ニ相成候様ノ風説有之候処、依リテハ諸

国大名江寺庵鐘・太鼓、其外仏具等差出候様ノ義有

之候ハ、無泥差出可申候、以上、

戊五月

知恩院

大蓮寺等

三十四ヶ寺

江

本月中ノ風説

一五月朔日、惣参

内、御退出ハ丑ノ刻ニ及ヒ候ヨシ、

一主上

御英傑ニテ、去月中旬頃ヨリ御寵愛ノ御局方皆々退ケ

ラレ、奸婦ノ言語ヲ忽チ被遊御絶候所ト申ス風説ナリ、(敵カ)

一近日、中川侯モ登京ト申スコト、(大略、同書上)

勅命ニヨルト申ス事、

一水府九郎鷹殿、急登京可有之様被仰付候トノ風説ナリ、(松平度政)

一此度ハ

天子御親征ノ御手始メニテ、薩州・長州先鋒ニテ、先

ツ

御首途山城国

御巡幸ト申ス説、専ラ相唱ヘ申候、

一コノタヒノ事件出来次第ニテ、天下ニタ割レニ相成候

事ニ、専ラ風唱御座候事、

一過日八日夕刻ヨリ、ニワカニ三公始メ摂家残ラス(原註一条二一条久我) (原

註 近衛・鷹司)議奏・伝奏、其外諸卿御參
内相成候事、

右、コノタヒ御老中上京候様、関東江被

仰渡候処、御請ハ申来リ候得共、人体イマタ日限モ
參リ申サス、甚遅ニ及ヒ候ニ付、浪人共追々催促ニ
及ヒ、抛ロナク関東江

勅使被相下候コトニ相濟シ、大原卿直チニ被

仰付候事ニ相唱ヘ申候、

一 黒田侯・池田侯御参府ノ処、途中ヨリニハカニ御引キ
返シ、御帰国ノコトニ相聞ヘ申候、

一 一兩日以前、加州御家老モ上京ニ相成候由ニ相聞ヘ申
候事、

一 細川越中守殿御家老長岡帯刀義、コノタヒノ事出来候

ハ、模様次第当君侯御舍弟某殿有志ノ御方ニ付、右

ヲ御誘ヒ申シ致出張候由ニ、薩州ト品々示シ合セ置候
ノヨシ、相聞得申候、

一 備前岡山城主池田侯ノ藩士子弟ノ中達者ナルモノ、過
ル十八日迄ニ七十人数計致上京候由ニ相聞ヘ申候、

一 当時京師江、西国筋等ヨリ人数多ク登リ居リ申候ヨシ、
諸侯方ノ内、薩州ハ近衛様御警衛ノタメト申立、長州

ハ有栖川様御警衛ノタメト申立、尤モソノ余イツレモ
右同様、御一門ノ宮様・摂家方・堂上方御警衛ト申立、
追々人数致上京候由、

一 禁裏御門御固メ、六門共ニ大筒伏セ有之候ヨシ、風聞
ニ御座候処、当時并伊様御固ノ境町口御門ニ車台ノ大
筒三挺、寺町口御門同式挺、清和院御門江三挺、其外
式三挺ツ、外番所・続小屋々々簾圍ノ内ニ建ヲ懸ケ、
伏セ有之候由、

一 此節、京都諸色万事下直ニ相成リ、且ツ芝居等アリ、
賑々シキコトニ相成申候、尤モ西国大名衆ノ義ハ相替
ラス事(ザル事)此節ニテハ、京師ノ内ニ一万人ハカリモ在住
ノヨシ、

一 此節大坂・兵庫海辺ニ、新ラシキ長屋沢山出来候様子
ニテ、又々錦小路辺町家ヲコハシ、武士家建立ニ相成
リ候風説ニ御座候事、

一 公方様十七日コロノヨシ、御飼鳥五千籠余或ハ御払
ヒ、或ハ被下ニ相成リ、多人数相懸リ持チ運ヒ、ソノ
外ニ拾六籠ハ大御所様被遊御飼候鳥ニ付、右計被相残
候ヨシニ御座候、

六月

一朔日、公方様御上洛被遊候義ニ付、御老中様衆ヨリ、(所カ)

御所司代衆江御書簡被仰遣候、

(右御書簡、公方様御上洛始末ニ載ス)

一同日、前同断ノ義ニ付、大坂御城代衆江御書簡被仰遣候、

(前同断、第三ニ載ス)

一同日、公方様御上洛ノ義、御三家其外御大名方江被仰出、且ツ御懇ノ上意有之候、

(前同断、第四ニ載ス)

一同日、昨夜東禅寺本堂裏ノ辺ニテ、怪シキ物音致シ候ニ付、増人数被差出、御持場内御別条之レナキ義ニ付、(御脱カ)
戸田采女正殿ヨリ御届書被差出候、(氏根、大増藩主)

(右御届書、東禅寺狼藉始末第二ニ載ス)

一同日、前同断ノ義ニ付、岡部筑後守殿御届書被差出候、(長真、岸和田藩主)

(前同断、第三ニ載ス)

一同日、松平丹波守殿御家来伊藤軍兵衛事、異人ヲ殺害ノ上自殺仕候儀ニ付、御同人御伺書被指出候、(益英)

(前同断、第四ニ載ス) (脱カ)

(一同日、松平丹波守殿、東禅寺御警衛御免被仰付候脱カ)

(前同断、第六ニ載ス)

一同日、本田伯耆守殿、東禅寺御警衛被仰付候、(正勤)

(前同断、第七ニ載ス)

一同日、御氣付ノ筋無遠慮可被仰上旨、松平大膳大夫殿江被仰出候、(御脱カ)

(右御書付、長州始末第二十五ニ載ス)

二日、御老中久世大和守殿御役御免ニ付、御代リノ方御上京被仰付然ルヘキヤ云々ノ義、御老中衆ヨリ御所司代江御問合ノ御書簡被仰遣候、(正徳)

(右御問合書、前同断、第十八ニ載ス)

一三日、伊藤軍兵衛死体、御目付衆御差図ヲ以テ、番人被附置候義ニ付、松平丹波守殿御届書被差出候、

(右御届書、東禅寺狼藉始末第十二ニ載ス)

一四日、伊藤軍兵衛相残シ置キ候願書体ノ書類、封書数通御町奉行衆御役宅等江被差出候義ニ付、松平丹波守殿ヨリ御届書被差出候、

(前同断、第十三ニ載ス)

一同日、伊藤軍兵衛死体被引取候儀ニ付、松平丹波守殿御届書被差出候、(核カ)

(前同断、第十四ニ載ス)

一同日、御所司代酒井若狭守殿、関東江御用召被仰出候、(忠義)

(右御書付、御所司代始末第十二載ス)

一五日、御上京ノ節、堂上方等江御進献物ノ義ニ付、松平大膳大夫殿ヨリ御伺書被差出候、

(右御伺書、長州始末第二十六ニ載ス)

一同日、松平春嶽老為御手当、年々米万俵ツ、御頂戴、

且ツ御登城ノ節、平川口ヨリ御風呂屋口通可被罷通云々被仰付候、

(右御書付、松平春嶽老始末第五ニ載ス)

一六日、脇坂中務大輔殿、公方様御上洛御用被仰付候、

(右御書付、脇坂中務大輔殿始末第三ニ載ス)

一同日前同断ノ義ニ付、大目付衆等へ被仰出候、

(右御書付、公方様御上洛始末第六ニ載ス)

一異人手疵受候者、為療治ノ御医師被遣云々ノ義ニ付、

御老中衆ヨリ、英国岡士江御書簡被相贈候、

(右御書簡、東禅寺狼藉始末第十五ニ載ス)

一七日、奥御右筆衆・大目付衆等、公方様御上洛御用被

仰付候、

(前同断、第七ニ載ス)

一同日、近衛前左大臣様、関白

宣下

御内意被

仰蒙候、

(委曲ハ大赦始末ニ詳ナリ)

一同日、

勅使左衛門督大原卿、江戸御着ニ相成リ申候、

(委曲大原三位卿関東

勅使始末ニ詳ナリ)

一十日、

勅使御対顔ノ節、御譜代・御大名等御着服ノ義ニ付、

被仰出候、

(右御書付、前同断第二十五ニ載ス)

一同日、

勅使左衛門督大原卿御登城有之候、

(委曲ハ前同断ニ詳ナリ)

一十二日、伊藤軍兵衛異人ヲ致殺害候ニ付、兼テ護衛士

ノ怠慢、夫レ々御相当ノ罪ヲ被加可申云々ノ義ニ付、

御老中衆ヨリ、佛国^{Duchesse de Bellefontaine}ミストル江御書簡被相贈候、

(右御書簡、東禅寺狼藉始末第十六ニ載ス)

一十三日、

勅使左衛門督大原卿御登城有之候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一十四日、御所司代酒井若狭守殿御病氣ニ付、京都御発足御延引ノ義ニ付、御同人御家来ヨリ書付指出申候、

(右書付、御所司代始末第十一ニ載ス)

一十五日、公方様御上洛ノ節、供奉被相勤度義ニ付、酒

井左衛門尉殿御願書被差出候、

(右御願書、公方様御上洛始末第十九ニ載ス)

一十八日、

勅使左衛門督大原卿御登城有之候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一二十二日、此度御改革ニ付、奈良御奉行御差留、御町奉行江御兼帯被仰付、然ルヘキヤ云々ノ義ニ付、御老中衆ヨリ御所司代衆江、御問合ノ御書簡被仰遣候、

(右御書簡、御政事御改革始末第十三ニ載ス)

一同日、前同断、堺ノ御奉行御差留、大坂御町奉行江御兼帯被仰付、可然哉云々ノ義ニ付、御老中衆ヨリ大坂御城代衆へ、御問合ノ御書簡被仰遣候、

(前同断、第十四ニ載ス)

一二十三日、近頃外国人馬上不作法ニ乘廻シ候ニ付テハ、

万一先方ヨリ無礼法外相働候者、夫レナリニハ差置キカタク云々ノ義ニ付、(島津茂久)松平修理大夫殿御家来ヨリ、書付差出申候、

(右書付、薩州記事、島津三郎家来東海道生麦村ニ於テ、英

人三名英婦一名殺傷イタシ候始末第一ニ載ス)

一二十八日、紀伊中納言様等御対顔被為在候、

右御書付左ニ記ス、

紀伊中納言殿

尾張前中納言殿

御座ノ間ニ於テ緩々被遊御対顔候事、

但右御両所様、昨夕俄カニ被仰出、今日御登城被遊候、且ツ当尾張様・水戸様ニハ、御所勞ニテ御登城無之候事、

一二十九日、

勅使左衛門督大原卿御登城有之候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一勅使ヲ以テ被

仰出候、公方様御上洛、并ニ海岸五ヶ国ノ大藩五大老

ノ職ヲ被命候義ハ、御断被遊候様云々ノ義ニ付、松平

阿波守殿ヨリ御建白書被指出候、

(右御建白書、松平阿波守殿始末第二ニ載ス)

一 此度御改革ニ付、極老ノ者へ米銀錢ノ内可被下旨被仰

出候、

(右御書付、御政事御改革始末第十二ニ載ス)

一 海路測量ノ義ニ付被仰出候、

右御書付左ニ記ス、

追々御軍艦御取立相成、以来航海往復モ度々有之候

ニ付テハ、海路ノ陰易熟知イタシ候儀必要ノ義ニ付、

以来航海ノ節、難波覆没ノ患コレナキ為メ、此度御

軍艦組ノモノ被差遣、伊勢・志摩・尾張三ヶ国海路

測量イタシ候筈ニ付、見通シノ場所目印杭ヲ打チ、

海岸地上陸歩行等モイタシ、模様次第城下并ニ寺社

境内江モ相越シ、杭打チ等可致候義モ可有之候間、

其節差支無之様、可被取計候事、

一 洋書調所稽古ノ義ニ付被仰出候、

右御書付左ニ記ス、

周防守殿御渡

大目付

御目付

江

洋書調所稽古ノ義、万石^{マカ}以上以下陪臣、兩文典句読

相済候者、稽古差許候段、去ル午ノ年中相触レ置候

処、向後ハ文典句読不相済候共、格別執心ノ者ハ稽

古差許候筈ニ候、委曲^{細力}ノ儀ハ田村肥^{直徳}后守・杉浦正一^{勝徳}

郎可被承合候、

右之通向々江可被相触候、

本月中ノ風説

一 尾張前中納言様等御登城ノ日、御白書院御下段ニテ、

御三家様方江御老中衆御用談被為在候、

一同日、肥後守殿御登城被成、春嶽殿ニハ御登城コレナ

ク、ヨリテ御尋ネトシテ、伊東長春院老被遣候、

但十六日ヨリ御不快ニテ、御登城コレナク候、

一同日、溜詰一統被為召候ヨシノトコロ、病氣ニテ一人

モ罷出申サスヨシノコトニモ相聞へ申候、

一 過日朔日、諸大名方御登城ノトコロ、差懸御居残被仰

出候処、俄カニ諸大名方各談合、別席ナトニテ公方様

ヨリ如何之義御尋可有之哉ナト、何ニモ知ラス坊主等

ニ致聞合、大心配ノ体ニテ甚見苦敷、混雜ノヨシニ相聞申候、

一 御老中始メ御目付中等モ、新役同様ノ人多キユヘカ、差懸諸大名江御逢ニ相成候処、殿中大混雜、差引方色々間違等多ノヨシニ相聞得申候、

一 当將軍家御幼年ニハ候得共、御英邁ノ御方ノヨシ、過日朔日コロニモ候哉、御三家御対顔ニテ一応ノ御規式相濟ミ、シカル後御禱御外シ、御懇之御談話ニテ、コ

ノタヒ御政事向ノ義、何事ニテモ遠慮ナク可申出、尤モ幼年ノ事ニ候ヘハ、不行届モ可有御座、何分御頼イタシ候トノ御口上被為在候由、且ツ又コロゴロニ相成リ、兼ネテ御慰ミノタメ被遊御畜候小鳥、又ハ植木ノ類残ラス下々江被下ニ相成候ヨシ、此分ニテ御成長被遊候節ハ、如何ナル名將軍ニ被為成候哉モ計リカタクトテ、人皆奉賞歎候事ニ御座候、

一 御側衆池田甲斐守コノコロ病死ノ処、其実ハ久世侯同腹ノ人ニシテ、コノタヒノ一条コトゴトク恐怖シ、狂氣ノ上屠腹トノ事ニ唱ヘ候、

一 此節専ラ西洋訓練被相行候処、番頭以下各高ニ応シ、士分一人ニテモ二人ニテモ、召シ連レ可申御達有之ヨ

シ、然ルトコロ小高ノ向キハ、家来手当等不行届、何レ不平ヲ抱キ暇ヲ乞候者コレアリ、依リテ止ムヲ得ス

日雇ヲ以テ召シ連レ候事ニ相成リ、日雇本人ノ方ニテ立付袴等拵置キ、今日ハ御書院番組、幾日ハ御小姓組ト、右本人ノ方ニテ心得居、立付袴ニテ差出候節ハ、雇賃幾程ト申ス様ニイタシ差出候由、実ニ案山子同様、

何ノ役ニモ相立申間敷ト世間大笑ノ由ニ御座候、
一 妻木田宮殿御目付相勤居候処、去月二十九日コロニモ候哉、柳原通り夜中通行ノ節、何ニモノニ候哉突然来

リ、馬ヨリ引落シ打擲仕候ヨシ、田宮殿ハ漸ク其場ヲ脱シ、罷歸リ候様子ニ御座候得共、天下ノ監察ヲモ相勤候者、右様ノ危難ニ逢ヒ候義ハ、古今稀有之事ニ御座候、是レ又幕府ノ威權衰微ノ方ヨリノ事ニ可有之候、歎息ノコトニ御座候、田宮殿ハ右ニ付、早速御役御免ニ相成候由ニ御座候、

一 近頃国替ノ風説御座候、右ハ江州彦根ヨリ勢州桑名江
中野殿(原註カ)酒井雅樂頭殿、(原註カ)井伊掃部頭殿
勢州桑名ヨリ播州姫路江、播州姫路ヨリ江州彦根江、
右之通国替相成候事ニ専ラ相唱ヘ申候、

一 先日中、徳大寺大納言卿・飛鳥井中納言卿江伝奏御内勅御座候由、

(官武通記) 國書刊行会にて校訂

官武通紀卷二

五七一 日標

七月

一朔日、

勅使御返答二付、溜詰・同格・御譜代御大名・高家・

詰衆・御奏者番・右御嫡子共、総御登城有之候、

(右御次第書、大原三位卿閑東

勅使始末第三十四ニ載ス)

一同日、松平伊豆守殿大坂御城代被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

寺社奉行

(大河内信古、參河吉田藩主)
松平伊豆守

大坂御城代被仰付之、被叙四品候、

一二日、分部若狹守殿、

勅使御馳走役御免被仰付候、

(右御書付、大原三位卿閑東

勅使始末第三十五ニ載ス)

一同日、島津三郎御刀拜領被仰付候、

(右御書付、薩州始末二ノ第十六ニ載ス)

一三日、淺草等御材木蔵火ノ番、御指留被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第十五ニ載ス)

一同日、神奈川御奉行・長崎御奉行・浦賀御奉行御在在

被仰付候、

(前同断、第十七ニ載ス)

一五日、日光御奉行御在在被仰付候、

(前同断)

一六日、御船手御役名被相廢、御軍艦奉行支配被仰付候、

(前同断、第十八ニ載ス)

一同日、徳川刑部卿様再御相統被仰蒙、且ツ御後見被仰

蒙候、

(右御書付、徳川刑部卿様始末第七ニ載ス)

一同日、大橋順蔵義出牢ノ上、戸田越前守殿江御預被仰

付、

(委曲ハ大橋順蔵始末第七ニ詳ナリ)

一九日、松平春嶽老御政事総裁職被仰付候、

(右御書付、松平春嶽老始末第九ニ載ス)

一同上、コノタヒ御改革ニ付、甲府勤番一人ニ被仰出候

ニ付、酒井伯耆守殿御役御免被仰付候、

(右御書付、御政事御改革始末第二十一ニ載ス)

一十一日、御大名御留守居近来不慎ノ義相聞へ、如何ノ事ニ候間、先年相達候趣、無遺失相守候様云々ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第二十二ニ載ス)

一十二日、松平大膳大夫殿御上着後、御所勞ノ次第、且ツ御父子御申談御周旋ノ義ニ付、御家来毛利筑前、議奏衆江書付式通差出シ申候、

(右書付、長州始末第三十二ニ載ス)

一十三日、水野筑後守箱館御奉行御在住被仰付候、

(右御書付、御政事御改革第二十三ニ載ス)

一十六日、松平大膳大夫殿江

御所ヨリノ御掛念御氷解、猶又

勅慮弥以テ御貫徹相成候様、厚ク御周旋ノ義御依頼被仰出候、

(右御書付、長州始末第三十一ニ載ス)

一同日、薩州ト同心戮力ニテ

勅使御輔翼被成度段、松平大膳大夫殿ヨリ

御所江被相伺候、

(前同断、第三十三ニ載ス)

一十七日、外国御奉行村垣淡路守殿、箱館御奉行御兼帶御免被仰付候、

(右御書付、御政事御改革始末第二十四ニ載ス)

一二十一日、九條前関白様諸大夫島田左兵衛権大尉、京都加茂川筋ニ於テ被致臯首候、

(右罪状書、鳩毒始末第九ニ載ス)

一二十五日、京師錦天神社内ニ捨文コレアリ候、

(右捨文前同断、第十三ニ載ス)

一二十七日、松平大膳大夫殿御父子ノ内、御一人御滞在、

御一人御出府御周旋成サレ候様、

御所ヨリ被

仰出候、

(右御書付、長州始末第三十八ニ載ス)

一二十八日、松平大膳大夫殿京都御滞在、御嫡長門守殿御出府成サレ候義ニ付、御書付差出サレ候、

(右御書付、長州始末第三十九ニ載ス)

一同日、松平長門守殿御病氣御快氣ニ付、御書付被差出候、

(右同断、第四十二ニ載ス)

本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一勅使ヲ以テ関東江被

仰出三ヶ条御奉行ノ義ニ付、松平大膳大夫殿ヨリ

御所江被相伺候、

(右御伺書、長州始末第三十三載ス)

一外国船艦詔方ノ儀ニ付、被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第十九載ス)

一万石以上ノ方々、軍艦ニテ御参府等苦シカラサル旨、被

仰出候、

(右御觸書前同断、第二十二載ス)

一公方様御上洛容易ニ御発興不被遊、江戸ニ於テシカト

御廟算御確定ノ上、能ク^{〔昇〕}京師ノ御模様御探リ遊ハ

サレ候様云々ノ義ニ付、林大學頭殿御建白書被差出候、

(右御建白書、公方様御上洛始末第八載ス)

一公方様御上洛ノ節、供奉被相勤度義ニ付、御家ヨリノ

御願書被差出候、

(右御願書前同断、第二十二載ス)

一二十六日頃ヨリ亥ノ方ニ彗星相頭レ候ニ付、土御門家

ヨリ考書

奏聞ニ罷成申候、

右考書左ニ記ス、

従去月下旬、彗星出現于紫微垣内、不日而出于垣外

芒漸長矣、天文大成曰、客星者非常之星、天皇大帝

之以告咎罰者也、又曰、中垣紫微天子之大内也云々、

当年出現之異星、初見雖出垣内、不日而移座于垣外、

其応鮮歟、近年彗星度々出現、必雖不為災異之凶兆、

天変所宜致謹慎歟、仰冀專加戒慎、厚施恩沢、崇敬

虔誠、有禱于上下之神祇、則可以免其凶禍矣、仍謹

勘如件、

本月中ノ風説

一加州侯^{〔前出考案〕}近々御上京ノ由、御旅館ハ京都川東ト称スル洛

外ニ相成候処、寺々大山ノ内、建仁寺・頂妙寺・法林

寺御借り受ケ、建仁寺本陣ノヨシ、京都御屋敷河原町

ト申ス処ニ候トコロ、右近辺ノ町家一字御買ヒ上ケナ

リ、御家老前田土佐守・奥村河内守・今枝内紀・中川

八右衛門御用掛ト申渡シ候ヨシニ相聞ヘ申候、

一加州ニテ人数上京云々風説ハ、全ク虚説ニ御座候、唯

御上洛御供願候ニ付、大津陣屋ヘ此間作事奉行出張イ

タシ候、

右等ヨリ種々ノ風説コレアリ候様相聞ヘ申候、

又三條様ヨリ加州侯江御使者遣ハサレ候義、イヨイヨ

相違ナクコトニ御座候得共、如何様ノコトニ候哉、サ

ラニ他ニ洩レ申サス、一説ニハ御人数御差出シ相成リ

候様、御願(頼カ)ヒニモコレアルヘキヤト申スコトニ御座候、

一駒井山城守・淺野伊賀守關宿組ニ候処、コココロノ一

条ニテ大ニ恐怖シ、奥向江賄賂ヲ遣ヒ、其役ヲ相保チ

候ヨシナリ、尤モ久貝河内守モ同組故、数人寄り合ヒ

コレアリ候ヨシノ事、

一將軍様コノゴロニ御勉強ナサセラレ、夜五鼓ノ後ニ至

リ候ヨシ、ヨリテ御読書御相手ノ義御吟味ニ相成リ、

大略杉原平助ソノ人トナリユヘ、御相手被仰付候哉ト

申スコトニ御座候、賞歎ノコトニ人ミナ唱へ上ケ居申

候、

一大目付駒井山城守・御目付淺野伊賀守兩人ハ、前文ノ

通關宿候服心ノ人ニコレアリ候処、關宿候御引籠リニ

相成候得ハ、兩人コトゴトク心配、將軍様御実母(実カ)寛成

院様江千五百兩賄賂ヲ用ヒ、奥向都合ヨロシク、タ、

今ト相成候テハ仮令奸人タリトモ、相退ケ候義相叶ヒ

申サスノミナラス却リテ權威盛ナルヨシナリ、且ツ關

宿候ノ御退職一条モ、奥向ヨリノ御差函ニテ、当御老

中方ノ御吟味ニ無之ヨシニ相聞ヘ申候、

八月

一朔日、九條前(尚忠)閑白様御門柱江、御首ハ当分御預ケ置ク

候云々ノ義、落書致シ候モノ有之候、

(右落書、鳩毒始末第十四ニ載ス)

一同日、井伊掃部頭殿京都守護御免被仰付候、

(右御書付、井伊掃部頭殿始末第五ニ載ス)

一同日、御国益御主法方被廢止候義ニ付、被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第二十六ニ載ス)

一二日、水戸前中納言様御贈官、并ニ御家来安島(信立)帶刀等

以礼收葬候様云々ノ義ニ付、

勅書ヲ以テ幕府江被仰出候、

(右

勅書、水戸中納言様始末第一ニ載ス)

一同日、水戸前中納言様ノ御遺志ヲ被為繼、可被為有丹

誠旨、当中納言様被仰渡候様、

勅書ヲ以テ幕府江被

仰出候、

(前同断、第二ニ載ス)

一同日、學習院ニ於テ、議伝奏御兩役ヨリ(安政五、六年)戊午己未以來、

官武降黜幽閉等ノ輩、追々再出ニ相成候得共、地下輩

ニ於テ其俣ノ分モ有之候間、早々御赦免有之候様、御周旋可被成義ニ付、松平長門守殿江、御書付ニ通御渡シニ相成リ申候、

(右御書付、長州始末第四十一ニ載ス)

一同日、松平大膳大夫殿ヨリ、御嫡長門守殿御出府ニ付、御周旋ノ件々、ケ条ヲ以テ大納言中山卿江被相伺候、

(右御伺書、前同断、第四十二ニ載ス)

一三日、松平修理大夫殿御家来堀次郎義、(伊地知貞徳)不届ノ所業有之候ニ付、修理大夫殿御手限り殿シク御取計可被申付旨、被仰出候、

(右御書付、薩州始末第二十七ニ載ス)

一五日、水戸前中納言様御贈官ノ義ニ付、幕府ヨリ当中納言様江被仰出候、

(右御書付、水戸中納言様始末第三ニ載ス)

一同日、水戸前中納言様ノ御遺志ヲ被為繼、可被為有丹誠旨、幕府ヨリ当中納言様江被仰出候、

(前同断、第四ニ載ス)

一六日、伊藤軍兵衛ト引合ヒ候モノ、夫レノ御仕置被仰付候義ニ付、咎書相副ヘラレ、御老中衆ヨリ英国岡士江御書簡被相贈候、

(右御書簡等、東禅寺狼藉始末第十八ニ載ス)

一十六日、濱御殿ニ於テ、(重徳)勅使左衛門督大原卿御饗応有之候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一同日、久世大和守殿御老中御勤役中、御不束ノ御取計有之候ニ付、御加増壱万石被召上、御隠居被仰付候、

(右御書付、久世大和守殿始末第十九ニ載ス)

一同日、安藤對馬守殿御老中御勤役中、御不束ノ御取計有之候ニ付、先達テ村替被仰付候場所其俣被召上、御隠居被仰付候、

(右御書付、安藤對馬守殿始末第五ニ載ス)

一十八日、島津三郎焔国ノミキリ、近衛様へ伺公イタシ候義ニ付、松平修理大夫殿御家来ヨリ、届書差出申候、

(右届書、薩州始末第三十一ニ載ス)

一二十日、松平長門守殿御出府ニ付、御家来ヨリ届書差出申候、

(右届書、長州始末第四十四ニ載ス)

一二十一日、勅使左衛門督大原卿、江戸御発駕被成候、

(委曲ハ大原三位卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一同日、島津三郎家来東海道神奈川宿手前ニテ、異人ヲ殺傷仕候義ニ付、松平修理大夫殿御家来ヨリ届書差出

申候、

(右届書薩州記事、島津三郎家来東海道生麥村ニ於テ、英人

三名・英婦一名致殺傷候始末第二ニ載ス)

一二十四日、松平長門守殿御出府ニ付、御目見被仰付候、

(右御書付、長州始末第四十五ニ載ス)

一攘夷ノ

勅慮速カニ被行候様御周旋ノ義、且ツ京師御警衛ノ為

メ、暫ク御滞京被致候様、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、(山内豊範、土州藩主)松平土佐守殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書等、松平土佐守殿始末第五ニ載ス)

本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一前内大臣久我卿等御各被

仰付候、

(右御書付、鳩毒始末第十六ニ載載ス)

一九條前関白様等御各被

仰付候、

(前同断、第十八ニ載ス)

一中川修理大夫殿御家来小川彌右衛門義、(父明、四藩主)島津三郎勤

王ノ志志ニ随ヒ、戮力イタシ候段、

勅感不斜

思召候云々ノ義ニ付、

御所ヨリ被

仰出候、

(右御書付、浪士集会始末第六十二ニ載ス)

一同断小川彌右衛門義、青蓮院様等御内移ノ趣ヲ以テ、

御咎筋御差免ノ義、御在所へ御下知被成候云々ノ義ニ

付、中川修理大夫殿ヨリ議奏衆江御願書被差出候、

(前同断、第六十一ニ載ス)

閏八月

一朔日、松平肥後守殿京都守護職被仰付候、(彦原、会津藩主)

(右御書付、松平肥後守殿始末第四ニ載ス)

一三日、長野主膳御仕置ノ義ニ付、井伊掃部頭殿江被仰

渡候、(直惠)

(右御書付、鳩毒始末第二十二ニ載ス)

一四日、公方様御上洛ノ節供奉被相勤度段、藤堂和泉守(萬巻)

殿ヨリ御願書被差出候、

(右御書付、藤堂和泉守殿始末第五ニ載ス)

一七日、松平春嶽老御登京暫ク御猶予、且ツ時勢ニ於テ

行ハレカタク義ハ、恐レナカラ御断申上候云々ノ義ニ

付、御老中板倉周防守殿等御連名ニテ、(勝也)両伝奏衆江御

書簡被仰遣候、

(右御書簡、大原三位卿関東

勅使始末第四十七ニ載ス)

一八日、松平阿波守殿以來折々御登城被成候様被仰出候、

(右御書付、松平阿波守殿始末第三ニ載ス)

一同日、伊藤軍兵衛英卒ヲ殺害致シ候ニ付、償金差遣ハ

サレ候義ニ付、御老中衆ヨリ英国コンジユル江、御書

簡被相贈候、

(右御書翰、東禪寺狼藉始末第二十二ニ載ス)

一九日、魯国公使登城有之候由、(Gardiner 函館駐米領事)

一十一日、松平肥後守殿御役知五万石御頂戴被成候、

(右御書付、松平肥後守殿始末第五ニ載ス)

一十二日、コノタヒ御改革ニ付、小普請奉行配下ノモノ

トモ、軍艦御奉行等支配ニ相入ラセラレ候、

(右御書付、御政事御改革始末第二十七ニ載ス)

一十四日、公方様

勅意御遵奉等ノ義ニ付、公卿方江

勅書ヲ以テ被

仰出候、

(右

勅書大原三位卿関東

勅使始末第四十八ニ載ス)

一同日、公方様

勅意御遵奉ニ付、猶ホ又御国家ノ為メ、丹誠ヲ抽ンデ

御周旋ノ義、内々被遊御依頼度段、御大名方江

勅書ヲ以テ被

仰出候、

(前同断、第四十九ニ載ス)

一同日、戸田越前守殿、(忠恕カ)山陵御普請等御用被仰付候、

(右御書付、戸田越前守殿

山陵御修補始末第二ニ載ス)

一同日、

山陵御普請等ノ支度、并ニ御入用金等御取調可被差出

旨、戸田越前守殿江被仰出候、

(前同断、第三二載ス)

一同日、

山陵御普請ノ義、御重役ノ中、重モ立引受け取扱ヒ候

モノ之ナク候テハ、御用弁モヨロシカルマシキ義ニ付、

間瀬和三郎江取扱ヒ可申付云々ノ義ニ付、戸田越前守

殿江被仰出候、

(前同断、第四二載ス)

一同日、酒井若狭守殿思召有之、御加増地壹万石被召上

御隠居被仰付候、

(右御書付、御所司代始末第二十一二載ス)

一同日、兼ネテ願ヒ相済ミ居リ候ヨシヲ以テ、外国人兩

三人大長持様ノ物昇カセ、御城龍ノ口井ニ外櫻田彦根

侯御屋敷表門前ニテ、御城外廓ノ写真ヲ取り申候事、

但右ハ御内廓ヲモ写真相願候処、御免之レナク、外

廓ハカリ御指許シ相成リ候ヨシノ事、

一十五日、和蘭陀・佛蘭西兩國ノ船、琉球江罷越シ候趣

ニテ、横濱表出帆イタシ候云々ノ義ニ付、松平修理大

夫殿御家来ヨリ、書付差出申候、

(右書付、薩州始末二ノ第三十五二載ス)

一同日、コノタヒ御改革ニ付、御大名方御參勤御緩メノ
義被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第二十八二載ス)

一同日、内田主殿頭等御役替被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

内田主殿頭
(正徳 小見川藩主)

御軍艦奉行被仰付之、

山岡備前守
(景慈)

奈良奉行被仰付之、

溝口八十五郎
(勝知)

御先手被仰付之、

(右ノ通回状ノ内抜書)

一十七日、典葉頭岡本肥後守殿等、自分所勞ト称シ、辞

官返上位記可有之旨、被仰付候、

(右御書付、鳩毒始末第二十三二載ス)

一十八日、公方様御上洛ノ節、供奉相勤メラレ度義ニ付、

松平相摸守殿ヨリ御願書被差出候、
(池田慶徳 因州藩主)

(右御願書、公方様御上洛始末第二十一二載ス)

一同日、攘夷ノ

叡慮相変セラレス候得共、御所存ノ次第猶ホ又被

思召度云々ノ義ニ付、公卿方江

勅書ヲ以テ被

仰出候、

(右)

勅書、大原三位卿関東

勅使始末第五十二載ス)

一同日、島津三郎参

内、御劍拝領被

仰付候義ニ付、松平修理大夫殿御家来ヨリ、届書差出

申候、

(右届書、薩州記事第三十八ニ載ス)

一十九日、小笠原圖書頭殿若年寄被仰付候、

右御書付左ニ記ス、

御奏者番

小笠原圖書頭(辰巳)

若年寄被仰付之、

(於御前御役料五千被被下之九)
右於奥相済、

一二十日、長野主膳斬罪被申付候義ニ付、井伊掃部頭殿

ヨリ御書付被差出候、

(右御書付、鳩毒始末第二十一ニ載ス)

首候、

(右罪状書、浪士集会始末第十八ニ載ス)

一二十三日、九條前関白様諸大夫鶴郷玄蕃頭、京都加茂(重田)

川筋ニ於テ逢天誅候、

(右罪状書、鳩毒始末第二十四ニ載ス)

一二十五日、コノタビ御改革ニ付、陪臣ノ面々御城江罷

出候節、平服相用ユベク云々ノ義ニ付、被仰出候、

(右御触書、御政事御改革始末第四十六ニ載ス)

一二十六日、島津三郎官位御断リ、且ツ松平春嶽老御上

京御猶予ノ義ニ付、一橋様ヨリ大納言坊城卿江御書簡(後見)

被仰進候、

(右御書簡、大原三位卿関東

勅使始末第五十三ニ載ス)

一二十七日、大橋順藏其外戸田越前守殿御家来岡田真吾(正順)
(定忍、宇都宮藩主)

等、御咎被仰付候義ニ付、戸田越前守殿ヨリ御届書被

差出候、

(右御届書等、大橋順藏始末第十二ニ載ス)

一二十八日、公方様御上洛ノ節、供奉被相勤度義ニ付、

松平越前守殿ヨリ御願書被差出候、
(茂昭、福井藩主)

(右御願書、公方様御上洛始末第二十二ニ載ス)

一同日、前同断、佐竹右京大夫殿ヨリ御願書被差出候、
(義興、久保田藩主)

(前同断、第二十三ニ載ス)

一同日、コノタビ御改革ニ付、諸向新役ノモノ御役被仰付、翌日ヨリ平服相用ヒ候様被仰出候、

(右御願書、御政事御改革始末第四十七ニ載ス)

一同日、前同断ニ付、陪臣御城江麻上下ニテ可罷出節ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第四十八ニ載ス)

一二十九日、前同断ニ付、御奏者番御役被廢止、献上物等取扱方ノ義ニ付被仰出候、

(前同断、第四十九ニ載ス)

一同日、前同断ニ付、弓術上覽御差止メ被仰出候、
(前同断、第五十二ニ載ス)

一 本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、
一 此度御改革ニ付、万石以上ノ方々勝手次第乗切御登城御免被仰出候、

(右御願書、御政事御改革始末第三十一ニ載ス)

一同同断、月次御礼御減少ノ義ニ付、被仰出候、
(前同断、第三十二ニ載ス)

一同同断、老人ノ御方等御駕籠ニテ御登城、勝手次第ノ義被仰出候、

(前同断、第三十三ニ載ス)

一同同断、足袋相用候義、勝手次第ノ義ニ付被仰出候、

(前同断、第三十四ニ載ス)

一同同断、諸届等ノ節、御使者麻上下不及着用旨、被仰出候、

(前同断、第三十五ニ載ス)

一同同断、衣服ノ制被仰出候、

(前同断、第三十六ニ載ス)

一同同断、御大名御参勤御割合被仰出候、

(前同断、第三十七ニ載ス)

一同同断、是迄ノ御割合ヲ以テ、当年御参府ノ御大名御旅中等ノ方々ハ、其佗御帰国不苦旨被仰出候、

一同同断、御諸家并ニ遠国御奉行等、御持筒被嗜次第御持越不苦旨、被仰出候、

(前同断、第三十九ニ載ス)

一同同断、軍艦品川出入ノ節、浦賀御番所御改御差留メ、外国御懸御月番ノ御老中衆江、被相届候様云々ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第四十三ニ載ス)脱カ)

〔一前同断、初鷹初菱喰等献上ノ義ニ付被仰出候脱カ〕

(前同断、第四十一ニ載ス)

一前同断、二條御在番被差留、(久松藩行、多古藩主)松平豊後守等二條御定番

被仰付候、

(前同断、第四十二ニ載ス)

一前同断、御徒組頭并ニ御徒一同、御譜代被仰付候云々

ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第四十三ニ載ス)

一前同断、駕籠切棒相用可申義ニ付、被仰出候、

(前同断、第四十四ニ載ス)

一前同断、年始御礼ノ節、御流御盃計被下候義ニ付、被

仰出候、

(前同断、第四十五ニ載ス)

一山陵御修補ハ、士氣振起候第一ニテ、当今ノ御急務ニ

候間、御上洛前ニ右修補ノ義被仰出度云々ノ義ニ付、

戸田越前守殿ヨリ御建白書被差出候、

(右御建白書、戸田越前守殿山陵御修補始末第一ニ載ス)

一関東ヨリ来書ノ末ニ、至当ノコトハ御受ケ仕ルヘク、

時勢難被行義ハ御断申上ヘクトノ意味、如何被成御斟

酌候哉云々、且ツ破約攘夷御決定、

皇国御持子堅ノ御良策ノ外有之間敷云々ノ義ニ付、松

平大膳大夫殿御父子ヨリ

御所江御建白書被差出候、

(右御建白書、長州始末第四十八ニ載ス)

一当時不容易形勢ニ至リ、被悩

宸襟候ニ付、公武猶御采久候様、御周旋御依頼被遊度

云々、

勅書ヲ以被

仰出候ニ付、藤堂和泉守殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書、藤堂和泉守殿始末第六ニ載ス)

本月中ノ風説

一此度被仰付候軍艦奉行ハ、是迄並々ノ御大名ニテ、近

来始メテ大番頭被仰付、コノタビ御転役ニ相成、且ツ

御人物モアマリ世上ナトニテハ知レサル者多ク、此末

益海軍航海ノ術相振ヒ申間敷相唱ヘ申候、

一此度被仰付候奈良奉行ハ、先月中日光奉行ニテ、御奉

書到来御上リニ相成リ、既ニ勤仕並ニテモ被仰付候訳

ノトコロ、追々風並ミ相変シ、当御役ニ御転役ニ相成

候ヨシ、段々賄賂等モ相行ワレ候哉ニ相聞ヘ申候、

一加州侯ヨリ建白被差出候ヨシ、趣意ハ開国ノコトニ相見エ申シ、イマタ書面ハ一見不仕候得共、多分相違モコレナキヨシニ風唱御座候事、

一コノコロ英人ヨリ、琉球島ハ日本属島ノヨシ承リ候処、何年ヨリ右様相成居候哉、トクト伺度ヨシ書翰ヲ以テ申出候由、何様ノ所存ニコレアルヘキヤ、島津三郎夷人殺害一条ニ付、薩州江押寄セ候ツモリニモコレアルヘキヤト、薩人ノ内参リ心配ノヨシ相断申候、

(委曲ハ和夷往復書簡集ニ載ス、参考スヘシ、)

一コノタヒ被仰付候若年寄小笠原侯ハ、以前慶七郎君ト被申候御楽人ニテ被為入候節、羽倉先生ヘ時々御断ナトニモ入ラセラレ、且ツ詩文ノ会席ニモ御連リ被遊候御人物ニテ、至テ御美質温淳ノ御方ニアラセラレ、御読書モ頗ル御出来、逐々ハ御老中ニテモ可被蒙唱ヘニ御座候、シカシナカラ中々コノ節ノ紛劇煩擾ヲ御裁断被遊候御任ニハ如何ト奉存候、シカシ御国家ノタメ御不為メニ被為成候様ノ御人ニテ決シテ無御座候、

一当將軍様此節ニ被為成候テハ、鬱々御楽ミコレナク、先達中ハ御黒書院へ被為入、御政事御相談等モ被為在候処、右様ノコトモ更ニ被為止、多分ハ中御引籠ニテ

御読書ノ義モ右ニ准シ、御勉強モ被為有申サス、茫然タル御様子、実ニ恐入候コトノヨシ風唱ニ御座候事、

一当將軍様、

一和宮様御配偶ノ上ハ、トテモ將軍ニ可被為成様コレナク、依リテハ親王ノ位ニ被為任、西丸カ又ハ京師へ被為入、一橋公真將軍ニモ可被為成哉ト道路ノ説ニテ承リ申候、真偽ノ義ハ相分リ申サス候得共、弥右様ノ事有之候テハ実ニ大變ノコトニテ、鬱々御楽ミ無之義モ御尤ト奉存候事、

九月

一朔日、高倉押小路周明文吉、於京都加茂川筋逢天誅申候、
(目九)

(右罪状書、鳩毒始末第二十五ニ載ス)

一同日、此度御改革ニ付、御目見以下御譜代被仰付候義

ニ付、被仰出候、

(右御触書、御政事御改革始末第五十一ニ載ス)

一二日、前同断、病氣産穢等御届振ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第五十二ニ載ス)

一同日、前同断、御三家方御乗馬ニテ御登城ノ節、御下馬場所ノ義ニ付、尾張大納言様等御附ヨリ御伺書被差

出候、

(前同断、第五十三ニ載ス)

一同日、當時不容易形勢ニ至リ、被惱

宸襟候ニ付、

公武猶ホ御栄久候様、御周旋御依頼被遊度云々、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、(淺野長訓、芸州藩主)松平安藝ノ守殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書、大原三位卿関東)

勅使始末第五十四ニ載ス)

一三日、此度御改革ニ付、式日着服ノ義ニ付、被仰出候、

(右御書付、御政事御改革始末第五十四ニ載ス)

一同日、(山内豊範、上州藩主)松平土佐守殿御出府、御隱居容堂老早々御上京、

御父子御交替可被致云々、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、土佐守殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書、松平土佐守殿始末第七ニ載ス)

一同日、御病氣ニ付、御参府御延引ノ義ニ付、中川修理

大夫殿ヨリ御届書被差出候、

(右御届書左ニ記ス)

私儀、先達テ御届申上候通、持病ノ疝癪其上風邪同

扁罷在候間、只今ノ体ニテハ当月中出立難仕奉存候、

精々無油断療養仕、少々モ快方ニ候ハ、早速出立

可仕候、参府延引仕候ニ付、此段御届申上候、已上、

月日

(久昭、岡藩主)中川修理大夫

一四日、戸田越前守殿御家来間瀬和三郎ヨリ、山陵御普

請大略見積書差出申候、

(右見積書、戸田越前守殿)

山陵御修補始末第五ニ載ス)

一同日、松平大膳大夫殿御父子ヨリ攘夷ノ義、断然独立

尽力可有決心旨、御建白ノ趣

叡慮符合、深ク以テ

御感悦被為在候段云々、

御所ヨリ被

仰出候、

(右御書付、長州始末第四十九ニ載ス)

一六日、此度御改革ニ付、於講武所弓・犬追物・柔術稽

古被廃止候義ニ付、被仰出候、

(右書付、御政事御改革始末第五十七ニ載ス)

一七日、来ル二月、公方様御上洛可被遊旨被仰出候ニ付、

右御祝義可申上旨被仰出候、

(右御触書、公方様御上洛始末第十二ニ載ス)

(前田齊泰)

一八日、加賀中納言殿、供奉上京被相願候上ハ、京都御屋敷御普請被致度品々、御同人御家来ヨリ書付差出申候、

(前同断、第十三ニ載ス)

一九日、徳川刑部卿様公方様御上洛ノ節、御先登被蒙仰候、

(前同断、第十四ニ載ス)

(徳川慶憲)

(徳川慶篤)

(徳川慶頼)

一同日、尾張前中納言様・水戸中納言様・田安大納言様御三方、公方様御上洛江戸御留守居被蒙仰候、

(前同断)

一同日、尾張前中納言様、御官位御推任被仰出候、

右御書付左ニ記ス、

尾張前中納言

、叡慮ヲ以テ被

仰遣候ニ付、叙任従二位大納言候、

一十一日、高家衆京極丹后守殿等五人、公方様御上洛ノ

節御先登被仰付候、

(右御書付、公方様御上洛始末第十五ニ載ス)

一同日、講武所御奉行大關肥後守殿、公方様御上洛ノ節御供被仰付候、

(前同断)

(長行)

一同日、御老中格小笠原圖書頭殿、公方様御上洛ノ節、御留守居被仰付候、

一同日、松平隱岐守殿、公方様御上洛ノ節御供押被仰付候、

一同日、前中務大輔富小路卿調伏・鳩毒等ノ調度有之ヨシ、品々相認メ、御同家御門前へ投文仕候者有之候、

(前同断)

(敬直)

一同日、前内府久我卿調伏・鳩毒等ノ調度有之ヨシ、品々相認メ、御同家御門前へ投文仕候者有之候、

(右投文、鳩毒始末第二十六ニ載ス)

(重徳)

一同日、前内府久我卿調伏・鳩毒等ノ調度有之ヨシ、品々相認メ、御同家御門前へ投文仕候者有之候、

(前同断、第二十七ニ載ス)

一十三日、当時不容易形勢ニ至リ、被惱

宸襟候ニ付、

公武猶ホ御采久候様、御周旋御依頼被遊度云々、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、松平美濃守殿御届書被指出候、

(右御届書、大原三位卿関東

勅使始末第五十四(載ス)

一同日、松平土佐守殿御出府、御隠居容堂老早々御上京、御父子御交替可被致云々、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、御隠居容堂老御届書被差出候、

(右御届書、松平土佐守殿始末第八ニ載ス)

一十五日、公方様御上洛ノ節、遠州今切等御渡海ノ節、

御召船ノ義ニ付、中島與五郎伺書差出申候、

(右伺書、公方様御上洛始末第十六ニ載ス)

一同日、公方様御事吹上江成ラセラレ、乘馬被遊御覽候、

但御登城ノ御大名方一統拜見被仰付、御料理被下候、

一十八日、琉球人持渡リ候唐物類、以来何品ニ寄ラス勝

手ニ交易御免被仰付被下度云々ノ義ニ付、松平修理大

夫殿御家来伺書差出申候、

(右伺書、薩州始末第四十三ニ載ス)

一同日、

叡慮ノ通り可被致御上京旨、松平容堂老へ被仰渡候、

(右御書付、松平土佐守殿始末第九ニ載ス)

一十九日、

勅使御下向ノ上、御差凶次第早々可被致御上京旨、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、松平容堂老ヨリ御書付被指出候、

(右御書付、松平土佐守殿始末第十三載ス)

一二十日、来二月公方様御上洛ノ節、江戸御警衛等松平

下総守殿等江被仰付候、

(右御書付、公方様御上洛始末第十七ニ載ス)

一二十一日、徳川刑部卿様、公方様御上洛ノ節御先登被

仰蒙候、

「徳川刑部卿様御上洛御先登被仰付候日限不同有之候

得共、難相決候ニ付、俱ニ之レヲ載ス、」

(右御書付、徳川刑部卿様始末第十二ニ載ス)

一二十三日、公方様御上洛ノ節、供奉被願度候得共、コ

ノタビハ格別御省略可被遊旨、御達モ有之候、右供奉

ハ被差扣、御上洛御留守中御在府被成度云々ノ義ニ付、

松平出羽守殿ヨリ御願書被指出候、

(右御願書、公方様御上洛始末第二十四ニ載ス)

一同日、東海道石部宿ニ於テ、京都与力渡邊金三郎等三

人被致殺害、粟田口蹴上ト申ストコロエ被致梟首候、

(右罪状書、鳩尋始末第三十一ニ載ス)

一二十五日、年頭兼御婚札濟御祝儀トシテ

勅使大納言坊城卿、親王使右衛門督柳原卿、准后使式部大輔唐橋卿被

仰付置、今日京師御発駕御參向ノ処、俄カニ被相扣轉

法輪三條卿・姉小路卿別

勅使被

仰出候、

(委曲ハ転法輪三條卿関東)

勅使始末ニ詳ナリ)

一同日、公方様御上洛ノ節、供奉被相勤度義ニ付、松平

三河守殿御家来伺書差出申候、

(右伺書、公方様御上洛始末第二十五ニ載ス)

一同日、鷹ノ間御大名ヨリ、年割御在府日数御緩被仰出候得共、御上洛御留守中ハ、御在府致サレ度品々ノ義

ニ付、伺書被指出候、

(右御伺書、公方様御上洛始末第二十六ニ載ス)

一二十六日、御大名方御暇被下候ニ付、御拝領物有之候、

(右御書付、御政事御改革始末第五十九ニ載ス)

一二十七日、公方様御上洛ノ節、供奉被相勤度義ニ付、

松平兵部大輔殿御家来ヨリ伺書差出申候、

(右伺書、公方様御上洛始末第二十七ニ載ス)

一同日、公方様御上洛ノ節、供奉被相願候テモ、被仰付義ニ可有御座哉、品々ノ義ニ付、亀井隱岐守殿御家来ヨリ伺書差出申候、

(前同断、第二十八ニ載ス)

一二十八日、前同断ノ義ニ付、松平右近将監殿御家来ヨリ伺書指出申候、

(前同断、第二十九ニ載ス)

一同日、松平相摸守殿等十人、公方様御上洛ノ節供奉被

仰付候、

(前同断、第三十一ニ載ス)

一同日、徳川刑部卿様御上京ニ付、御拝領物被仰付候、

(右御書付、徳川刑部卿様始末第十四ニ載ス)

一晦日、公方様御上洛御参

内ノ節、供奉被相勤度義ニ付、井伊掃部頭殿御願書被指出候、

(右御願書、公方様御上洛始末第三十二ニ載ス)

一同日、御病氣ニ付、公方様御上洛御先登御用御免被成

下度義ニ付、酒井左衛門尉殿御願書被差出候、

(前同断、第三十三ニ載ス)

一同日、松平土佐守殿、此度

勅使被指下候ニ付、同時御出立御周旋可有之旨、

勅書ヲ以テ被

仰出候、

(右)

勅書、松平土佐守殿始末第十一ニ載ス)

本月中ノ事件ニシテ本日相知レサル分、左ニ記ス、

一此度御改革ニ付、御老中衆等江諸願等差出方、朝五ツ時限りニ可被差出義ニ付、被仰出候、

(右御触書、御政事御改革始末第五十五ニ載ス)

一前同断、御役人供連レ減少ニ付テハ、是レマテ町方受ケニテ召抱置候足輕・中間、旧里江罷帰度相願候モノ御手当等ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第五十六ニ載ス)

一前同断、小味迷惑ノモノ御取扱方ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第五十八ニ載ス)

一前同断、御役人方御乗物御登城ノ節、御供騎馬等相省候場所ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第六十二載ス)

一前同断、御馬献上ノ義、只今マテノ通り献上候様云々ノ義ニ付、被仰出候、

(前同断、第六十一ニ載ス)

一当时不容易形勢ニ至リ、被惱

宸襟候ニ付、

公武御栄久候様、御周旋御依頼被遊度云々、

勅書ヲ以テ被

仰出候ニ付、池田慶政、備前藩主松平内蔵頭ヨリ御届書被指出候、

(右御届書、大原三位卿関東

勅使始末第五十四ニ載ス)

一來二月公方様御上洛ノ義、格別御手輕ニ可被遊御趣意ニ付、御旅館并ニ御道筋橋等取繕ヒニ不及旨被仰出候、

(右御触書、公方様御上洛始末第十八ニ載ス)

一井伊掃部頭殿、御壮年ニモ被為成候ハ、如元ノ京都守護被仰付度云々ノ義ニ付、御同人御家来ヨリ歎願書指出申候、

(右歎願書、井伊掃部頭殿始末第六ニ載ス)

一前同断、上知被仰付候ニ付、御家来ヨリ歎願書指出申候、

(前同断、第十二載ス)

本月中ノ風説

一過ル十五日、諸侯方登城相成候処、公方様吹上御物見

江被為成、乘馬御覽被遊候ニ付、諸侯方江モ一統罷出候様被仰出、

右御場所ニテ御酒宴等被成御催、其時御料理ノ内、引菜様ノ物、鯛ノ焼物へ茶椀一ツ、燧金并ニ燧石共ニ一同添物コレアルヨシ、何等ノ判シ物ニ御座候哉、定メテ典故ニテモ可有之義ト申スコトニ御座候、然ルトコロ興闌ニ至リ、御馬場ノ内江破レ駕籠昇出候者有之、何者トモ不知候処、右駕籠丁ハ泉州ト防州ト申スモノ、大汗ヲ流シ駈出シ候得ハ、駕籠ノ底抜ケ、中ヨリ一人モレ出ルモノ誰ヤラント御尋候へハ、モレ出ルモノハ春嶽坊ト被申候ヨシ申上候へハ、御大笑ニテ御大興ニ思召候ヨシ、此節右等ノ義被遊候ハ、三百年以前ノ世上ニテ候ハ、英雄人ヲ欺ク一事トモ可申敷、今時ハ右様ノ義ハ誰レモ承知不仕義、執政職ノ体裁ヲ失ヒ、愚ニ愚ヲ重ネ候ナト、罵リ候輩モ有之様相聞へ申候、一公方様ニモ檔高キ袴被為召、御運動モ御能ク被為在候故、殊ノ外御喜悅ニテ奥へ被為入候処、上様ニハ奇妙ノ物被為召候ト、皆々大笑申上候ニ付、即日御止メ被遊候由、

一諸家人数上京ノ部、左ニ、

筑前家老浦上信濃ト申スモノ、上京ノ風評、仙臺ハ用人遠藤文七郎、人数百人程ニテ上京ノ風評、

備前ハ用人土岐典膳、人数五六十人上京ノ由、

藝州并ニ久留米家老、上京人数等相登候由、

細川ハ人数出シ不申風評、

一今上皇帝御歳三十六、

御英明且ツ余程御多力ノ由、唱へ上ケ申候、

一薩長土三藩ハ益盛ニシテ、

主上御左右モ、大半ハ三藩ノ耳目ニ応シ候風ニ御座候

間、

主上ノ

御英明ヲ蔽フコトモ可有御座哉ノヨシ、相聞得申候、

一小笠原侯奥方御帰国ノヨシニテ、十一日江戸表御出立

ニ御座候、

脇坂侯モ御発駕ニ御座候由ノ処、御供向等江戸市中御

通行ノ通りニテ少シモ増減無之、伊達道具等一本モ相

見へ不申候、

加州ノ御嫡モ九月十三日御帰国御暇ニ相成、二十五日

御出駕ノ趣相聞へ申候、

右奥方モ来月下旬頃御帰国ノヨシニ御座候、シカシ當

侯ノ奥方ハ御主殿ニ御座候処、右方御帰国御附ノモノ、
彼レ是レト難波申立、御帰国御扣ノ手配ノミニテ、大
混雜イタシ居候様子、右故来春御帰国ノコトニ相成候
由ニ御座候、

其外、松山侯ノ奥方モ今月中出立ノ積リニ御座候処、
此節京攝ノ間不穩故、女ノ通行ノ義心配イタサレ、当
分御扣ニ相成候ヨシ、シカシ当年中ニハ御出立ニ相成
候様子ニ相聞ヘ申候、

一肥前侯京師江献策、何等ノ策ニ候哉未タ相知レス、近
頃蒸氣船ニテ江戸ヘ罷下候由、未タ是非不知、

一諸侯ノ邸丸内ハ別地ヘ移シ、旗下邸及ヒ奴僕商工失産
生活イタシガタキ者丸内ヘ置き、挙テ鳥銃ヲ習ワシメ、
為銃卒西洋制度ニ倣トノ風唱、

一安井・鹽谷・芳野・若山ノ諸儒日夜會議、諸侯方国ニ
就クノ令ヲ破ル積リノヨシ、然シナカラ大議ノ上号令
相出候事ナレハ、中々容易ニ揺シ難キ風ニ相見ヘ申候
由、

一對州家老佐須伊織ト申スモノ、切害ニ相成候ヨシ、其
品ハ五大州ト破約攘夷ニ相成候得ハ、第一ニ對州ヘ兵
ヲ受ケ候事眼前ノ事、弧島ナレハ外ニ援兵モナシ、且

ツ元寇ノ如キ勢ニモ參リ申サス、依テハ内地ノ内十萬
石ヲ受ケ、国ヲ移シテ社稷ヲ全フスルノ策ヲ工ミ、其
内実ハ一身ヲ安樂ニ暮シ候旨意故、衆怒テ国ヲ売ルノ
賊トナシテ、殺害致シ候由、

一越前公モ十四日頃出立シテ上京相成り、京都ニ於テ
鎖国論ヲ御説破ノ積リト申ス事ニ相聞ヘ申候、

一諸侯方參勤被相成義ニ付、安井仲平(實忠軒)・芳野立藏(世尊)大不
意ニ付、明正公子(マコ)始メ議論ニ罷出、此外水戸辺色々論

シ候処、佐久間佐兵衛(義兵)、安井仲平方ニ罷越大議論仕り、
幕府ノ新政相議シ候者、夫レ々仕置ニ可仕ト申テ大
激論仕、安井ヨリ誤証文取其俣相訴候由、大評判ニ御
座候、
(官報通記) (圖書刊行会本)にて校訂

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり
(紙数七五枚)の記載あり〕

官武通紀卷五 目次

一薩州始末

第一

一公義御坊主長坂蒼峯建白抜抄

第二

一江戸書簡抄

第三

一探索書

第四

一風説

第五

一同断

第六

一島津周防義御実父ニ付御会积向格別重ク御取扱被致
度且和泉ト改名被致候義ニ付被指出候御書付写

第七

一同断御親子ノ情難黙止次第ニ付実形身柄ニ被相復御
家内へ被引取度義ニ付被指出候御書付写

第八

一同断此節実形身柄ニ被相復御参府ノ節御国政向被為
取計度義ニ付被指出候御書付写

第九

一島津和泉御取扱ノ義ニ付御家老等へ被仰渡候御書付
写

第十

一島津和泉布告ノ書附写

第十一

一同断

第十二

一 御家来多勢上京一件ノ義ニ付探索書ノ写

附

一 近衛様ヘノ御使者被指遣候ニ付右御使者ヘ被仰合

候御趣意書写

一 関東ニテ 和宮様ヲ無理ニ御下シ奉リ候ハ一朝一

夕之奸功ニハ無之実ニ 天朝ノ御危殆焼眉ノ急ニ

有之候ヘハ是非 皇国復古ノ御大業被為在度云々

ノ義ニ付近衛様ヘ被指出候御建白書写

一 右一条ニ付近衛様ヨリ被仰遣候御返翰書写

第十三

一 風説

第十四

一 同断

第十五

一 播州藩書簡抄

第十六

一 土州藩書簡写

第十七

一 島津和泉口上ヲ以近衛様等ヘ申上候三ヶ条ノ書付写

第十八

一 島津和泉ヨリ栗田宮様等御慎解御老中衆等黜陟ノ義

ニ付箇条ヲ以 御所ヘ指出シ候建白書写

第十九

一 京師書簡抄

第二十

一 風説

第二十一

一 同断

第二十二

一 京師書簡抄

第二十三

一 同断

第二十四

一 同断

第二十五

一 同断

附

廣幡卿御用人毛利采女佑書簡写

第二十六

一江戸書簡抄

第二十七

一江戸書簡抄

第二十八

一京師書簡抄

第二十九

一探索書

一雜集

第一

一長崎書簡抄

第二

一風説

第三

一同断

第四

一同断

第五

一同断

第六

一京師書簡抄

第七

一風説

第八

一京師書簡抄

第九

一大坂書簡抄

第十

一風説

第十一

一京師書簡抄

第十二

一探索書

官武通紀卷五

五七二 薩州始末一

第一

公義御坊主長坂蒼峯建白抜抄

一先年相廻候九州・西国筋難心得模様ニ相見へ候ニ付、

今一応相廻、御為筋ニモ相成候事有之候ハ、言上仕

度ト存付、安政元寅ノ年ニ御地出立仕、今酉ノ年迄八ヶ年ノ間国々相廻候処、存寄ノ通天天下人心騒揺(願)乱ノ極ニ及ヒ候ト、乍恐奉存上申候、其子細ハ寅ノ年以来、皇国夷狄ヘ御通信ニ相成、天下貿易御許容被仰付候始末、実ニ天下頽乱ノ基開ニ御座候様、乍恐奉存上候、扱元来交易ノ義ハ、殆ト百年来薩州家ニテ内々被行居候処、自国而已ニテハ其偏土狭隘ノ土地柄故、家来小松彦八郎ト申者ニ被申付、越後新潟・加州金澤・播州兵庫・奥州仙臺・下総銚子以上五ヶ所ノ町人共ヲ利潤ヲ以御引込、内々交易被致、其元入等ハ薩州家ニテ致居候処、越前守様羽州山形ナリ御勤役中、加州町人ヨリ及訴訟候ニ付、嚴敷御停止ニ相成候、夫ヨリ薩州家遺恨ニ被思、兼テ水戸御家風ハ、万事輕卒ニ与シ安キヲ見貫候故、前中納言様(羅川有昭)へ種々取入、越前守様ノ御事ヲ被仰上、其後御同人様御退職ニ相成候砌、仙臺家来(安政元)へ同所并新潟町人兩人相添へ、獺船ニ相乘異国へ相渡リ、薩州家宿意ヲ打明候様子有之候ニ付、則寅ノ年、米国浦賀入港致シ候ハ、全ク本朝ノ虚実ヲ探索仕候義ニ御座候、然ル処、米国存込ノ通段々成行候間、自然我意増長ノ仕合ニ御座候、又薩州家ハ水戸前中納言

様御心中ヲ奉察候テ、表ニハ外夷ヲ惡シ、一橋刑部卿様ヲ以、將軍家御相統奉推尊、其上又阿部伊勢守様へ取入、温恭院様(徳川家志)へ御縁組ヲ被相願上、水戸前中納言様御仕向ノ義等種々被申上候、右 徳川家ノ御間柄モ、御隔意ト相成申候御事ニ御座候、是実ニ天下之御一大事ト乍恐奉存上候、是等ノ策略ハ尽ク薩州家来小松彦八郎・堀次郎左衛門等ノ奸計ニ出候、然ル処宰相様(鳥津英彬)・大隅守殿被致死去候後、同姓和泉相加リ、様々籌略仕候テ、天下ノ嚮替ニ從ヒ、一橋刑部卿様ヲ將軍御補佐ニ致シ、越前中將様ヲ天下ノ大老職ニ推挙致シ候、自分主人・陸奥守殿(編島直大、佐賀藩主)・肥前守殿・大膳大夫殿以上五人ヲ同列ト定メ、天下ノ御政事ニ相管候カ、又ハ將軍家御上洛被遊候様之 勅命有之候敷、以上二ヶ条關東ニテ御引受無御座候節ハ、奉擁尊 天子、五ヶ国ノ人数外ニ肥後・筑前ヲ始、其下之人数催促致シ、夷狄征伐且 徳川家遠 勅ノ罪科ヲ鳴シ、御敵対致シ候様様承及候、乍然細川・黒田・有馬・立花・宇和島・阿州・津輕・上杉是等ノ家々ハ、薩州・長州等ノ差図ニテハ容易ニ動揺仕間敷候、尤御用心可有之家ハ、薩州・肥前ハ不及申、藤堂・山内・佐竹・真田・水戸・仙臺、

御譜代ニテハ、莊内酒井・小倉小笠原ニ御座候、併小笠原家ハ別紙申上候通り、家風甚タ悪敷、淫楽ヲ嗜、士風情弱ニ御座候間、左迄ノ事ハ有之間敷ト乍恐奉存上候、其家々ノ義ハ別紙ニ相認差上候間、御賢察ノ上御処置奉願上度候、右之一条有之候ニ付、（文久二）来戌ノ年二月頃ニハ島津和泉參府ト称シ、京都へ立寄り、所司代ヨリ奏聞ニ及ヒ候敷、直々近衛殿へ罷出、奏聞ニ及ヒ候様多分可相成奉存候、長州家モ家来穴戸九郎兵衛・永井雅楽ヲ以伝奏・議奏迄差出、其後長門守殿帰国ト相称シ、致上京候旨、薩州内談有之趣承及候間、即日薩州ヲ発足仕、長州へ罷越模様伺合候処、風聞ノ通彼是ト騒立候様子ニ御座候、其外沿道ノ諸家共無何ト騒キ候様見受候、其内穩便ノ家々ハ豊前小倉、中国辺ヨリ東海道筋ハ至テ平穩ノ模様、乍然其国々家々ニテハ、文武ノ世話相出来候族モ間々有之候様見受候、又ハ大平ニ浴シ、懶惰ニ流レ候者モ有之候、其土地々々国々ノ風俗ハ、先年ヨリ致見聞候通委細ニ書取、別紙ニテ差上候間、乍恐御賢慮ノ程奉願上度候、右ハ薩州宿意為見合之、姑ク是ヲ抄録ス、

第二

江戸書簡抄

一 夷人交易無之内ハ、夷人共皆琉球ニテ致交易候故、薩ノ御勝手モ追々直リ候処、六七年以来ハ江戸ニテ交易相始候ユへ、琉球へハ右様ノ事少シモ無之相成候ニ付、薩ノ御勝手至テ不宜、年々御不如意ニ相成、其先キ薩船ト申船共、越後新潟ニモ交ル、着岸致シ居候テ、新潟ニテ拔荷売買仕居候処、是モ公儀ノ御領ニ相成、新瀉奉行相立候後ハ右交易モ相成リ不申、新瀉モ追々衰微ニ相成、薩州ニテモ上下共一統ニ衰微ノ由云々、

第三

探索書

一 島津和泉義攘夷ヲ旨ト仕、今帝ヲ翼輔シ、幕府開國ノ義ヲ断然相拒ミ、復古仕度由、其形迹尊 王忠誠ニ相見ヘ候ヘ共、内実ハ決シテ右様ノ訳ニ無御座、専ラ奸計ヲ運ス為メニ相違無之由、其子細ハ薩州ハ元来夷狄ト内々相交リ、貿易等モ私ニ取結居候義ハ、往古ヨリノ事ニ相聞ヘ、於幕府モ全ク御存無之義ニハ無之候ヘ共、緩大ノ以 思召別テ御探索モ無御座候処、近来横濱等ノ港へ互市ヲ被相開候後、日本ノ什物都テ右諸港ヨリ公然ト交易相弁シ、薩州内交易ハ衰微仕、

只今ト相成候テハ、薩州經濟殆ト窮迫シ、何カ罪アリテ持高半地被召上候モ同様ノ事ニ相成候哉ノ怨恨ヨリ起リ候風、乍然右怨恨公然ト吐露可仕様モ無之、不得止事攘夷之策ヲ以テ京師ヲ懲懣シ、幕府ノ開國ヲ拒ミ、將來自己將軍ノ位ヲ奪ヒ、自在ニ開國貿易可仕ト之策ニテ、全ク尊王忠誠ノ心ニハ無御座候、尤薩州ニテハ往古ヨリ私ニ開國シ、彼力器械、蒸氣船ヲ相用候義ハ、幕府開國以前ノ事ニ有之、然ニ只今ニ相成、彼是相拒ミ候訳ハ決シテ有御座間敷、然ルニケ様ノ次第其奸謀実ニ顯然タル事ニ御座候、京師ニ被為置候テハ、元々万国ノ実情又ハ当今ノ形勢、得ト御洞察被為在間敷、只々幕府ノ所為ヲ鄙怯柔弱ト計被思召候処、薩州ニテハ其機ニ乘シ、尊王攘夷ノ策等ヲ建白シ、自己ニ私ヲ遂ント仕候奸計ニ相違無之由、其所為実ニ可惡且可恐事ニ御座候、

第四

風説

一薩此度ノ義拳先公在世中ノ目論見、(安政五)戊午ノ年大獄ニ奮激、其翌年愈断然東降、京都ニモ奏聞、此度ノ如ク所置可有之決謀ノ上上程、於筑後ニ彦根櫻田ノ一条承リ、

暫其時ヲ見合セ候方ト申議ニテ引戻候由、深謀遠慮此時ヨリ如此、廟算一定罷在候由、尤右ノ為メ外国諸夷迄間諜相入、五大洲間ノ事迄手ニ入置候由、関門嚴鎖ノ上ハ何事ヤラン不分ニ御座候へ共、金銀錢共自由ニ鑄造仕、霧嶋ト申高山ニ大盤石ノ城廓相構、其形勢実ニ宇内併吞ノ氣象ト申候、余誇張ノ言ノ様被存候、

第五

同断

一当年二月頃ト申事、鹿兒島ニオイテ練兵有ル之日、右終ニ及テ七百人程申出候ニハ、庚申三月上巳一条ノ砌御発興半途ニシテ御引戻シ、其後繼テ御滞留ニ相成居候ハ、全ク浪士ヲ怖レ候テノ事ニ候哉、又一彦根ヲ怖レ憚ラセ候テノ事候哉、何レニ致シ候テモ於弓矢瑕瑾ニ相成リ、武門ノ道難相立義、猶御主意致承知度旨、縷々申出候趣、

薩州家ハ(徳川家定夫人御君、奇形兼女)天璋院様御統合ト申、又是迄徳川家ト

ハ格別御内縁モ累々有之、殊ニ同シ清和源氏ノ御末流、同氏族ニ候間、庚申上巳以來幕府失職暴政ヲ糾ント有レハ、態々輕兵ニテモ早ク出府、赫々其罪ヲ鳴シ、再三ニシテ若シ容レスンハ、其時ニ及ンテ

公然ト其旨表ハニ相達シ、威儀堂々ト上京、徐々
 輦下ニ於テ達 叡聞候ハ、天下ノ為ニ 徳川家ヲ
 助ルノ策有シ、然ニ 徳川家ニオイテ猶悔悟セス、
 愈暴政且黠虜ト愈親昵、拒其情以 天朝ノ 叡慮ニ
 違背シナハ、命ヲ乞フテ盟主トナリ、或ハ兵力ヲ以
 ナリトモ、内奸ヲ誅戮有ルノ措置ニ出ハ、諸侯何ソ
 不服ノ者有シヤ、人心何ソ是ニ帰セサラシヤ、嗚呼
 可惜ハ橋口某薩州藩 宗伝殿、意爰ニ出ルトイヘトモ事行レス、
 按スルニ、非常ヲ制スルニハ、非常ノ權ヲ以テセサ
 レハ、之ヲ制スル能ハサレハ、鳥津久光三郎カ所置尔後天理
 ノ公ニ出ナハ、被髮左衽セシメサル菅仲カ功ニ遥ニ
 過ルトイフベシ、今天下ノ諸大家、仙臺・土州・肥
 後等勤 王ノ志深ク、万民ヲ憐ム本意厚ク、 神祖
 ノ徳沢重恩ニ報奉ント有ラハ、敢テ一日モ傍觀ニ過
 ス、中正ノ道ヲ以テ速ニ 幕府ヲ助ケ、黠虜ヲ遠ク
 徙スノ義ヲ頻ニ諫争、此事ヲ尽サシメ、 天朝ノ奉
 安 叡慮、又敢テ嶋津氏ノ罪ヲ不鳴、其善キ処ノ意
 ヲ助ケ、不義ニ陷サルノ所置有シ事、実ニ当今ノ急
 務トイフヘキナリ、

第六

鳥津マツ因幡義御実父ニ付、御会釈向格別重ク御取扱被
 致度、且和泉ト改名被致候義ニ付被指出候御書付写
 一鳥津マツ因幡事、国政向万端心副致シ精勤候ニ付、猶厚ク
 心得万事行届候様、御内々 御沙汰ノ趣有之、殊ニ実
 父ノ義ニモ御座候間、当分通ニテハ成合不宜候ニ付、
 此節ヨリ会釈向格別重ク致シ取扱、尚又国中ノ者共一
 統心服為致、政事向万端致相談、来年私参府ノ上ハ留
 守中厚相心得、諸事行届候様為取計度御座候、且因幡
 事和泉和泉ト為致改名候、此段御聞置可被下候、以上、
 年月不詳 鳥津久光松平修理大夫

右或ハ西ノ年被差出候哉モ相知レ不申候へ共、姑ク
 爰ニ記シテ参考ニ備フ、

第七

同断御親子ノ情難黙止次第ニ付、実形身柄ニ被相復、
 御家内へ被引取度義ニ付、被差出候御書付写 松公
 一鳥津マツ和泉事、養祖父故大隅守四男ニテ、一門鳥津出雲
 簀養子、私儀ハ和泉ノ実子ニテ、故薩摩守簀養子被 鳥津齊彬、前薩州藩主
 仰付候、然ル処、和泉儀国政向万端心副致精勤候ニ付、
 猶厚心得方行届候様、去年 御内沙汰ノ趣承知仕、別
 テ難有奉存候、就テハ実父ノ義ニモ有之、成合不宜候

二付、國中ノ者共一統心服為致、政事向万端致相談、諸事行届候様為取計度、旁形行ハ先達テ申上置候通ニ候へ共、何分ニモ親子ノ情於孝義難黙止次第ニ付、無抛実形身柄ニ復シ、家内へ引取申度候、此段御聞置可被下候、以上、

年月不詳

松平修理大夫

右前同断

第八

同断、此節実形身柄ニ被相復、御参府ノ節御国政向被為取計度義ニ付、被差出候御書付写

一 島津和泉事、実父ノ義ニ御座候処、当分ノ成合ニテハ難黙止内情ノ訳モ御座候間、此節実形ノ身柄ニ復シ、私家内ニ引取申候、左候テ私参府ノ節ハ、留守中国政向万端行届候様為取計度御座候、此段御聞置可被下候、以上、

文久二年

戊ノ正月十一日

松平修理大夫

第九

島津和泉御取扱ノ義ニ付、御家老等へ被仰渡候御書

付写

一 和泉様御義、何篇是迄国政御内談申上、且先度公義ヨ

リ御内沙汰ノ趣モ有之、我等実ニ多幸ノ至ニ候、就テハ此度ニノ丸へ御住居被遊候ニ付、尚又表向御介助奉願置候間、以来被仰出等、弥嚴重ニ相守候様可取計事、

戊三月

第十

島津和泉國中へ布告ノ書付写

一 去年ノ年、外夷通商御免許以來天下ノ人心紛乱致シ、

各国有志抔ト相唱候者共、尊王攘夷ヲ名トシテ、慷慨激烈ノ説ヲ以四方へ交ヲ結ヒ、不容易企致シ候哉ニ相聞へ候、当国ニモ右ノ者共ト私ニ相交、書翰往復等致シ候者有之哉ニテ、畢竟勤王ノ志ニ感激致シ候処ヨリ、右様ノ次第ニ相及候筈ニ候へ共、浪人輕卒ノ所業ニ致同意候テハ、当国ノ禍害ハ勿論、皇国一統ノ騷乱ヲ醸出シ、終ニハ群雄割拠ノ形勢ニ至リ、却テ外夷ノ術中ニ陥リ、不忠不孝無此上義ニテ、別テ不輕事ト存候、拙者モ公武ノ御為筋存慮ノ趣有之候ニ付、以来当国ノ面々右様ノ者ト一切不相交、命令ニ從ヒ爾旋之有之度事ニ候、若又私ニ義ヲ重シ、絶交難致者ハ其筋へ申出候ハ、其訳ニ応シ、何様ナリ共可致所置候、尤此節ノ道中筋、江戸滞在中ハ右体ノ者共致推参候共、

致面會間敷候、乍然無拋訊ニ寄り致応接候トモ、敢テ不致議論、其筋ノ者ヨリ致談判候様可致返答候、此上ナカラ不勘弁ノ挨拶有之候ハ、天下國家ノ為メ実以不可然事ニ候条、無遠慮罪科可申付候事、

戌ノ三月十日

実名判

第十一

同断

一拙者ヨリ書取ヲ以申渡候事、遠慮ニ相考候へ共、當時世上ノ情態自然不穩ノ義ニ相聞へ候ニ付、不得止事先日相達タル事ニ候、其後尚又致熟考候処、畢竟上威ノ輕キ所ヨリ、群下類ヲ引ニ至候義ニテ、当主ハ勿論、拙者ニオイテ心痛至極ノ事ニ候、土風沙汰ノ義ハ此前ヨリ追々トモ被仰出置、近頃ニテモ再応申渡シタル事ニ候へ共、方今ノ模様ニテハ非常ノ變事出来ノ節、致一和候義無覺束存候、皇国ニ生レ候者、誰トテモ王朝ヲ尊ヒ、夷狄ヲ憎ミ候情意ハ有之筈ニ候、若シ其志操無之者禽獸同然ノ事ニテ、別テ勤王家ノ誠忠派ト可申様、更ニ無之事ニ候、然ルニ面容貌美様ニシテ、放恣ノ者共有之哉ニ候、是以先年ヨリ追々被仰出タル事ニ候処、近比ハ其節共相違候風義ニ相成、弥以不宜

次第ニテ、士ハ行跡律義ニ廉潔ヲ專ラトスルハ本意ノ事ト存候、何程文術研究致シ候共、言行不正実、異風ニテハ武士ト被申間敷候、且郷士以下家来末々ニ至候テモ、右体ノ者共有之哉ニテ、尚以不可然事ニ候条、右様ノ趣奉行頭人能々心得、支配ヘモ丁寧ニ申諭シ、父兄又ハ同郷年長ノ者共ヨリモ心得違無之様、屹度教誠有之度存候事、

戌ノ三月十四日

実名判

第十二

御家来多勢上京一件ノ義ニ付探索書写
附

近衛様へ御使者被差遣候ニ付、右御使者へ被仰含候御趣意書写

一関東ニテ和宮様ヲ無理ニ御下シ奉り候ハ、一朝一夕ノ奸巧ニハ無之、実ニ天朝ノ御危殆焼眉ノ急ニ有之候へハ、是非皇国復古ノ御大業被為在度云々ノ義ニ付、近衛様へ被差出候御建白書写、

一右一条ニ付、近衛様ヨリ被仰遣候御返翰書写、

一薩州御人数多勢上京、一件ノ事起り候眼目ハ、昨年十一月爲事久中修理大夫殿ヨリ近衛様へ、御縁組相濟候御礼ノ

為、御使者御家来被相登候〔薩州侯ヨリ近衛棟彦内々御建白相成候御実ハ和泉殿ヨリ、御建白ノヨシ〕、右御建白并御返翰写等、別紙奉入御覽候、右ニテ大略此度ノ眼目相分り候様奉存候、以上、

別紙

御使者へ被仰含御趣意書

一 今般中山卿〔忠能〕ヲ以 御内情奉伺候処、献芹ノ微旨上達、

不容易 御賜、且前左府様〔近衛忠能〕 近衛入道兼山様御筆、御内書・御拝領物

被仰付、実ニ武門ノ冥加不過之奉恐入候、依之其方使

者ニ差立候間、篤ト右ノ趣意相合御礼取束ネ言上可仕、

左候テ御縁組一条御受、御礼可奉申上候、

御建白書写

一天朝ノ 御危殆実ニ焼眉ノ急ニシテ、被為惱 叡慮候

御義、此節中山卿〔忠能〕 謙考詳細ノ御左右、悲涙涕泣ニ不奉堪次

第二候、和宮様御下向ニ付、被 仰合候 御内策モ

可被為在候へ共、是ハ決シテ御頼ニ不相成御事ニ有之

候間、能々 幕府ノ事情熟察致シ候ニ、如何ニモ小人

俗吏タリ共、当今ニ至テ天下ノ人心名分ヲ明ニシ、

天朝ヲ重ンシ 幕府ニ背キ候事判然タル形勢、既ニ一

昨年上巳一挙以来夷人殺害、水府ノ混乱、其外浪人奔走等ノ次第詰ル処、無事ニ不相濟、一身ニ疾痛来ルト

イフ事十分致洞察居候へ共、表ニ無実ノ形ヲ張り、外〔カ〕ニ深淵薄氷ヲ懐キ候義ハ案中ニ有之、然ハ苟且偷安ノ情ヲ以、天下国家ノ傾覆ハ少モ意トセズ、榮利ヲ〔失セザル〕覺悟而已ニテ、明日ノ事ハ如何ニモナレ、今日ノミ全

キヲ致シ経営候様有之、右具眼ノ者ヨリ論シ候へハ、

彼ノ長久ヲ謀リ候事、因ヲ失ヒ身ヲ亡スノ危謀ニテ、

少シモ天下国家ノ上ニ心ヲ用ヒ、衆思ノ向フ所ヲ取用

候ハ、徳川家興復、随テ一身ノ榮輝無疑候へ共、和

漢古今変世ニ当リテ、因ヲ乱ス賊臣ノ蹤跡ハ一轍ナル

訳ニテ、是ニヨリテ彼ヲ考ルニ、和宮様ヲ無理ニ御

下シ奉リ候ハ、一朝一夕ノ奸巧ニ無之、御下向被為成

候上ハ掌中ノ物ニテ、中々 勅意ヲ恐レ、所置ヲ改ル

ハ思寄ラヌ事ニテ、此上ハ如何様ノ邪謀奉施候モ難計

至変此事ニ候、勿論奉申上候モ恐多候へ共、所謂之秘

策モ有之候段承リ及、決シテ実説ニ可有之哉、假令世

説ナルトテモ、察セスンハ不可有之時節ト存、万一彼

ニ先ンセラレ制ヲ受ケ候テハ、主家ノ勢ト相成、曠臍

ノ悔不及義ト奉恐懼候、

一御一挙相成候様篤ト致熟思候ニ、申サハ兵ヲ動スト申

訳ニシテ、国家ノ重事ニ候、勿論 天朝 御安危ニ関係

致シ候義、誠ニ不輕次第奉忍入候へ共、前条ノ通危急ノ御時節ニ付テハ、不被為得止事御時宜ニ候間、不肖ノ我等タリトモ、苟モ 王臣トシテ難默止候ニヨリ、皇国復古ノ御大業被為在度奉誠願候、就テハ京地十分ノ御守護不相備候テハ、仮令非常ノ 聖断被為在候テモ、〔安政五年〕戊午ノ覆轍ヲ蹈ミ候様ニテハ却テ奉增御難題、甚奉恐入候ニ付、発挙ノ上ハ必勝ノ利ヲ謀リ、興復無疑ノ算ヲ尽シ、其上ノ所ハ臨機心變ノ所置出候様有之度奉存候、我等不智短才ニシテ、深謀遠慮モ無之、如斯大事始終ノ得失ヲ謀ル其術乏敷候へ共、内策ノ次第左ノ通、一 供人数五百人余召連不日上京可仕候事、

但陸行ニテハ急速ニ間ニ合兼候間、久見崎又ハ阿久根崎辺ヨリ天祐丸へ致乗船、左候得ハ京地到着致シ候人数ノ義ハ、一組六拾人ニシテ四組式百四十人、外ニ仕長式拾四人・組頭兩人・側役兩人・上下式人、平均シテ八十人、次ニ定式方側向三十人、同表方十八人、足輕四十人、大凡見賦リ帯刀以上五百五十人余ニ相及候事、
一 当地出立兩三日間ヲ置、守衛人数五組三百人出立申付、又兩日間ヲ置、四組式百四十人同断、小倉・下ノ關迄

出張サセ候事、

但天祐丸大坂着ノ上、則小倉・下ノ關迄差廻候、本文出張人数前後繰廻シ令上坂、且急々用意致シ置候下ノ關糧米右人数一同積廻シ可申、尤兩度運送五日ヲ不出候間、其上ハ大坂碇泊非常ニ備置候事、一人數凡上京ノ上、組頭一人へ三組百八十人ヲ、江戸芝邸ヲ為警衛之差出候事、

一 上京ノ上陽明家へ参殿、篤卜建議ノ上 御内意奉覽、其上乍恐滞京守護可仕候云々 勅諭ヲ被下、右ノ通御守護十分相備候上、非常ノ 聖断ヲ以、表向関東へ勅使ヲ被差遣候趣ハ、一橋公御後見、〔德川慶喜〕越前老公御大老ニ出世相成候様云々、然シテ尾州・長州・仙臺・因州・土州へ別段 勅命被下候趣ハ、今般 徳川家へ云々 詔ヲ被下候間、各談合ニ及、皇国ノ御為志心ヲ尽可抽忠節、万一違 勅ノ廉相頭候ハ、国家ノ奸賊執政安藤速ニ可加誅伐旨被 仰下、左候へハ有志ノ諸藩合從致シ、勤 王義拳無相違、其節ニ臨候へハ勢ヒ難及故、幕役モ戰慄シテ 勅意ヲ奉シ奉ンニハ無致方、万一不軌ヲ計候ハ、長藩其外水藩諸浪人四方蜂起シテ、義ニ応シ候ノ義ハ案中ノ勢ニ御座候、何レノ筋於関東成

取相決可申候、

一 勅命ヲ被下、則〔尚忠〕関白九條御退職、〔近衛忠徳〕左府御帰職、〔尊徳法親王〕青蓮院

宮様ノ御幽囚ヲ御解キ、万機ハ事無大小御談判被為在

候様、被 仰出度事ニ奉存候事、

一 右人数上京守護仕候上ハ、要枢ノ場所・地面御預ケ被

仰付度奉願候、

一 当時種々議論モ有之、此期ニ臨ミ候上ハ、徳川家ヲ

捨テ大義ヲ唱、正々堂々天下ノ義旗ヲ揚ケ、干戈用ル

ノ論モ有之哉ニ候ヘ共、夫ハ首尾ノ詰リ甚難問ニ有之、

畢竟罪ハ 幕役ニ有之故、真実ニ皇国復古ノ赤心ヲ尽

シ候尽忠ノ者ニ成候テハ、是非干戈ヲ用ヒス、不傷国

体成就出来ノ良策ヲ立度、勿論先々ヨリ 徳川家御扶

助、公武御合体ノ 叡慮ニテ、先君遺志モ其通ニ候

間、何分ニモ右御趣意相貫度奉存候、乍併不得止事義

出来ニオイテハ、不及是非義ニ可有之ト奉存候、

右ノ通概略ノ定策ニ候間、巨細相伺候上、万端治定ノ

上早々駈下リ、夫ト期シ候日限等可相決、仰テ天時ヲ

鑑ミ、伏テ人事ヲ察シ、不可疑ノ時機此一举ニ可有之

ト奉存候事、

御返翰写

一 極密々御申越ノ条々、実以肝要当然ノ義、無左候テハ

後々如何可相成モ難計、第一 皇国ノ安危ニ拘リ候義、

実以悲歎不過之、尤 上ニモ此辺深ク被遊 御痛心候

事故、申出度ハ十分ニ候ヘ共、九條関白其余ニモ彼是

ト姦賊多端ノ事故、〔宗睦〕迎モ 上ヨリ被 仰出候義御六ケ

敷、〔宗睦〕中山大納言・正親町三條ノミ誠実ノ心体、乍去新

役ノ義迎モ奸賊ノ人体出頭ノ折柄、中山大納言・正親

町三條兩人ニテ、 叡慮ヲ伺ヒ取計ノ義ハ相成間敷、

依テ正親町三條ニモ深ク痛心被致候様子、関白ニハ関

東一体ノ了簡、其レニ随從ノ人多端ニ候ヘハ、迎モ関

白ヲ相退ケ候義、如何ニモ相成間敷義、呉々痛心ニ迫

リ候次第、依テ何卒薩州・長州・仙臺・土佐等有志ノ

諸藩 幕府ヘ上書ニテモ相成、且関老ヘモ右ノ次第ヲ

叡慮被伺候事ハ相成間敷哉、右ノ通ニ相成候上、兎モ

角モ 勅詔被出候哉ト被察上候、何分 公武姦賊ヲ退

ケ候ハネハ、 叡慮不被為貫候、何レ共恐入候事共不

悪御察覽頼入候也、

右御挨拶相成候ニ付、和泉殿被相登、此度ノ御処置相

成候事ニ相見ヘ申候事、

〔文久二年〕
戌四月

第十三

風説

一薩州ニテ此度十二万ドルラル差出シ、西洋ヨリ四拾間余ノ蒸氣船買入候由、直様右船国許へ差下候由、右価等ノ欠引モ不致、火急買入ノ事ニ専ラ風聞仕候処、実否不相分、

但右ハ島津〔久光〕和泉上京ノ節、人数等為乗組候為メト相

見へ申候、

一松平修理大夫殿御家来善積慶介、去冬中ヨリ熊本・筑

後・久留米〔有馬侯〕・豊後岡〔中川侯〕等へ致流浪、当正月初旬

上京イタシ候由ニテ、右流浪中事ヲ企、二月比横濱〔各〕

ニテモ切入候処存ニテモ可有之哉、夫々謀略有之、右

慶介義当二月中同藩交代ノ者一同、品川迄參候由ノ処、

何カ事ノ不整ノ義ニテモ出来候哉、其謀計終ニ遂ケ兼

候由相聞へ申候、右同人此節大坂屋敷ニ罷在、夫々謀

略仕居候由、尤久留米藩并岡藩取合四拾人程、外二同

家中同志ノ面々皆大坂屋敷へ差置候由、岡藩ハ追々四

五十人モ相増可申由、尤岡藩ハ家老某同腹ノ所為ニテ、

入費等ハ君公ヨリ被相渡候訳ニ相聞へ申候、併右屋敷

ヨリハ出奔者有之段、御届ニ相成候由ニ御座候事、

一薩州浪人二百五十人余、長州下ノ關ヲ渡リ候由、其後又六百人程渡リ候由風説有リ、又一説ニ下ノ關ヲ不渡、別ノ処相渡候由ニモ風説ス、且後ノ六百人ハ先ノ二百人ヲ追捕ノ由風聞ス、実否相分リ兼候、

一薩州侯御実父、御一門御家老島津和泉何故カ相分不申候へ共、出府発足ノ旨御届相成、江戸詰ノ藩士二十五人、当節柄ノ事故大坂迄御迎ニ罷越度願立候へ共、不相成旨差図相成候処、右二十五人致出奔候旨、定テ大坂迄ノ了簡ニテ相越候由風聞有之、

一薩州并肥後へ、京都ヨリ 御内々 御綸旨出候ヨシ、専ラ致風聞候へ共、是ハ全ク虚説ニテ、右様ノ義全ク無之ト申方実説ノ趣、頃日風唱ニ罷成申候、

第十四

同断

一長州藩山田〔公忠〕又助トイフ者、若君ノ命ヲ受、長門下ノ關

ニテ和泉侯へ拜謁仕、於弊藩モ是迄頻ニ苦心致シ、何

卒 天朝ノ奉休 宸襟存念ニ有之候処、当時寡君関東

ニ罷在、殆ト機ニ後レ候故、所詮先鞭ハ御尊藩ト被存

候へ共、二ノ手ハ決テ他へ不讓、屹度尽力可仕旨申上

候処、泉州侯〔久光〕ヨリ決シテ先後杯相争候訳ニハ無之、互

二国力ヲ尽シ、謀ヲ合セ 叡慮ヲ可奉休旨御返答相成
候由、

一泉州侯、蒸氣船ニテ室津ヨリ御上京ノ由、尤右蒸氣船

鹿兒島ヨリ大坂迄二昼夜ニテ往来出来候由、

四月廿二日

第十五

播州藩書簡抄

一薩州御家老和泉殿、去ル六日播州室ト申^(室津)処へ着船有之

候処、浪士十二人旅館ニ推參ノ上申聞候ニハ、私共義

ハ 皇国誠忠ノ者ニ御座候処、承候へハ老公ニハ此度

ハ夷狄御誅伐ノ思召有之候由、何卒私共ヲモ右陣列ニ

被召加候様仕度、左候へハ先陣ニ相成、身命ヲ抛テ奮

戦可仕候、和泉殿答ニ、右様ノ義ハ夢ニモ不存、万

一拙者右様ノ思立有之候共、其元方拙者ニ附屬致シ、合

戦被致候段ハ大ニ相違ノ事ニ被存候、其故ハ臣下ハ主

人ニ仕へ、主人ノ馬前ニテ合戦被致候社忠臣共可申ナ

リ、拙者ニ附屬被致度段ハ筋違ト申者ナリ、況ヤ於拙

者右様ノ思立無之候へハ、早々御国へ被立帰、御主人

へ忠勤有之コソ誠忠共・忠臣共可申段、被申渡候趣ニ

御座候、右浪人共ハ更ニ一言無之、逡巡トシテ立去候

様承申候、大坂ニモ所々ニ群集仕居候由和泉殿被聞出、
是等ヲモ申諭シ、早速為立去候様、室ヨリ大坂迄被申

送、十一日大坂へ着、夫ヨリ出府ノ趣ニ御座候、江戸

着ノ義廿七日頃ト申事ニ御座候、

右某ヨリノ書簡ニ御座候処、右ノ趣ニテハ浪人同腹ト

ハ相見へ不申候へ共、表向而已右様ニ取計、内実ハ浪

人ト申合置候訳ニモ可有之哉、更ニ相分兼申候、

第十六

土州藩書簡写

一此度泉州侯^(島津和泉)ノ事ナリ御上京ノ義ハ、天朝幕府ノ為メ、

薩州ノ力ヲ以テ屹度御周旋ノ思召ニ候処、過ル十二三

日頃、藩士^(伊地知貞豊)堀次郎義、大原卿^(重徳)へ被為召、 叡慮ノ趣被

仰聞候由、

叡慮ノ大略ハ、是迄 幕府ノ暴政違 勅等ノ義ヲモ

寛大ノ 御仁恵ヲ以御有恕被為遊、賞罰ヲ明ニシテ

攘夷狄候様ノ廉モ被為立、猶此上ニモ 公武御合体、

徳川家ヲ被遊 御保助度トノ 叡慮ノ由、

右ノ通ニテ、御受相調候哉否ノ義ヲモ被 仰聞候由ニ

テ、勿論 叡慮ノ処、聊不奉違背奉畏候旨申上、則右

ノ趣泉州侯へ申上、同十六日朝泉州侯伏見出立、辰ノ

刻頃御着京、一旦御邸へ被為入候処、巳ノ刻近衛殿ヨリ被為召、御參殿相成候処、中山卿・正親町三條卿・岩倉卿御參集ニテ、叡慮ノ趣次郎・大原卿被仰聞同様に事ノヨシ被仰聞、且泉州侯御存慮ヲモ御尋ノ由ニテ、泉州侯被仰上候ニハ、叡慮ノ処一々奉畏候、乍然攘夷ノ義ハ、兎角内ヲ整へ不置候テハ不相成義ニ付、先ツ一橋刑部卿ヲ以將軍家ノ後見ニシ、其他尾張・越前ヲ始、賢明ノ諸侯へ宥罪ヲ以テ禁錮、或ハ退職被 仰付候勤 王ノ志有之方ヲ元ニ復シ、暴逆ヲ逞シ、天朝ニ迫リシ賊ヲ井伊・間部・安藤輕重ニ随ヒ悉ク罪ニ行ヒ、或ハ封ヲ削リ、其地ヲ以 天領トシ、畿内ノ地ニ親王方ヲ置テ 天朝ノ羽翼トシ、後ノ逆徒 天朝へ迫ル事ノ不相成様ヲ予備ヲ立、然ル後攘夷ノ策ニ相及可然旨申上、且 叡慮ヲモ御伺被下度旨及言上候処、正親町三條卿被仰候ニハ、尾張等ヲ本ニ復シ候義ハ、中々難事ニテ可有之、左様相成候テハ、却テ内乱ヲ醸シ候様可相成候旨被仰聞候由ニ付、泉州侯ヨリ是等ノ義 叡慮ノ儘ニ不參候テハ、所詮其ノ義モ不被相行義ニ付、何卒 叡慮ノ趣叡慮御決定之上、無御違慮聞東へ下被仰聞度脱カリ候上、尚又奉違 勅候節ハ不得止事、臣等追討可仕、臣巳ニ国ヲ出ル時、身命ヲ奉捧 天朝ニ候覚悟罷在、

聊願ル所ニ非ス、弊藩雖微弱、三ヶ国ノ人数ヲ以テ屹度尽力可仕、独り成否ノ所ニ至テハ予メ難期トイヘトモ、当今ノ人情ヲ以相考候処、列藩ノ中ニモ勤 王ノ志有之諸侯数多有之候へハ、一度事起候ハ、必 天朝へ馳集可申、依テ 叡慮ノ処、屹度御英断ヲ以御決定相成候様、被仰上度旨申上候由ノ処、中山卿・正親町三條卿早速御參 内及奏 聞候処、 主上頼母數被 思召、不浅御満足ノ由ニテ、其形兩卿ヨリ泉州侯へ被 仰付、其余難有蒙 仰、且當時滞在ノ義ヲ被 仰付候由、尤表向ハ諸国浪士共、数多洛中ニ入込居候趣ニ付、万一乱妨等ニ及ヒ候程モ難計、依テ暫ノ間右為取締之致滞京居候様被 仰付候由ニテ、夜半過キ御退殿、其俛伏見へ御帰、翌十七日伏見御引払ニテ、七ツ時頃御着京ニ相成リ、將又 叡慮ノ義モ、多分泉州侯御建白ノ通 御英断ニ相成、久世閣老御呼登セ之 勅書、御同人へ御渡相成筈ニテ、過ル十七日関東へ被 仰遣候由、是又 幕府違 勅ノ時ニ干戈ヲ動ス御成算故、其用意ハ屹度相調居候風、御左右次第御国元ヨリモ多人數馳登リ候御調ニ相成候由、薩藩士有志ノ者共泉州侯御供ノ外、夥敷伏見・大坂等へ相潜居候ヲ始、其他諸

藩同志ノ者共モ、万々一泉州侯関東御下リノ思召カ、又ハ聊ニテモ手緩キ思召有之候カ、機会ヲ失ヒ候様ノ義有之時ハ不得止事、泉州侯ノ命ヲ不用機ニ投シ、同志ノ者俱ニ事ヲ起スヘキ存念ニ有之由ノ処、泉州侯前件ノ通ノ思召熟レモ望ニ叶ヒ、右藩士ハ素ヨリ諸藩ノ者迄モ大ニ悦ヒ、時ヲ相待チ、且薩藩役手ヨリモ安リノ義無之様、精々制居候也、

四月

第十七

島津和泉口上ヲ以近衛様等へ申上候三箇条ノ書附写
一十六日鳴津殿、近衛殿へ御上リ被成候処、中山殿・久我殿・三條殿御同席ノ処、別段建白モ有之候へ共、右ハ一同御立合ノ上ナラテハ開封難成旨ニ付、御口上ニテ被仰上候三ヶ条ノ事、

一第一ハ、徳川家定未心天璋院ノ義ハ、何分卑賤ノ娘ニテ、一旦近衛殿御養女トハ被申候へ共、一天万乗ノ至尊ノ御妹君ヲ子ト仕候義、冥加ニ背キ何共申上候様無之、既ニ去春公辺へ致敷願、里方へ引取為致隠居可申段申立候へ共御取用無之、和宮様御下向ノ義ハ、主人修理大夫始、一同美以寝食不安昼夜恐懼而已、苦痛不一方、

此儘捨置候テハ、向後鳴津家相統之事件ニ相係リ、後來ノ神罪実ニ恐入奉存、依之近衛殿へ御引取、其上拙者方へ御返シ被下度事、

一第二、近来修理大夫身上不如意ニテ必至ト行詰、其上諸品高直ニテ、上下參勤ノ路費莫大相高ミ、国元ヨリ大船ヲ以運漕人数モ乘込可申義モ、歎願相叶不申、迨モ兩三年此儘ニテ押張候テハ忽チ滅亡ニ及、子孫断絶ニ及候程ノ義ニテ、向後江戸參府ハ相断、京都ニ四町四方ノ地面ヲ拝領ノ義、勅許ヲ蒙リ、御当地迄無懈怠、主人常在京同様登京仕、第一天朝ヲ守護仕、勅慮ヲ安シ奉り度、尤地面ノ義ハ井伊先例モ有之候事故、何分ニモ勅許ヲ蒙り候テ、江戸ハ五ヶ年一度名代ヲ以テ參勤為致度事、

一第三ニハ、外夷渡来打払ノ義、述モ言語ニ絶果、此上建白仕候所存無之上ハ、他家ハ不存候へ共、分脱之鳴津領内へ夷船渡来仕候ハ、無二念打払度、勅許ヲ蒙度事、右ハ是迄領分内へ度々夷船渡来仕、奔走ニ疲弊、右ニ付テハ百姓共へモ多分難儀ヲ掛、農事ノ妨ヲナシ候ニ付、此上是迄ノ通、度々百姓共ヲ駈集使ヒ候テハ、御預リノ民百姓共各産ヲ失ヒ、忽ニ飢渴ニ及候義、前文ノ通、

打払不申候テハ患ノ根断不申候事故、此段 勅許ヲ蒙
リ度願ノ事、

右三ヶ条御尤ニ被 聞召、深キ 思召ヲモ有之候ニ付、
先和泉義ハ伏見へ差扣可申様、表向被 仰渡候へ共、
御内実ノ処ハ京地屋敷ニテ滞留、警衛第一ニ被 仰付
候由、

第十八

高津和泉ヨリ粟田宮様等御慎解并御老中衆等黜陟ノ
義ニ付、箇条ヲ以 御所へ差出候建白書写

一 關老久世大和守ニ致上京候様、屹度被為 仰渡候、如
何可有御座候哉、

一 粟田宮様・鷹司大閤殿〔政通〕・近衛左府殿・鷹司右府殿御慎
〔尊嚴法親王〕

解被為在候ハ、如何可有御座候哉、

一 関東ニオイテ一橋殿・尾張前中納言殿・越前中将殿・
〔徳川慶喜〕 〔徳川慶恕〕 〔松平慶永〕

土州隠居・宇和島御慎解有之候テハ、如何可有御座候哉、

一 九條公并所司代酒井若狭守退去ノ御所置被為在候義、
如何可有御座候哉、

右ハ御罪ノ有無ハ全ク不奉存候へ共、天下之風評、
且此節難波辺ニ所々致充滿居候諸浪人ノ説ヲ承り候
処、此御方々ヲ奉恨衆惡ノ帰スル所ニ御座候間、此等

ノ御所置無之候テハ暴発目下ニ起リ、人心和合ト申
場所ニ不至哉ニ奉存候間、存意ノ程叩心胆奉申上候、

一 関東ニ於テ安藤對馬守速ニ退役被 仰付候様無御座候
〔信職、老也〕

テハ、人心潰散変乱ノ基トモ可相成奉存候、

一 御慎解ノ上一橋殿御後見、越前中将殿御大老職被為任
候テハ如何御座候哉、右等ノ処人心一和ノ基本ト乍恐
奉存候、

一 前件ノ義被為 仰渡候ニ付テハ、乍恐 朝廷ノ 御威

勢不被為在候テハ、関東ノ有司急速御用ノ義、如何ト

奉存候、一二ノ大名へ御内 勅被下、結局見届候様被
仰付候テハ、如何可有御座候哉、

一 越前在職候ハ、上京被為 仰付、 朝廷御尊奉ノ道相

立、邪正ノ弁明白ニ罷成候様、被為 仰聞度奉存候事

ニ御座候、

一 公武御合体上下一致ノ上、異人ノ御所置天下ノ公論ヲ
以永世致貫徹、明制被為定、 皇威諸蛮ニ輝候様罷成
度奉存候、

右ハ、近頃僭踰ノ至固不免鉄鉞ノ罪、奉恐縮義ニ御
座候へ共、近来ノ世態ヲ觀察仕候処、綱維日々廢弛、
人心不和ノ極、变故四〔出之〕□、終ニ夷人ノ正朔ヲ奉シ候

様罷成モ難計、乍恐 玉体ヲ不被為安様承リ、且本
文ノ事件 叡慮ノ被為向候哉ニ夙ニ奉伺候間、到底
叡慮ヲ奉補佐、 公武御合体・人心一和ノ道ヲ御成
就被成候様有御座度、此段内々奉言上候、恐懼再拜、

文久戌四月

島津和泉

第十九

京師書簡抄

一京師表、過ル十五日夜中ヨリ大變ノ義御座候、島津和
泉殿大人數ニテ大坂表へ參着、夫ヨリ上京相成候ニ付、
伏見表へ無案内御入込被成候由、始近衛様へ參殿相成
廿六日、夜八ツ時迄御相談ニテ被罷帰候、其子細ハ相分
リ兼候へ共、風唱ニハ 勅詔ヲ受ケ外国人打払可申ト
ノ由ニ御座候、尤右和泉殿國許ヨリ大坂迄蒸氣船ニテ、
二日ニシテ御到着、船ノ長サ四五十間計ノ由、惣人數
大坂ニ被居候分一万五千計、伏見表ニハ五六千、京都
ニモ千人余ノ由、荷物ハ沢山相廻、何レモ長持入ノ由、
多分兵器ニ相見へ、日々船ニテ高瀬為登仕候由ニ御座
候、所司代ハ大ニ恐怖ノ様子ニテ、十五日杯ハ具足ヲ
着シ相堅メ候由、其外人數西國筋・長州追々大勢ニテ
御上京相成、最早六七百人ニ相及候由、（分傳）黒田侯ニモ播

州辺ヨリ御引返シ相成候由ニ御座候へ共、御人數ハ上
京ノ由、阿州モ此間丸山ニ御一泊相成候得共、是又御
人數ハ殘シ置、御屋敷ニ罷在候由ニ御座候、九條様モ
大ニ恐怖、何方ヘカ遁匿被致候由、所司代ハ更ニ參
内モ無之、尤形勢ニテ其恐怖可申様無御座候、女中子
供等ハ何方ヘカ退散仕候由ニ相見へ、其騒動実ニ大變
ノ事ニテ、市中商売モ相休候様ニ御座候、右ニ付物価
ノ高直可申様無御座候、何卒シテ早く相治候様仕度候
へ共、江戸表ヨリ御役人ニテモ上京相成不申内ハ、相
治リ申間敷ト奉存候、

右ハ京師ヨリ某ノ方へ申遣候書簡ニ御座候處、其文
面ヲ以見候へハ、島津（久光）和泉浪人ト同腹仕候様子ニ相
見へ候へ共、追々篤ト探索仕候へハ、全ク右様ノ訳
ニハ無御座候風、島津ノ意ハ矢張長州侯同様 公武
御合体ニ仕度見込ノ由、然処播州表ニ於テ浪人ニ出
会、種々ノ義被訴、不得止其趣 奏聞ニ相達候由、
右 奏聞ハ所司代ノ手ヲ不歷縁談等ノ訳ヲ以近衛様
へ申上、御同人様ヨリ 奏聞ニ相達、直ニ議奏衆ヨ
リ 叡慮ヲ以テ浪人鎮靜ノ義被 仰出、（符也）彼是其事情
疑敷、且又供人數等大勢被引連候故、浪人同腹ト外

相見へ不申、尤於幕府モ御疑惑深く、御評議紛々ノ様子ニ相見へ申候、乍併全ク右様ノ訳ニハ無之風、実以長州同様ノ所存ノ事ニ相聞へ申候、

第二十

風説

一 島津和泉義、関白殿其外へ参向ノ義、所司代へモ届無之義、若狭守殿ヨリ京地薩州家留守居被呼出、被相尋候処、答ニハ薩州家見込ノ義、再度関東へ申上候へ共、実ニ御採用無之、当家ノ義ハ 神祖ヨリ 御内命代々伝来ル義モ有之、御国体ニ相拘候義故、関東ヨリノ台命ニハ難換、最早 台命ヲ破リ罷在候義ニ付、右罪状ハ薩州家覚悟モ有之義ニ付、 公辺へ届候ニ不及由ニテ、更ニ意ト不仕風ニ御座候、

右風説ニハ島津和泉関白殿下等へ参向ノ義、御所司代衆へ届無之由ニ相見へ候へ共、外風説ニハ御所司代衆へ罷出候事ニ相見へ、彼是不審ニハ候へ共、只今ニ至何レカ真偽確定仕兼候、依テ両説共記置、後考ニ備フナリ、

第二十一

同断

一去ル十五日、薩州侯蒸氣船式艘ニテ多人數引率、大坂へ到着（國元ヨリ二日、略ニテ到着）、直ニ卒兵致上京候由、薩ノ人数書面振ニテハ大坂着一万五千人程、其内伏見へ入候者五六千、京迄参り候者千人計ト申事ニ候、十六日近衛殿へ参殿有之、其夜八ツ時後退出、且大坂ヨリ長持入ノ荷物日々京へ廻候由、十五日夜ヨリハ、所司代屋敷皆着具ニテ守備、九條公ニハ何レハカ遁匿ノ由、所々番所々々モ唯々致恐怖候ノミニテ、通行ヲ誰何スル者モ無之由、薩州侯ノ主意ハ、是非 勅命ヲ受ケ攘夷ノ目論見ノ由ニ御座候、此上如何相成候哉ノ由ニ御座候、

第二十二

京師書簡抄

一 当月十五日、伏見御奉行ヨリ京都所司代宛名ニテ、何ニカ不分ノ義有之由注進有之候ニ付、御目付方御屋敷夥敷混雜ニテ、拔身ノ槍ヲ取抱、又ハ甲冑ヲ帶シ候由、此事実事ニテ、同夜五ツ時頃ヨリ始、曉七ツ時頃鎮り候由、如何訳カ難相分由ニ御座候、同十六日未明ニ、（島津久光）和泉殿近衛様へ被成御出候ニ付、関白様、伝奏衆・議奏衆中山・正親町三條・野宮・久世・飛鳥井等諸卿御参 内ニテ、大御衆議ノ様子ニ相聞へ申候、右様ノ次

第二テ、夜四ツ時頃関白様御下リニ相成リ、中山・正親町三條様等近衛様へ御寄合ニ相成、良久ク御内談有之、曉七ツ時頃和泉殿、近衛様ヨリ御引取り、伏見へ御帰リニ相成候事、

第二十三

同断

一過ル十五日、薩州御家老トモ相唱へ、又御当主修理大夫殿御実父ニテ御(原介カ)ノ御方トモ相唱へ、島津和泉ト申方ノ由、同勢五六百人ニテ大坂ヨリ伏見御屋敷へ着相成、右同勢ノ内士五六十人程直チニ同所出立、伏見旅人御改所罷通り候ニ付、御不審罷成、何方御家中ノ由被承届候由ノ処、薩州家中主用有之京都屋敷へ罷登候由答ニ相及、追々姓名等被承届候へハ、御当地へ御関所被相立候義、公辺ヨリ御達シ等モ無之、私ニ名前等承候義ニ候へ、屋敷へ罷越候様強勢ニ申断罷通、怪敷出立ニ付、右御改所ヨリ伏見御奉行へ御届罷成、御同所ヨリ御所司代衆へ御通達罷成候事ニモ相唱へ、又一説ニハ同日伏見鎮守稻荷社神事ニ付、為賑之花火相立候ヲ、二條火ノ見ニテ御相凶ト心得、騒立候由ニモ相唱へ申候、同夜五ツ時頃、火鐘并鉦・太鼓等打候

ニ付、組与力等何レモ二條 御城へ相詰、 禁裏守護ノ御諸家御人数等ハ、 御所御門々々へ、 火事装束ニテ何レモ武器携へ罷出、 御堅メ罷成候上、 二條 御城向寄町家へ、 何様ノ変事ニ相至候哉モ難計候間、 老若早速立退候様向々へ被仰渡、 以ノ外騒動仕候事ニ相見へ候処、 同十六日朝、 無何事モ御人数御引揚罷成候由ニ御座候、

一同十六日朝飯後、 嶋津和泉義伏見出立、 同勢四五百人ニテ御所司代衆へ罷出、 直ク近衛様へ参殿、 夜ニ入退出、 薩州御屋敷へ暫時立寄、 其夜ノ内伏見へ罷帰、 同十七日未明出立、 京都御屋敷へ取移、 引続罷登候者共有之、 当時惣人数千二三百人余モ可有之由、 供廻ヲ始諸荷物等、 常体ノ模様ニモ不相見得、 尤同所御屋敷御手狭ニ付、 向寄町家下宿ノ者モ数々相見へ、 其他伏見・大坂辺滞留ノ者モ、 数多有之事ニ相聞へ申候、

第二十四

同断

一薩州ノ島津某殿、 十六日早朝ニ所司代屋敷へ御出ニ相(稻井忠義)成、 若州候へ直様面会ノ上、 申入度義有之趣被申入候(之)処、 俄ニ病氣ニテ御断ニ相成候ニ付、 家老へ御申置ニ

相成、直様近衛殿へ御出ニ相成申候、凡同勢百人位、(候処、夜ニ入御退出、伏見ニ御引取ニ相成脱力)徒近習共袴股立ヲ取り、無羽織下ニ着込ヲ着シ、大小

落指ニテ一騎当千ノ有様、勇々敷義ニ御座候、

第二十五

同断

附

廣幡卿御用人毛利采女佑書簡写

一 今般、薩州家御(尼介)島津和泉ト申御方ノ由、多人數ニ

テ上京ノ上、議奏衆へ被申上候趣、并同人義何様ノ御

趣意ニテ被相留置候哉之義、段々承(配力)仕候処、廣幡様(忠礼、議奏加勢)御用人毛利采女佑義、別紙ノ通申聞候間相達申候、且

浪人共御所司代衆御役宅ヲ伺居候訳ニモ可有之哉、其

後共御同所御役宅向寄へ、新規ニ張番所被相建、昼夜

御足輕体ノ者被差置、夜中ハ折々板木等打、御屋敷中

取騒候様ノ義モ有之由、関白殿ニテモ御同様ノ御手当

罷成居候哉ノ義モ相聞へ、何レニ右御両所御取計不宣

儀有之候故、不穩義出来ノ様、洛中一統無貴賤風説仕

居候哉ニ相聞へ、然ニ右ニ付テハ、御国元ヨリモ北国

通御人数被相登候事ニ、世上専ラ唱へ申候者モ相聞へ、

頃日尾州御屋敷へ、其御地ヨリ右ノ趣申来候由ニテ、

御出入町人阿形甚助ヨリ密々取合有之由、同人義直々(ママ)

申聞、此度鳴津和泉義、近衛様へ參殿被申立趣御取受

罷成候トハ、誰々モ目指居、御同所様へハ別段御統柄

ニ付、彼是取加へ唱上候訳ニモ可有御座哉ニ奉存候へ

共、公刃御役々ヨリモ、余程ニ御懸念罷在居候御模様

ニ相聞へ候間、為御承知ノ別紙差添、此段モ相達申候、

別紙廣幡様御用人ヨリ申遣候書面

一 兼テ承合候様内々御頼ノ嶋津和泉、此度上京ノ次第左

ニ、

一 当薩摩侯実父ニテ元周防、和泉ト改名、年四拾七歳、

右此度表向実父ノ御屈相濟、万事御家来向ニテハ、君

公同様ニ相心得候様被申達候由ノ事、

一 近衛殿へ罷出候節、惣テ下乗物所等薩公同様ノ取扱ノ(場力)

由、供廻リ等は又薩州同様ノ由、

一 島津和泉此度致參府候義ハ、国主參府御断等濟ノ御礼、

且江戸屋敷焼失ニ付、旁々出府ノ由ノ処、於途中浪人

共待受、右和泉へ申込候ニハ、只今ノ次第ニテハ惣シ

テ意外ノ事共ニ候間、此儘差置セラレ候テハ何角存慮

モ有之、京師へ罷登乱妨ニモ及ヒ可申義、旁々致取次

候様申懸、追々多勢ニ罷成、捨置候テモ恐入候ニ付、

夫々取押上京ノ趣、依之近衛殿へ参殿シ、議奏正親町三條殿へ面会致シ度候間、被召寄候様申上候ニ付、早速以御使正親町殿へ被申入候処、折節当四月十日付ノ廻文ニテ、所司代ヨリ官武往返有之間敷ノ由申来、旁々以表向御届申上、其上和泉へ面会ノ義所司代へモ申達シ相濟、近衛殿ニオイテ中山殿・正親町殿立会ニテ、和泉へ御面会ノ上、右浮浪ノ者共申聞候条々、何角内談有之候由、其場所へ岩倉殿被罷出候由、直様御所へ右両卿御引取ニテ被及、奏聞候ニ付、早速諸卿且閑白様被 召候処、御所勞ノ御申立ノ処、押テ参 内有之候様、則野宮殿為 勅使被罷出、無抛十六日夕刻参殿被成候由、尤参 内ノ御道筋御嚴重警固ノ由、右御衆評ノ上、老中被召登候段御治定ノ趣、依之其旨和泉へ御返答ニ相成、尤右老中上京及返答候迄ハ、浮浪ノ者惣テ取押へ、和泉へ御預ケニ相成候由ノ処、則御受申上候由、先ツ関東ヨリ返答有之候上ノ成行ト奉存候、一四月十六日、和泉事近衛殿へ罷出候ハ辰ノ刻頃、関白様 御所御退出ハ子ノ刻ノ由、和泉近衛殿へ引取候ハ（ヨリ引取カ）丑ノ刻前ノ由ニ承ハリ申候、一十五日和泉出京ノ節、所司代へ入京ノ届不申入込候故、

依之彼是所司代方致混雜候趣キニ候、

一廿三日夜、伏見表ニテ薩州家且浪人共何角申分出来、六人迄打果シ候由、依テ三十人計浮浪ノ者行衛不相知趣ニ付、則何方ニテ致狼藉候モ難計趣、所司代へ相届候由、依之又々同所致混雜、何角出陣ノ支度有之由ニ候、

第二十六

江戸書簡抄

一薩州・長州等浪人京攝へ相集、島津和泉出府ヲ待受、同人ヲ以近衛様へ申立候趣意等、関東追々御政事向不宣、畢竟奸曲ノ諸役人取計ヨリ起リ候事故、 勅許ヲ蒙、右奸曲ノ役人ヲ可致誅伐トノ趣ニ候処、右ハ素ヨリ御取受無之、浪人共嚴ニ取締罷在候様、和泉へ被仰付候由ニ御座候、右浪人共大凡七八拾人程諸藩入居候由、中川修理大夫殿家来十人余加リ居候由、四月廿三日於伏見表、和泉差図ヲ以家来八人打果候義ハ、被 仰出御趣意ヲ以、夫々申論候へ共承服不致、最早狼藉ニ及可申様子ニ付、無抛右ノ始末ニ相至候由ニ御座候、

一廿三日ノ夜ヨリ、薩邸へ出入ノ早駕籠二三十計、東西

絡繹相通リ、此事何故ニ御座候哉、何ソ變報ニハ無相違ト被存候処、此事四五日以前迄ハ内々ニ相唱候処、只今ト相成候テハ道路上ニモ公然說話、人心洶々不尋常、乍去若州何罪ヲ天下諸侯ニ相負候筋ニモ有之間敷、且夕ニ兵争相創リ候義ニモ有之間敷、乍去若州ノ怯膽不奮、夜ハ長持ノ中ニ寢息、門出ト申ハ久敷無之由、九條関白殿ニハ関東党ト申テ評判不宜、是又御病氣ニテ御參 内無之候、

第二十七

江戸書簡抄

一薩州侯屋散口町近辺ハ、上使ニテモ有之様、戸々飾桶等差出、御馳走振イタシ候由、極内密聞出候由、
一薩州侯日々長州侯御待受、夷狄打払ノ 勅命御頂戴御願ノ由、長州侯屋敷ヘハ兵糧米日々被運入候由、
一薩藩嶋津和泉ト申者、一門ノ由申立居候由也、供人數三千人程、実ハ当侯御実父ノ由、供立等当主同様ノ由、表向ハ近衛様ヘ御縁約御相談ノ由申立居、御同所様ヘモ參殿被致候由、其節御取扱御当主同様ノ由ニ御座候、

第二十八

京師書簡抄

一去年、修理大夫殿ヨリ近衛様ヘ御直書ニテ、品々被仰上候テ、右御答書等大略被仰遣候由ノ写等モ流布仕候^(添カ)テ、是又諸方ニテ披見仕候処、其前後共右御殿ヘ參上、且諸大夫御用人等宅ニテ面会ノ節モ、色々ト相探候テ承^(配カ)□仕候ヘ共、何等ノ義モ不申聞、私ノ愚按ニハ実事ニ有之間敷哉ト奉存候、然ルニ此度嶋津三郎上京ノ義ハ、御縁組為御取極^(之カ)ニト申次第ハ、旧冬以来御申合有之候由ニテ、去月十五日參上ノ義ハ、両三日以前薩州家京師御留主居ヨリ不意ニ申來、御役々其手配モ無之、大ニ当惑仕候由ニテ、十五日參上ノ上、御両卿ノ議奏衆ヘ面会ノ義ハ、臨時ニ申上候テ不得止事、右御殿ヨリ被仰遣候処、御両卿共早速近衛様ヘ被罷出、稍々久敷御談判有之候由ニ御座候、左候テハ和泉等ヨリ、前以テ夫々議奏衆ヘ内通罷在候哉ニテ、別テ故障モ不被申述、於此義ハ近衛様ニテハ、以前ヨリノ御拘無之哉ニ御模様相聞ヘ候ニ付テモ、去年來ノ御応答ノ義、信用難罷成義ト奉存候、右ニ付和泉御殿ヘ參上ノ節ハ、薩州侯御同様ノ御取扱ノ由、世上ニテ風説仕候ニ付、此義右御殿御役々ヘ乍内々承^(配カ)□申候処、表御門ヨリ御玄関ヲ上リ、扣所等ヘ被相通候義ハ、是迄此方様并薩

州様等御一門・御家老、為御使者被相登候節、同断ノ御取扱ニテ、此度御縁約罷成候御姫様ノ御実父ノ義故、追々奥向へ被相通候テ、別段御取扱罷成候節ニハ、是迄被相登候御一門等ノ御取扱トハ、格別御行違被為在候テ、表通りノ義ハ何モ御差別無之由ニ御座候、其外世上ニテハ品々風説仕候へ共、何ヲ以是ト可申上様無之候条相違不申候、且九條関白様ニハ御所勞ニ付、関白職御辞退ノ処、頃日御内々被 聞召候テ、去月廿九日近衛入道前左府様御還俗ノ義被 仰出、過ル七日関白職 御内意被 仰出候処、是等ノ義、遠藤小三郎ヨリ相達候旨申聞候ニ付相略申候、然ルニ前左府様被為叶御冥加、難有御仕合ニ被思召候へ共、近年弥増御病身ニ被為成、其上如此世中、逆モ御非力ニテ御在職ノ義御見詰無之由ニテ、乍御内々再忖御断被仰上候由御座候へ共、於 主上不被 聞召、不得止事御請被仰上候御模様ニテハ、実ニ御当惑被成置候趣ニ相伺申候、近々ニハ 宣下御拝賀等被為在可申候条、尚追々相達可申候云々、

五月

第二十九

探索書

一 松平修理大夫殿御家来黒田嘉右衛門事、正議ノ者ニテ、(島津茂久、薩州藩主)

島津三郎京師へ出張ノ様子ヲ江戸ニテ承リ、堀小太郎(伊地知貞徳)

謀主ニテハ、天下ノ事誤リ候様ノ事出来候テハ不相成

由ノ見込ヲ以テ、是非御旗元衆ノ内、天下ノ事情ニ暗

カラサル人ヲ一人御撰ヒニ相成、久世大和守殿一同被

相登、三郎へ江戸ノ事情ヲ説候様致シ度、安井忠兵衛(衛息郎)

へ相談ニ相及ヒ、忠兵衛ヨリ大和守殿へ申上、大久保

越中守殿急ニ大目付ニ相成候由、大和守殿御上京ノ節

一同被相登候テ、三郎へ微行、江戸形勢ヲ篤ト説示シ

候筈ニ、御吟味相済候事ニ相聞へ申候、

但右風説ヲ以テ推考仕候ニ、此度嶋津和泉、江戸出府

ノ上、幕府ノ罪ヲ相糾候等ノ目論見故、幕吏共

大ニ恐怖シ、成ラハ和泉出府不致様イタシ度トノ

計算、相施シ候事ト相見へ申候、

五七三 雑集

第一

長崎書簡抄

一 薩州様ニテ琉球産物御買入御商法、当分御見合相成候

由、右ノ義ハ、長崎表へ諸蛮夷入港ノ後ハ、唐紅毛等之産物悉ク下落仕、右ノ外神奈川表ノ義モ有之、自然御利益無之、右御見合ノ風、然ル処江戸御屋敷御焼失、且当年ハ殿様御参府、彼是不輕御物入ノ御時節ニ付、御領内分限割ヲ以御用金被仰付候由、依テハ御国産ノ品々利益ノ義ハ、一統勝手ニ商売可仕、尤他所仕入、他所出シ荷物等ノ義ハ、御用物同様ニ、上ヨリ何分雜費無之様可致手当、右荷物運送等モ上ヨリ御手数被成下候間、此段向々へ屹度通達致シ置へキ義被仰出候ニ付、御領内ノ者一統難有奉存候由云々、

三月

第二

風説

一薩州家御人数、御門外へ相出候義、敵ニ被相制置候モノニ相見へ、先ハ他出等ハ不仕、武芸稽古ノ由、諸事御手当向等ハ、十日・廿日滞留ノ模様ニモ不相見由ニ御座候、

四月

第三

同断

一薩州御当主へ附上候者ト、島津和泉へ附候者ト、区々ニ相成居候テ不穩風、且此後和泉急出府ノ義ハ、長州侯并御家来永井雅楽(時應)、公武御和順御取扱致シ候ト申義承込、俄ニ出府ノ趣ニ相聞へ、近日御両家意味合出来可申トノ事ニ御座候、

一島津和泉出府以前、既ニ御評議相濟居、京都ニテハ近衛様御始、関東ニテハ尾州様等、悉皆御宥恕ノ御沙汰ニ相成候処、浪人共ノ申立、大方同様ノ子細合合モ有之候哉ニテ、自然手後ニ相成候姿モ相見へ、且乍恐京師ニテハ戦争等ノ事決シテ御許容無之、近来諸家ヨリ種々申立候義、却テ御不安ニ被思召候由、就テハ御老中衆上京被仰出、此節ノ一条取扱方、且總テノ御取行御旧格ニ被相復度御趣意有之、全ク此御場合ニテ、弥以公武御和順一致ノ御政事相復候義ニテ、暫時ノ御事多ハ勿論ノ事ニ候へ共、却テ御安心ノ基ニ可相成トノ事ニ御座候、

四月

第四

同断

一松平修理大夫殿御家老島津和泉ト申入、此度上下千人

余ニテ江戸表へ罷下候由、表向ハ何カ力用事取捨、内実ハ大謀略有之由相聞へ申候、四月中ニハ大騒動関東へ出来可申由、諸藩同志中へ相通候事ニ相聞へ申候、然ル処、唯今ニ何事モ無之ヲ以見候へハ、御殿山異人館ノ出来ニテモ待居候訳カト相聞へ申候、

一薩州侯大坂御屋敷へ、日々ノ様両三人ツ、浪人共着仕候事ニ承及候処、何様之手段ヲ以テ差置候哉、一円相知レ不申候、

一此度ノ謀主ハ、前書ノ和泉ト申人ノ由、専ラ風唱仕候、一大坂表ヨリノ紙面ノ内、嶋津和泉ノ事相見へ候処、同人目論見尊 王攘夷ニ表向ハ見へ候へ共、全ク浪人同

腹カニ相聞へ申候、先以長州侯同様 公武御合体ノ^忠由、^力一体ハ浪人等致教諭候処ヲ以テ、^力顯然ノ様ニ被存ト申候、

一薩州ヨリ船ニテ、大坂へ兵糧米ヲ頻リニ送り候事ニ相聞へ申候、

第五

同断

一今度薩州藩中致上京候ハ、 禁裏御守護ト申立、二万計上京、其内千人計モ京都屋敷へ逗留、残ノ面々伏見

ニ罷在、彼所ニオイテ陣屋ヲ藩中ノ輩自作ニテ相立申候事、

一今度ノ願方ハ、日本乱世ヲ見受、 禁裏ノ御守護ト申、彼義ハ元来、異国人ヲ日本ノ地へ上ケ、交易等相始メ、東照宮御定書ニモ有之ニ、 関東ニオイテ異人居屋敷ヲモ建渡候義、不届ニ存候、異国船ノ義ハ、勝手次第ニ討取申事ニ奉願、斯申出候上ハ、諸家ヨリ彼是申出候者於有之ハ、其者ヲ相手ニ致シ可申由ノ事、京都ノ面々ハ鬼神ノ様ニ威風ニ恐怖シテ、一言申者モ無之候事、

一当十六七日頃ニ、京都屋敷へ盛りニ上着有之候事、一軍用金ハ三十万兩ト申事、荷物等へ札付様ハ、薩州御用或ハ薩州軍用金ト記シ候札ヲ下ケ申候長持等、数多^力 参申候、

一当十八日頃、伝奏衆ヨリ江戸表へ、久世大和守御召シ早打下向ト申事、併シ御老中ノ内一人御召ト申事モ有^力 之由、

一禁裡ニテモ、薩州申出ノ義尤ニ被 思召、則チ江戸表へ当年ヨリ十ヶ年内、異国船打払候様被 仰出候事、右ハ薩州上京ト申沙汰ヲ以テ、遽ニ

勅命有之歟、

一薩州屋敷東洞院通錦小路下ル所ニ、毎日物見ニ參候処、
屋敷内ニハ仮小屋ヲ立、玄闕ニハ轡ノ紋打タル幕ヲ張
リ居、元氣ニ任セ、鉄砲稽古或ハ刀ヲ拭ヒ居申候、
一薩州ヨリ申立ノ義ハ、堂上方ニモ御心得違ノ御方御座
候間、(テカ) 関東ト一味相成候義不届ニ存候ヘ共、御小祿ノ
事故委細ニ不申出、以後ハ屹度 禁裏ヘ御忠勤相成候
様致シ度ト被申出候由ノ事、

但此義ハ、昨年 和宮様御下向ノ取持、且ハ前々ヨ
リ 関東最負ノ堂上方ヘ向、面当ニ被申候由、

一京都表ノ義ハ、諸国ヨリ武家等致逗留候義不相成候様、
今度ノ義ハ 勅命ニテ致逗留候義、御免ト申候事、

一彦根候、当三月上旬御上使トシテ上京有之、薩州ニハ
被沙汰ヲ幸ヒト、遽ニ国元出立、途中ヲ急キ相登候処、
彦根ノ出立跡ニ相登リ、残念ト申居候由、実ハ京都ニ
テ薩州ノ威勢ヲ為見度、且致面会 禁裡ノ御守護一味
為致候積ノ処、早々御上使相濟下向有之、大ニ薩州ニ
テ残念ナリト申居候事、

四月

第六

京師書簡抄

一当地ノ形勢風唱左ニ申上候、

四月十五日、薩州様御家老島津和泉ト申者上京、近衛
様ヘ參殿、表向ハ薩州様御姫様此度御同所様ヘ御縁組、
弥以御治定被成度旨ノ義ニテ、内実ハ何事ニ御座候哉、
御同所様ヨリ 禁中ヘ奏聞ニ相成候由、風唱御座候、
虚実ハ相分兼候ヘ共、外国打払ノ義、 叡慮被相伺候
旨、風唱仕候、且又此度西国諸浪人兵庫・大坂表ヘ相
集、彼是乱妨可仕旨風聞御座候趣、御所司代衆ヨリ伝
奏衆ヘ言上ニテ、大ニ当惑仕候旨ニ御座候、右浪人共
島津和泉上京ヲ慕ヒ、同人ヘ相頼候義等モ有之、依テ
和泉不承知ノ節ハ、浪人共上京仕、夫々歎願ノ筋申立
候趣ニテ、先以右趣意、如何様ノ義カ分リ兼候ヘ共、
和泉ヨリ内々申上候由ニテ、右浪人共取鎮、右和泉ヘ
被 仰付候由、伝奏衆ヨリ官家ヘノ御達等モ御座候事
ニ相聞ヘ申候、依テハ和泉只今ニ滯京ニ御座候、御所
司代衆ニハ不一方及大騒候由、尤折々浪人共押寄申候
事ニモ候哉、如何成義哉夜中大騒ニテ、既ニ御所司代
衆御家中ハ、甲冑・拔槍・鉄砲等ニテ、御役宅近辺備
被相立候、婦女、又ハ小兒等ハ町家風ニ姿ヲヤツシ、

江戸ニテホイ駕籠同様ノ駕籠ニテ、若州表へ被相帰、若州表ノ家中ノ面々、多人数昼夜ノ不弁、何レモ上京仕候風ニ御座候、扱々大噪可申様無御座候、全ク狐狸ノ所為カト被存候程ノ事ニ御座候、中々 禁中守護ハ、迎モ無心元相唱申候、薩州様ニテハ、当表右御屋敷近辺町家御買取リニ相成、御手広ニ御普請ノ由相聞へ申候、当地へハ千四百五人モ在留御座候由、其外大坂表・伏見表ノ御屋敷へモ、夫々人数被差登置候由風唱仕候、旧冬ヨリ白米ニテ四五千俵モ被相登候由、如何成ル事哉ト、米屋杯不審ニ存居候処、全ク此度ノ用意ト被存候、依テハ長在留ノ覚悟ト風唱仕候、且又過ル廿八日ニハ長州侯御上京ニテ、御縁家有栖川宮様へ参殿御座候由、何カ子細モ御座候事ニ風唱仕候、右ハ長門守様ニ御座候御屋敷ノ義、是又此度町家御買取ニテ御建増ニ相成候由、薩州様ト御同様之由ニテ、全ク御同腹ノ趣ニ風聞御座候、

第七

風説

一四月上旬ヨリ屢内説ノ通、兵庫津ニ細川勢、大坂ニハ毛利勢、伏見ニハ薩州ノ老臣島津和泉、何レモ固々ヨ

リ蒸気船ニテ入坂人数夥敷、何レモ闘戦ノ要具ハ勿論、京地屋敷向戰場陣所ノ行粧、昨十六日島津和泉九條関白殿へ罷越、夫ヨリ直ニ近衛殿へ罷出、御同所様ニ中山大納言殿ヲ始、議奏ノ面々参殿、御混雜不容易風ニ御座候、

一夷賊益気促不法相募、御国体ニモ拘り候間、此度九州・中国諸侯夫々申合、外夷征討ノ願ニ付、京師御警衛ノ義ハ、薩州家ニ被 仰付候様仕度、毛利・細川其外ノ諸侯人数追々上京仕候間、何卒外夷打払ノ 勅諭申受度トノ趣申立候由、右御^(返力)達ノ趣ハ、於関東モ追々申立候事情モ有之、武備充実・海軍訓練相整ヒ候迄ハ打払御猶予ノ義、御許容被 仰出候義モ有之間、一応関東へ 御往復ノ上、御治定ノ 勅答可被達トノ御沙汰ニ相成、依之久世大和守上京仕候様、 勅命相下リ候由ニ御座候、

第八

京師書簡抄

一前文略、島津某殿ハ四拾貳歳ニテ、当侯ノ御実父ノ趣、秀才賢明ト申事ニ御座候、右人金紋先箱対ノ道具ノ御行列ニテ、改テ御上京ノ由、近衛様へ参殿ノ趣、御供

人數ハ京地へ千人、伏見へ千人、大坂へ千人、兵庫表
蒸気船ニ三千人、都合六千人ノ趣、御上京ノ次第八今
ニ相分リ不申候、風聞ニハ交易不宜ニ付、公辺ニ度
々申立候へ共御取用無之候間、公辺ニテ打払難出来
候ハ、国主ノ面々引受払退ケ申候ニ付、何卒 御繪
旨ヲ頂戴ノ義、御願立ニ相成候由、

一 東洞院蛸薬師下ル町小森氏明屋ニ、御納戸方ト表札有
之、長持百七十棹有之、其向ニ旅中入用金トシテ金子
七箱、此分ハ長棹筵包ニシテ有之、一棹ハ凡二十貫目
余ノ様子ニ相見へ、当時ノ金目ニシテ、凡一万両モ入
有之ヤト見聞ノ者申聞候、

一 薩州ヨリ申立候趣、十六日ヨリ八日ノ間、所司代ヨリ
日延有之趣、江戸表へ伺ニ相成居候処、宿次急飛脚ヲ
以、馬乘二人早打參候趣、

一 和泉殿、近衛様へ御出ノ節、中山卿・三條卿其外両三
人何歎対談有之、暫時御引留有之、即刻 勅使ヲ薩州
屋敷へ被下トノ風聞ノ事、薩州・仙臺・長州・肥後・
肥前同志ノ事、外ニ阿州・土州其外沢山ニ有之候由、
一十六日、和泉殿近衛様へ御上り、何カ御願事ニケ条等
ノ義御聞込ニ相成、近衛様ヨリ 奏聞有之候処、諸公

卿衆惣參 内ニテ 朝議有之、近衛様ヲ以テ薩州へ
勅使、勅意ノ次第ハ、即刻関東へ申遣候ケ条有之候
間、和泉義暫時伏見へ引退、滞留差扣可申トノ由ナリ
トイフ、実ハ京屋敷ニ滞留ナリ、
一 薩州ヨリ、上書ハ何モ相変候儀無之、交易ニ付国弊ノ
事ヲ被申上候トノ事ナリ、

第九

大坂書簡抄

一 前文略、薩州家老島津和泉先日当地へ罷越候、以来兎
角物情騒々敷、先頃中ヨリ中川家・毛利家其外ノ浪士
ノ由薩州蔵屋敷ニ潜居、都合四五十人ト申事、然処右
島津和泉モ京都へ罷越、只今ニ滞在、京都ニテノ説ハ
何故ノ事ニ候哉、更ニ相分不申候へ共、右島津二條ノ
御城ヲ乗取候ト申事ニテ、殊ノ外騒々敷候処、無其義
靜ニ滞在有之候由、此節承り候へハ、京都ノ警固ヲ被
仰付候ト申事、兼テ諸藩御固被 仰付有之処へ、何等
ノ故ニ候哉更ニ相分リ不申、右島津此度罷出候ハ、江
戸表屋敷向取締ト申名義ノ趣ニ候へ共、其実ハ京都ヨ
リノ御内 勅ニテモ有之哉ノ風聞ニ御座候、
一 當時在京ノ薩人万事手厚、至テ穩ニテ内輪ノ動靜外へ

相願レ不申候由、

一長州者がガサツ至極ト申唱ニ御座候、

第十

風説

一薩州様御屋敷隣ノ豆腐屋忍ノ者ニ相成、或ハ日雇ニ入交、間者ニ入候由ノ処、被召捕吟味ニ相成候へハ、所司代ヨリ二人被申付、忍入候由申聞候事ニ相唱申候処、其後如何相成候哉相分不申候、

一京師ニオイテ、屋敷四方ノ町家売家ノ分、悉ク買取ニ相成申候処、凡一倍半ニ価ヲ増シ被申候由、東洞院錦町下ル所ニ日野屋徳兵衛ト申者有之、近来内輪不如意ニテ、改革ヲモ可仕相談ノ処、此度御憐愍ヲ以テ五拾貫目ノ沽券価ノ処、九拾貫目ニテ御買上有之、誠ニ家内ノ悦、親類ノ大慶、且日野徳ハ商業ニ勝手ノ場所ヘ家ヲ買、余ハ借財ヲ返シ、存外ノ大銀ヲ得、本手トナシ候事実事ナリ、同人ヨリ厚恩忘却仕間敷タメ、永代御出入被仰付、何ナリ共手足ニ叶候義ナラハ、如何様トモ相勤可申段歎願仕候処、神妙ノ心得ナリトテ、永代二人扶持被下置候、又錦小路東洞院東へ入ル処、同屋敷ノ東隣ニ二間半計ノ桶屋有之ニテ、貧家ニ候へ共、薩

州御屋敷不取建以前ノ旧家ニ候処、此度差上度段自分願出候処、四百八十金拝領仕候、此家ハ沽券ノ価八十金ヨリハ少シモ直打無之処、存外ノ福ヲ得、桶屋ヲ相止外へ移宅シ、安心ニ外渡世ヲ可致ト存居候処、薩州ヨリ夫ハ心得違ニ付、外へ参リ候共旧来業相改間敷、格別ノ旧家ニ付残念ニ被思召候故、永代五人扶持被下、別段ニ御出入被仰付、新規御買上ノ家屋敷ノ名代ヲ相勤可申様被仰付候処、ビツクリ致シ夢カ現カト、家内中難有涙而已ニテ、御屋敷ノ方ヲ朝夕拜ミ居候由、是モ実事ニ候、

一薩州家ニテ町屋御借受御相談有之者、最初ハ御断申上候者モ有之候へ共、此頃ニ成リ、了簡違ニテ申上候由ヲ以、御旅宿ヲ願出申候由、初ハ身重ノ方ハ一日五十疋、下部ハ老朱ト申御定ノ処、迷惑致シ居候処段々承候へハ、朝夕ハ湯漬、午ノ時計一汁一菜ニテ、炭・薪・油・米・茶等ハ薩州家ヨリ被下候ニ付、丸テ只取同様ノ事也トテ難有カリ、大切ニ心ヲ配リ、実意ヲ以テ相勤候故、薩州方ニテモ十分ニ休息被致候由、双方和合致シ、家来衆迄モ少モ無体ケ間敷ハ無之、屹度慎被居候ナリ、尤日々勘定ニテ貧ナル者ハ商売ヲ休、薩州家

ニテ家内安心致シ、其日ヲ送り申候、右様ノ所置有之候テ、人心帰服致シ、洛中・洛外ハ不及申、畿内近国迄モ薩州様ノ御陰ニテ世方直リ、夷船ハ打払ニ成、諸〔色カ〕□ハ下直ニ成申居候由、都・田舎共諸民ノ氣憤発致シ、薩州様ナラハ一命ハ少シモ不惜ト申、至テ平穩ニ人氣沈静ナリ、此度江戸ヨリ彼方登リ不申ハ、何レ六ヶ敷事有之可申候へ共、都ハ薩州様・長州様ノ御警衛故、枕ヲ高シテ寝ラレ候迎、少シモ氣ニ懸不申候、夫故米価モ引揚不申候、

一薩州ニテ多分錢ヲ持参有之、諸弘方小錢ヲ以被致勘定候ニ付、払底ノ錢薩州邸近辺ハ錢多ク相成、町人共大ニ悦ヒ申候、弘方ハ老分ニ付、老貫八百文ノ立直ヲ以払ニ相成リ、又宿ヲ致シ居候者ヘ日々錢ヲ払被下候ニ付、自然小錢多分ニ相成候故、薩州勘定方又ハ納戸方へ錢ヲ売ニ参リ候へハ、一兩ニ付八貫文ノ積ヲ以買入被申候、凡一兩ニ付八百文ノ利益有之候様取計被致候故、聊ノ事ニテ愚俗基善候様人氣居合候、

一和泉殿ハ秀才ノ由衆人申候、何分人才有之候哉、都テノ所置抜目ナク行届申候ニ付、薩州大明神扨ト衆人申居候ナリ、当時京地ニ薩州方ハ精兵千五百人程致滞留

候、高瀬川ヲ引船ヲ以テ、去ル四月中旬頃ヨリ今ニ運送絶不申、大砲凡百挺余御持参有之、其余鎗・鉄砲其數ヲ不知ト、又国元ヨリ蠟燭師ヲ多人數被連参、日々多分ノ蠟燭致出来、刀鍛冶・甲冑師并大工諸職人モ夫々召連被参候事、

一町家ニ止宿モ追々着卒多勢ニ相成候へハ難渋ニ付、東本願寺境内ヲ借受被申、逐日同所へ小屋掛致シ、引移被申候趣ニ相聞へ申候、

第十一

京師書簡抄

一此度薩州島津〔久光〕和泉・小松等上京ノ義ハ、先年以来心懸

居候事ト相見へ候テ、伏見へ數ヶ所地面ヲ求置、スハト云ハ、相手相成候様ニテ、此度初テ登リ申候由、且又当所御屋敷廻リ數ヶ所買求申候、其上当所ニテ御所向能々相心得候人物兩三人モ召抱置申候、私存知ノ人モ一昨年来被召抱罷在申候、依テ御所内堂上方ノ氣質ヲ、能相心得居候様子ニ御座候、長州侯モ同様南ノ方此方御屋敷側迄買取、屋敷広ゲ、其外洛東鳥部山下ト申所相求、屋敷ヲ立候様子ニ御座候、外諸侯ニテモ夫々工夫ノ由ニテ、無何ト御家来罷登申候風、又此度

ノ一件 官武三ツ四ツ入込有之、機密一々筆紙ニ難尽、
一 忒御面談申上度奉存候へ共、御同然ノ籠鳥、扱々心
外ノ事ニ御座候云々、

第十二

探索書

一 島津和泉一同被召連候人数式千有余ト相聞得申候、屋
敷内計ニテ間ニ合兼候故、町家御借受ニ相成候、右場
所堅通ハ(較之)小路通・四條通・錦小路通・蛸薬師通・六
角通・三條通・姉小路通、横通ハ境町通・高倉通・東
洞院通・車屋町通・烏丸通、右等ノ町屋御借受相成、
薩州藩何ノ誰ト表札ヲ打、高張提灯銘々自分紋付、役
之高下ニ寄幕ヲ張り、堂々タル有様ニ御座候事、

一 松平修理大夫殿御屋敷辺ニ乞食大勢居候処、右御国元
ヨリ御召連相成候由、問者ノ義見分ノ為ト相唱申候、
尤先達中座(江戸ニテ)唱へ候者共ノ内、何方ヨリカ問者
ニ被遣候由ノ処、兩人薩州ニテ召捕、直ク御国元へ被
相下候由ノ事、

一 島津和泉御召連相成候御人数共へ、此度ノ義ハ何分御
大事ノ事故、下々小者ニ至ル迄、京地ノ迷惑等不相成
様、屹度被仰渡候事ニ相唱申候、成程御屋敷へ出入見

聞仕候処、町家住居ノ者共抔ハ、余程心ヲ用ヒ居候風
ニ相見得申候事、

一 右同人此度上京ニ付、二十五万両程モ御持參相成候由、
米ノ義ハ何程ト申義相知兼申候へ共、日々ノ飯米皆佃
米ノ由、町家住居ノ者モ同様ノ事ニ御座候、

一 薩州ノ謀主、堀小太郎ト申者ニ御座候、同人并海江田
(信善) 武次・吉井中助等ハ何レモ人傑ニ御座候、
(友亮) 但本文海江田武次ト申ハ、有村次左衛門ト申テ、一

昨年上巳一件一味ノ一人ノ実兄ニ御座候、

一 薩藩ノ号令極嚴重、奴僕輩迄行届居候事ニ相見得申候、
物ヲ買ヒ候価ヲ論シ候様ノ事迄、嚴禁ト申事ニ御座候、
夫故数千人詰居候へ共、狼藉体ノ事更ニ無之風ニ御座
候、

(官武通記 圖書刊行会志にて校訂)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」
〔紙数六八枚〕の記載あり〕

目録

〔参考〕 官武通紀卷六

〔薩州始末二抄力〕〔第一から第二十二まで原編者省〕

第二十三

一 京師書簡抄

第二十四

一 探索書

第二十五

一 風説

第二十六

一 江戸書簡抄

第二十七

一 堀次郎不屈ノ所業有之候ニ付被仰渡候御書付写

第二十八

一 風説

第二十九

一 同断

第三十

一 同断

第三十一

一 島津三郎帰国ノ砌近衛様江致伺候候義ニ付御家来指

出候届書写

第三十二

一 探索書

第三十三

一 同断

第三十四

一 風説

第三十五

一和蘭陀佛蘭西兩國ノ船琉球江罷越候趣ニテ横濱致出

帆候云々ノ義ニ付御家来指出候書付写

第三十六

一嶋津三郎参

内御剣拜領被

仰付候義ニ付御家来指出候届書写

第三十七

一風説

第三十八

一京師書簡抄

第三十九

一風説

第四十

一京師書簡抄

第四十一

一同断

第四十二

一同断

第四十三

一琉球人持渡候唐物類以来何品ニ不寄勝手交易御免被

仰付被下度云々ノ義ニ付御家来指出候伺書写

第四十四

一嶋津三郎布告ノ書写

附

受書写

第四十五

一風説

第四十六

一同断

第四十七

一同断

第四十八

一嶋津三郎後見被仰付度云々ノ義ニ付被指出候御願書

写

第四十九

一故薩摩守殿江御贈官被仰出候御書付写

第五十

一琉球嶋江諸外国船渡来ノ義ニ付被指出候御届書写

第五十一

一先年於外櫻田水戸様御家来等及乱妨御仕置被仰付候者墓碑取建候義御有免被仰出候御書付写

第二

一風説

第五十二

第三

一松平修理大夫殿御国元御守衛唯今半途ニモ不至上京仕候テハ瓦解ノ姿ニ相成候間暫時ノ御猶予被成下度且ツ公方様御上洛ノ義當時節不可然云々ノ義ニ付嶋津三郎

一同断

第四

一同断

第五

御所江差出候建白書写

一同断

第五十三

第六

一青蓮院宮様御出格ノ訳ヲ以テ御還俗被

一同断

仰出度且ツ松平相摸守殿等御政事向江被致御關係候

第七

様云々ノ義ニ付嶋津三郎差出候建白書写

一同断

第五十四

第八

一風説

一同断

雑集

第九

第一

一同断

一井伊掃部頭殿御取計ニ寄テ徳川家ヲ奉欺遠血微官之

第十

松平左京大夫殿如キ一男ヲ以テ將軍ニ

一享保年中達上間候薩州大家并高調書写

宣下ヲ蒙リ候云々ノ義ニ付嶋津三郎ヨリ

御所江差出候建白書写

参考 官武通紀卷六

五七四 薩州始末二

第二十三

京師書簡抄

一薩此度ノ一挙、悉ク其臣堀小太郎企所ナリ、小太郎先年昌平学書生同窓四五年交深キ故熟知其事、天下ノ事成於一生ノ手、咄々怪事云々(編者曰、唯表面ノヲ見聞シテ、内情ノヲ知ラサルノ説ナリ)

一今日聞或人ノ説、堀小太郎初メ忠右衛門ト称ス、去年十二月中薩之上邸權祝融氏(編者曰、事實ニ近シ)是小太郎所謀、欲以使国侯不能為来参府也、然則上京師依中山卿、密説勤王大義、卿訝而不容、再三再四論談不已、卿遂是其説、即密奏

主上、叡感云々、則趨テ到、薩謀其事ト云、

第二十四

探索書

一薩藩堀小太郎ト申スモノ元書生ニ御座候処、此度島津三郎ノ所為、皆小太郎ノ策ト相見得、当時昇進留主居被申付候由ニ御座候、同人議論ハ三百年來太平無事ノ弊、何事モ因循苟且ニ流レ、士氣相振ヒ申サス、此分

ニテハ如何様御制導御座候共、更ニ御用ニ相立申間敷、ヨリテハ天下ノ耳目ヲ一新候外有之間敷、其上ニテ鎖国ナリ開国ナリ相定候方可然、左候得ハ即今兵端相開キ、人目ヲ一新仕候様申立候ヨシ、其策尤モノ様ニハ候得共、実馮河暴虎ノ所為ニテ、日本ノ一大事ニ相拘リ可申、長大息ノ事ニ御座候、

第二十五

風説

一薩州留主居堀小太郎ト申スモノ、先日ヨリ大目付大久保越中守殿(忠寛)江罷出候由ニ御座候、始メ罷出候節、此度島津三郎以勅命在京被

仰付候旨ヲ誇候様口氣ニテ、公然ト御話シ申上候得ハ、越中守殿御答ニハ、徳川家滅亡後ニ候得ハ、右ノ次第至極御尤モノ事ニテ、天下ニ相誇候テモ宜敷可有御座候得共、未タ徳川家當時ノ姿ニテ罷在候得ハ、右様ノ事天下ノ為メニ相成候哉不相成候哉、且ツ又誇候事ニ可有之哉、慎居候事ニ可有之哉、拙者共如何共申兼不候ト被申、小太郎モ大ニ挫ケ候様子、其後罷出候テモ議論尽ク相違ト申事ニ御座候、尤モ大久保殿ハ當時英

明ノ人ニテ、此度御側御用御取次ニ御拔擢ニ相成申候、
(編者曰、大久保殿ノ答弁事実ナルヤ否ヤ信シ難シ)

第二十六

江戸書簡抄

一前文略、堀小太郎江先年一兩度出会仕候モノニ付、此
度参訪仕候処、不相知者ノ如ク応接仕候、且ツ同行會
藩秋月^(風本)悌次郎義ハ、兼ネテ懇意ノモノニ御座候処、是
レ又知己ノ取扱ヒヲ以テ応接モ不仕、何分煩忙ノ体ニ
テ相厭ヒ候風ニ相ミヘ候而已ナラス、殊ノ外狼狼仕更
ニ落付無之、如何様ノ義ニ候哉相分兼候得共、推察仕
候ニハ何ソ議論等有之候テハ、嶋津三郎ノ奸謀相顯レ
可申トノ所存ニテ、諸事相隠シ居候様ニ相見得申候、
其体甚怪敷事共ニ御座候、其節ノ談話ニ私事私ニ越前
侯江拜謁セシヨシ申候、其心底ヲ察スルニ、私ニ拜謁
シテ何歟奸計ヲ施サントノ事ナラント存候、又談ニ水
滲數人度々相尋ネクレ、色々頼事有之、何レヲ主ト致
シ候テ可然哉、只今ニ正邪決兼ネ候ヨシナリ、右姓名
等何レモ相隠シ漸不申候、

一右小太郎義京師ニ於イテ開国ヲ申唱へ、江戸ニテハ攘
夷ヲ申唱へ候訳ハ、江戸表開国仕、夷狄取扱兼候様罷

成候節、京師江其段申立、関東ノ權ヲ奪ヒ候所存ト相
見得、是レ又奸謀ノ所置、永井雅楽^(時實、長州藩士)ニモ相優可申トノ
ヨシニ御座候(編者曰、永井ト比較ハ当ラスト云ヒ難シ)

第二十七

堀次郎不屈ノ所業有之候ニ付、被仰渡候御書付写

松平修理大夫家来

元小納戸留守居役

堀次郎

右ハ於京都浪人ヲ為騒立、其外对公辺不屈ノ所業有之、
屹度モ御沙汰可有之処、格別ノ訳ヲ以テ、修理大夫手^(島津茂久、薩州藩士)
限嚴重取計可申付被仰渡之、

八月三日

但次郎義ハ元忠右衛門ト称ス、中頃小太郎ト相改メ、^(伊左衛門)
^(編者曰、文久二年四月改名)

追々留守居勤仕中、次郎ト相改候由、嶋津三郎差
図ト申事ニ御座候、

第二十八

風説

一嶋津三郎謀主、薩州侯留守居堀小太郎義、国元蟄居被
申付候由、即晚直ニ屋敷引払候事ニ相聞得申候、右ハ
脇坂閣老ノ雄断ノ事ニ相唱へ申候、^(安宅)

一同人事、当五月頃ヨリ留守居被申付候ヨシ、四五年以

前マテハ書生ニテ、御当地へ出懸所々徘徊致シ居リ、

近頃三郎ノ為メニ京地辺周旋仕候モノノヨシ、出役ノ

頃ヨリ専ラ風聞有之モノ、ヨシ、尤モ此度ノ一件、三

郎第一ノ謀主ノ事ニ相聞得申候事、

一 一説ニ同人不届ノケ条、公辺江御伺ニ相成候処、五ヶ

条ノ書付被相渡候由、其内ニハ甚タ不軽ノケ条モ有之

候趣ニ相聞得候得共、実否不相知候事、

第二十九

同断

一 堀小太郎ノ義、去ル三日国元江遣シ候由、右ハ公辺ヨ

リ国許江差下シ、嚴重可申付旨御沙汰有之候事ニ付、

薩ヨリ何ノ次第二候哉ト伺候処、五ヶ条有之何レモ申

開不相成候由、尤モ死罪ノ廉モ有之由シ、子細ハ委曲

相知レ兼候得共、三郎ヲ薩侯ニ致シ候義等取計ヒ候事

抔モ、全ク小太郎了簡ニテ、周旋致シ候由ニ相聞得申

候、

一 右小太郎国江遣シ候ニハ、表向陸地ノ振ニテ、内実ハ

船ニテ差下シ候由、一体国元モ種々ノ模様六ヶ敷処、

此度ノ義等ニテハ、一國愕然ノ由ニ相聞得申候、

第三十

同断

一 八月四日、(編者曰、中右衛門ノ誤)中山治右衛門義中務大輔宅江罷越候節、堀

小太郎仕置ノ義承リ候処、国元江差遣取計可申、尤モ

船路国許江可差遣旨申聞、昨五日嶋津登義罷越候節同

様ノ義承リ、出立日限不都合ノ義申立、殊ニ陸路国元

江可差遣旨申聞、兩人区々ノ義申聞候段、畢竟去ル三

日相違書面ノ趣等閑ニ相心得、取調方不行届ノ義可有

之、以テノ外ノ事ニ候、尤モ一昨日国元江差遣候趣申

聞候得共、只今ニ不差遣候由(編者曰、実ハ大久保市蔵カ

木屋へ潜居セシメタリ)、弥々遅々致シ候ハ、小太郎義呼

出シ可遂吟味候間、其旨屹度相心得早々取計可申候ヨ

シノ事、

第三十一

嶋津三郎帰国ノ砌、近衛様へ致伺候義ニ付、御家

来差出候届書写

一 修理大夫実父嶋津三郎義、此度罷下リ候節京都江立寄、

近衛殿江致伺候候答ニ申聞候、依之此段御届申上候、

以上、

松平修理大夫内

八月十八日

西 筑右衛門

第三十二

探索書

一島津三郎殿明後二十一日、(東京都港区)芝高輪薩州様御下屋敷発駕

相成候由、

勅使大原卿二十二日御発足ノ由、向フノ者ヨリ申伝ニ

御座候事、

八月十九日

第三十三

同断

一二十一日嶋津三郎発足ニ付、神奈川奉行ヨリ前日各国

コンシユル江申聞候ハ、薩州ノモノ手荒ニ付、明日ハ

遊歩不申様申聞候処、承知ニテ夫レノ達シ可申ヨシ

ニ付、尚更奉行ヨリ横濱門番江敷敷達、二十一日ニハ

一切夷人ヲ出シ不申様トノ事ニ候、然処当日日曜日ニ

テ遊楽ノ日故、英商夫妻并ニ外二人凡テ四人、馬ヲ日

本人ニ牽カセ門ヲ出シ置、船ニテ外ヨリ上陸、大師河

原江遊行ノ処、生麥村ニテ三郎ノ行列ニ出逢、何敷下

馬ニテモ為致度風ニテ、何敷申内、(編者曰、其ハ八九分)先供二十人程取巻

直ニ切落シ候ニ付、一人即死、三人深手ニテ逃ケ去候

処、婦人ハ一番浅手ニテ横濱江乘返シ候ニ付、半時程

過英人式百騎程上陸、三郎ヲ追ヒ候処疾ニ逃去候ヨシ

ニ付、夫形横濱江引取彼是議論ニ相及ヒ、明日大原卿

神奈川泊ト承申候、右復讐トシテ大原卿ヲ打取可申ト

ノ評議モ有之候事ノ由、

扱二十二日、大原卿御発足品川江御出ノ節、神奈川ヨ

リ右ノ始末申来、俄ニ品川御逗留相成、(原註、永井主水正殿ノヨシ)京都町奉行ヲ以

テ木曾路御通行相成候様ニト願申候由、且ツ三郎ハ英

人ヲ切り、直ニ程ケ谷江着候処、異人追ヒ懸候義ヲ承

リ、待受一戦ノ積ノ処不来候ニ付、其夜戒嚴八ツ時過

キ発足、二十二日大磯泊ノ筈ヲ小田原江越、二十三日

箱根ヲ越シ候テ致逗留候、

扱三郎ヨリ大原卿江申上候ニハ、矢張東海道御登可然

トノ事ニ候、仍リテ昨日マテ品川御逗留ナリ、長州ヨ

リモ使者ヲ以テ東海道御登ニ候ハ、警衛人数差出候

様申上手当致シ、少々品川江モ差出候事ニ候、薩州屋

敷ヨリモ人数差出シ候ヨシニ相聞得申候、

一英人此節追々横濱江廻来居候、軍艦七艘居候ヨシ、右

故式百騎程即時ニ致上陸候事ノヨシ、扱上陸ノモノ横

濱江引揚申候後、将卒議論ハ殺害モ余リ度々ニ候故、

幸ヒ軍艦モ来居候間、直ニ此七艘ニテ江府江押懸可申事ノヨシ、コンシユル等申候ニハ、江戸江押懸ルハ今日ニモ限ラス候、上海江飛脚遣シ候得ハ、軍艦モ十日以内ニ參可申候間、弥江戸江懸リ候ナラハ、十分軍艦ヲ備ヒ候方可然候、去リナカラ日本政府何ト申候哉兎ニ角懸合ヲ付候後ニテモ、然ルヘクトノ事ノヨシニ候、一生麥一条能々承札シ候得ハ、英人ヲ切候始末、全ク三郎ナリ、

右ハ大名ノ通行、惣テ宿々ハ行列ヲ為シ、其外ハ切レノニ相成候モノニテ、三郎行列モ同様ノヨシ、扱先キ供一ト組先江參候節、夷人四人ハ道脇ヲ通り抜ケ、無間モ三郎ノ行列江通懸候処、折節三郎小休所江立寄(編者曰、生麥立テ邊)候所ニテ駕籠ヲ卸シ、近侍四五十人致下座居候脇江、夷婦先江立来候ニ付、一人立テ其馬ノ口ヲ取候得ハ、其俣馬ヲ扣ヘ居候処、式番目ノモノ右ヲ乗越シ、惣下座ノ内江乘リ入ラントイタシ候ニ付、又々四五人立テ取押ヘ候折、三郎駕籠ヨリ出テ右ヲ見候否、斬テ仕舞ヘト声ヲ懸候(編者曰、巷説)ニ付、近侍ノ内ニテ直ニ抜刀切懸候処、夷人ハ腰サシ取出シナカラ、肩先ヨリ被切馬ヨリ落候ニ付、婦人ハ其始末ヲ見居候処、跡式

人一同逃出シ候得ハ、何レモ切懸候ニ付三人共手疵ヲ負ヒ候ヨシ、婦人ハ鬢先ノ方江疵負ヒ、横濱ヲ指シテ逃ケ候処、途中ニテ二度致落馬候由、

扱右婦人証人ニテ委細彼ノ方ヘ申立、駕籠ノ内ノ人致差図候由無相違ト申スコトニテ、英人ヨリ是非三郎ヲ出シ候様トノコトナリ(編者曰、全ク推量説ナリ)

扱又彼方議論ニ琉球ヲ取り、直ニ薩州ヲ討候方可然トノ評論モ有之候ヨシニ候、然ル処コンシユル等はレ以テ取押ヘ、兎ニ角政府ニ懸合候得ハ、何レト歎形カ付可申、其上ニテ可然ノ訳ニ相成候由ニ御座候事、

委細ハ薩州記事ニ載ス、依リテ略之、

第三十四

風説

一去ル二十一日嶋津三郎帰京ノ節、神奈川近辺生麥村ト申ス所ニテ、夷人ヲ殺害仕候義ハ、夷人ヨリ敢テ無礼等仕候訳ニハ之レナク、却テ夷人ノ方ニテ、三郎ノ行列ヲ妨ケサル様相避ケ候ヨシニ候得共、供方ノモノ俄ニ左右ニ張り、右夷人ヲ中ニ入レ、強テ無礼ノ様申唱ヘ殺害仕候ヨシ、其所為所謂乱ヲ醸モスノ魁トモ申スヘク、実ニ可惡所置ト専ラ風唱ニテ御座候事、

一 島津三郎、江戸表ニテ諸事失望ニテ帰京相成候得ハ、
京着ノ上ハ如何様ノ義相企候哉相知不申、幕府ニテモ
御心配ノ様子ニ相聞得申候事、

一 嶋津三郎帰京ノ節、堀小太郎ヲ風呂敷江包ミ内々召連
候ヨシ(編者曰、笑フヘキノ風説ナリ)、又一説ニハ、船
ニテ召連候由ニモ唱申候、何レ同人蟄居ノ義、幕府ヨ
リ被仰出候得共、三郎其命ヲ不受、内々ニテ相用居候
風ニ相見得申候事、

第三十五

和蘭陀・佛蘭西兩國ノ船琉球へ罷越候趣ニテ、横濱
表致出帆候云々ノ義ニ付、御家来差出候書付写(編
者曰、真書ナリ)

一 和蘭陀・佛蘭西兩國ノ船、此度琉球へ差越候趣ニテ、
横濱致出帆候由、同所ヨリノ出帆ニ付テハ、定メテ公
辺江伺ノ上差越候義ニモ可有之、何様ノ筋ニテ相越候
哉、万一御国威被相汚候様ノ義共有之候テハ不相濟、
不容易次第、殊ニ嘉吉元年以來六百余年及連綿屬国ニ
付、彼是以テ深ク心配仕候、向後琉球江相付候事柄ハ、
御内意其時々御沙汰為御伺被下度、公辺ノ御所置卜、
薩州并ニ琉球ノ所置若致齟齬候テハ、後患致出来候義

ハ頭然仕候義ニ付、每事ニ致承知候様仕度、兼テ此段
申上置候、以上、

松平修理大夫内

閏八月十五日

西 筑右衛門

第三十六

嶋津三郎參 内、御劍拝領被

仰付候義ニ付、御家来差出候届書写(編者曰、真書ナ
リ)

一 嶋津三郎事此節下向ニ付、近衛家江參殿仕候段ハ、御
届申上置候通ニ候、然処去ル七日同所江致參殿候処、
暫時滯京候様被仰渡承知仕、同所屋敷江滯在、其段御
所司代様江御届申上置候処、同九日參

内仕候様、議奏衆御言伝ヲ以テ蒙

御内勅候得共、右等ノ義ハ屹度御規格モ被為在可申、
誠ニ不容易事ニ付、公辺江奉伺御差圖ノ上ナラテハ、
參

内難仕趣再応堅御断申候処、尤モノ筋ニハ候得共、公
辺ノ処ハ伝奏衆ヨリ、程能被仰達可被下候間、是非參
内可仕旨強テ承知仕、此上御辞退モ難仕御受申上、是
レ以テ御所司代様江御届申上、參

内仕候処、伝奏衆御庇江御誘引不容易蒙褒

勅、御剣一振、議奏中山大納言様御取次ヲ以テ、拜領

仕候ニ付、右之趣御届可申上旨申越候、此段申上候、

以上、

松平修理大夫内

閏八月十八日

西 筑右衛門

第三十七

風説

一京師模様、先年ヨリ薩州近衛殿江金銀ヲ遣ヒ、主上江

モ内々奉納候等有之、十分ニ手ヲ入レ置候ニ付、三郎

ノ事誠ニ通り宜敷、トテモ長州ノ論ニテハ押通不相成

模様ノヨシニ相聞得申候(編者曰、尤モ無根ノコトナリ)

一薩州ノ勢京師ニテ弥盛ニ相成、長州ニテ只今マテ拮抗

仕候得共、トテモ相叶ヒ申サス、依リテ一先ツ相和シ

候方、然ルヘクト一決仕、遂ニ同腹ノ様罷成候ヨシ風

唱ニ御座候事(編者曰、事実ノ真偽ヲ判スルニ苦ム)

一薩・長申立候義異同有之候、薩ハ堂々正々事ニ寄り、

徳川家三百年事業此度所置不宜候ハ、罪ヲ鳴ラシ、

討罰ニモ相及フヘキノ勢ニ候処、

主上敬慮人心一和

公武合体ヲ以テ被

仰渡候ニ付、右

聖旨ヲ奉承ノ心得ト相成候由、其内長州出張、是レハ

江戸ニテ閣老申合セ、専ラ調行候説、兎角無如才ニ出

懸候ニ付、藩中義徒不満、薩モ不同意ト相見得、其勢

ヒ不得(マコ)不借、自然同説ト相成候由ニ相聞得候(編者曰、

巷説ナリ)

第三十八

京師書簡抄

一薩藩始メヨリ待外夷ノ義ヲハ、第二義ト申候テ不相唱、

蓋国内君臣上下ノ名分不相立候テハ、外夷ノ事ニ手ヲ

出シ候事万々不相叶ノ旨意、長州ハ開国ハ航海開国ト

相唱ヘ、此事順逆ノ異同有リ、尤モ薩ノ極意、此節ノ

時勢五大州ノ形勢心得不申、暴ニ打扨ト申ス義ニハ有

之間敷、去リナカラ三百年來太平媮情ノ病弊一振仕候

ニハ、砲声一発不仕候テハ何事モ振起不仕、此上ハ外

夷是レマテ跋扈失礼ノケ条極論仕、彼如何程申来モ一

歩モ引ヲ不取、断然一戦、此内ノ小々勝負ハ不必問、

愈六十六州人氣奮発ノ機ニ乗シ、長州ノ航海開国ノ論

ニ仕候手段哉ニ被存候、長州ノ航海説

主上叡慮ニ不相叶ト申スハ、畢竟此等ノ事哉ニ被存候、尤モ只今ト相成、長州色々分疏有之、薩ト合体

公武御間柄周旋ト相成候上ハ、同一論ニ相成候哉ニ被存候、去リナカラ此事ハ小生傍觀ノ管見ニテ、確説ト申スモ未タ承申サス、将又此事

廟算第一番ノ先着ニ御座候間、必々御見込ノ程御研究モ可有之、小人共心得ノ為メ被為仰明候様偏ニ奉願候、尤モ閣東政府ニモ愈薩州ノ論ニ雷同ト奉存候、

第三十九

風説

一長州侯ノ説、薩説ニ被押付、両藩一致ノ説ニ相成、ト

テモ一戦ノ上ナラテハ士氣振ヒ兼候ト申事ニ押付候ヨシ、

春嶽様モ薩州同物ニ相聞得、誠ニ天下ノ危急旦夕ニ迫リ候義ニ有之候、且ツ諸侯ノ參勤御緩メ可被成由等被仰出候ハ、一応難有様ニ候得共、徳川ノ御威望弥相衰ヘ可申、右何レモ春嶽様ノ御処置ト申スコトナリ、左

候得ハ天下瓦解目前ニシテ、三百年來太平ノ余リ、戦國ニ相成候時ハ、五十年七十年モ懸リ不申候テハ、新將軍出懸太平ヲ見可申様有之間敷、其間ニ外夷ニ乘取

ラレ候節ハ如何成行可申哉、薩ノ挙動弥悪ムヘキ事ニ御座候、是非大勇力ノ諸侯力ヲ尽シ、泰山ノ安キニ置キ、自然

叡慮ヲ奉安候者無之候テハ難成御場合ト人皆渴望、一日ヲ千秋ト待チ居候事ニ相聞得申候、

第四十

京師書簡抄

一薩州ヨリ嶋津右近ト申ス人、同勢五百人程ニテ過ル三日

日上京、相國寺ト申ス寺借受、滞留罷在候由ノ義モ相聞得申候事、

第四十一

同断

一御当地ノ模様、薩州伏見屋敷ノ留主居本多彌右衛門ト

申スモノ、本間精一郎等ヲ遣ヒ、何レニモ手ヲ廻シ候

ニ付、禁中ノ万機皆本多ノ手ニ有之姿ニ相成居申候
(编者曰、事張大ニ過ク)、依リテ此上不容易事ニ罷成可申トノヨシニ相聞得申候、

一嶋津三郎殿明二十三日帰国相成候由、御当地警衛トシテ、右近ト申スモノへ人数相添残シ置候由、尤モ以後御用ハ長州江被仰付度事ニ申上候由、

第四十二

同断

一 嶋津三郎義ハ先月中致帰国候由ニ御座候得共、一説ニハ大坂屋敷在留罷在候由、実否相分兼申候、

一 叔三郎義ハ、京地ニテハ賞數仕候様相見得申候、其子

細ハ三郎上京ノ節、土産ト称シ屋敷近傍ノ町人・小兒

ニ至ルマテ金子等相与へ、且ツ旅宿ノ価モ一人ニ付銀

五匁弘ニ致シ、諸事右ニ准シ黄金糞土ノ如ク施与シ、

右ニ付俄ニ名譽ヲ得候様子(編者曰、全ク無実)、尤モ

公家堂上方江モ許多ノ黄金ヲ以テ取入候故、当分之所

ニテハ、何事モ薩ナラテハナラヌト申スコトニ相成申

候、併シ是レ皆姦謀ノ術策ニテ、終ヲ全フ仕候訳ニハ

参リ間敷、所謂陳勝・呉廣ノ所為ト外相見得不申候、

(編者曰、當時ノ勢威外面ヨリ見ル処或ハ然ランカ)

一 薩州ニテハ攘夷ヲ主トシテ、琉球交易ヲ復シ度見込ニ

テ、実ニ惡ムヘキコトニ候処、一橋・越前兩侯ノ御論

ニテ、少數注文違ヒ候ヨシニ相聞得申候、

第四十三

琉球人持渡候唐物類、以来何品ニ寄ラス勝手ニ交易
御免被仰付被下度云々ノ義ニ付、御家来差出候伺書

写(編者曰、真書也)

一 琉球人共持渡候唐物類、以来何品ニ寄ラス勝手ニ交易

御免被仰付被下度、当七月脇坂中務大輔様御勤役中奉

願置候処、今以御沙汰無御座候処、右ハ其節ノ書面ニ

委細申上候通、

皇国江唐物渡来ノ基本ハ、全ク琉球尚寧王取扱ヒヲ以

テ是レマテ致連続候次第、殊ニ薩州江渡来候ヲ、長州

江被差廻候様相成候訳柄ニテモ有之、猶ホ又方今於横

濱等町人・百姓共ニ至ルマテ、諸人勝手次第交易御免

許相成居候ニ付テハ、別テノ義往古仕来ノ通、以来勝

手次第ニ交易御免被仰付被下度奉願候、近来長崎御商

法方御差障ノ趣ヲ以テ、品々被仰渡候趣モ御座候得共、

当今ノ時勢殊ニ横濱往来毎々ニ、外国人共琉球江立寄

候ニ付、旁以テ彼是甚敷拒候テハ、自然人氣江モ差響

相靡候様ニモ成候テハ、第一

御国威ニモ相拘ル義ニ付、孰レニモ古来仕来、別段ノ

訳ヲ以テ出格ノ御評議被成下、当節速ニ御免被仰付被

成下度、尚又此段御内慮申上候、以上、

九月十八日

西 筑右衛門

松平修理大夫内

第四十四

嶋津三郎布告之書写(編者曰、真書ナリ)

附

請書写

一我等事、先般

御内勅ヲ奉戴シ、関東江出府、公武ノ御為メ御微力ヲ
尽シ、再ヒ上京及復命候処、不図モ先月九日參
内被

仰付、議奏衆御取次ヲ以テ不容易奉蒙褒

勅、殊ニ重キ御品マテモ拝領被

仰付、誠以テ武門ノ冥加不過之事ニ候、全体我等素志
ハ、

皇国内外ノ大患不堪傍觀、且ツ齊彬公御遺託ノ御旨奉
紹述度赤心ニテ、事ノ成否ヲ不顧、忌諱ヲ侵シ、犬馬
ノ勞ヲ致シテ主臣ノ分ヲ尽シ候マテノ趣意ニ候処、格
別ノ奉蒙

殊遇候義不存寄事ニ候、且ツ於関東モ一橋・越前登用

ニ相成、尊

王ノ道迫々相立候勢ニテ候得ハ、暫奉

勅ノ厚薄所置ノ得失

觀覽被為在度候ニ付、大略御治定相付マテノ間、滯京
仕候様再三承知イタシ候得共、御断申上及帰国候訳ハ、
必竟攘夷ノ義先々ヨリノ

觀慮ニ被為在、兎角此末ノ時世大事ノ時ニテ、国家ノ
本治定不相成候テハ、時機ニ応シ十分ノ勤

王モ難相叶候得ハ、富国強兵ノ術大急務ト存候、尤モ
於関東六月朔日且先月被仰出候趣有之ニ付、屹度此度
国政ノ大体相立、人心致一和候様变革ニ及度候間、各
中ニモ不容易時世ヲ弁、上ハ

朝廷ノ御趣意ヲ奉シ、下ハ我等ノ誠心ヲ通徹シ、忠直
ヲ尽シ其職ヲ勤メ、国家ノ柱礎ト相成候様心懸ケ、尚
ホ熟慮ノ上存寄りノ程モ致承知度事ニ候、且ツ又上書
ノ義ハ御先代様被仰出置候得ハ表向致上書、臣子当然
ノ事ニテ不苦候間、猶又各中勤考有之、國中一統趣意
致貫徹候様有之度存候事、

戌九月

御別紙之通被仰出、我等ニ至リ別テ感伏涕泣不堪候、
各中深御趣意奉汲受、粉骨碎身屹度其詮相立候様精
力ヲ尽シ、丹精ヲ抽テ、三郎様ノ御趣意ヲ奉助、我
等ノ不肖ヲ補ヒ、国家ノ良臣ト相成候様有之度候事、

第四十五

風説

一薩州ノ議論、攘夷ハ速ニ不相成趣、

御所江申上候由、扱前議ヲ變シ候義何等ノ為メカ、不分ノ事ニ相唱ヘ申候、

一薩士ノ談ニ、関東自今以後、何事モ

勅意御遵奉ノ上、鎖國攘夷一日モ早ク被行候様、御周旋申上候積ニ候得共、列藩ノ武備未充実不仕候内、破約攘夷ハ如何御座候哉、先ツ富强ノ策ヲ建候上ハ、攘夷ト申ス議論江帰着仕候様子ニ相成候由、

一富国強兵ハ当世ノ急務、且ツ戦鬪ノ要器ハ大小砲ニ若クハナク候ニ付、集成館江御差向金此度十方両相下ケ、必用ノ銃煩早々鑄立可有之、尚ホ不足ノ義ハ追々可相渡、且ツ国産富饒手宛金ノ義不日相渡候間、充分ニ取計ヒ有之候様、先月中申渡ニ相成候事ニ相聞得申候、

第四十六

同断

一松平修理大夫殿ヨリ当閏八月中、嶋津三郎義上京ノ節、

御太刀拝領被

仰付、為御礼

禁裡江当新米ニテ壹万石御献米被成上度被相願、如御

願被

召上旨被

仰出候由ニテ、右米伏見御蔵屋敷ヨリ、

御所御米蔵江、去月二十八日頃ヨリ運送罷成候事ニ相聞得、尤モ右御献米ノ内三千石御備ニ罷成、残石ノ内伊勢春日八幡・上下加茂江式百石ツ、稻荷・松野・平野・北野江五拾石ツ、泉涌寺江百石御献納被成上、外堂上方・官家不殘御配分被下置候由ノ義モ相聞得申候、

十月五日

第四十七

同断

一薩州ニテ此頃米一万石献米被致候由ニテ、市中車牛ニテ運送、薩州献米ト申堂々タル板札ヲ每車ニ相立、如何ニモ人目ヲ驚カス程ニ御座候、風唱ニハ朝四暮三ノ術ヲ以テ人心ヲ得候計策ニ可有之、有志ノモノ窃ニ歎笑仕候(編者曰、捏造ノ説ナリ)様子ニ御座候、

一薩州家老ノヨシ小松常刀ト申スモノ、先日爰元着ニ罷

成申候処、唯一夜滞留ニテ直ニ関東江下向仕候、其趣

意ハ、八月中嶋津三郎家来ノヨシ林喜左衛門ト申スモ

ノ、生麥村ニテ夷人ヲ殺害仕候故、同人ヲ早々関東江

差下シ可申旨、幕府ヨリ頻リニ申来リ候ニ付、右一条

ノ為メ、外夷軍艦等差向候事ニ罷成候ハ、薩国挙テ

本望ノ所ニテ、聊モ不苦事ニ御座候、右喜左衛門義ハ

如何被仰渡候トモ、決シテ差出候事相成兼候段申立候

積ニテ、早々下向仕候様子ニ相聞得申候、

第四十八

嶋津三郎後見被仰付度云々ノ義ニ付、被指出候御願

書写

一私家督以後実父嶋津三郎事、国政向万端致心添精勤ノ

趣達台聴、参府ノ上ハ国許政事向猶ホ厚ク相心得、万

端行届候様可取計旨御内沙汰モ被為在候ニ付、方今ノ

時勢品々心配ノ筋モ有之候ニ付、後見被仰付被下度旨、

先達テ御内意申上置候通、三郎江表向後見被仰付不被

下候テハ、同人義内実故薩摩守臨終ノ砌、故大隅守ニ

ハ老体ニ相及ヒ、私儀ハ未タ若年ニ付無心存候哉、

国政向等ノ義細カニ三郎江遺言仕置候義御座候ニ付、

同人義モ難黙止、是マテ抛身命国政向万端心添致シ、

精勤仕義ニテ、領内中一統致帰服、人氣居合方モ宜敷

候得ハ、後見ノ義公辺ヨリ被仰付不被下候テハ、難黙

止訖合モ有之、不得止御内意申上候義ニ御座候、尤モ

私義近々発足仕候ニ付、留守中ハ猶又万端厚ク不致指

揮候テハ難叶御座候間、何卒格別ノ御評議ヲ以テ、此

節三郎江後見被仰付被下度、猶又奉願候、此段御内意

申上候、以上

十月十五日

松平修理大夫

第四十九

故薩摩守殿江御贈官被仰出候御書付写(編者曰、真書ナリ)

ナリ)

松平修理大夫

先代薩摩守存生中、為国家抽丹誠及病末候節、三郎江

遺訓ノ義共達

叡聞、

御感不斜候、家例モ有之候間、格別之

叡慮ヲ以被追贈權中納言從三位旨、京都ヨリ被

仰進候ニ付、

叡慮之通被仰出之、

十一月十一日

第五十

琉球嶋江諸外国船渡来ノ義ニ付、被指出候御届書写

(編者曰、真書ナリ)

一私領分琉球国ノ内那覇郡当閏八月十三日、デニフレックス号佛蘭西国蒸

氣船壳艘御碇候ニ付、役々差越来着ノ次第相尋ネ候処、

人数式百人乗組、江戸・横濱ヨリ致出帆候段申聞、総

理官江逢度旨、乗頭申出候ニ付致面会候処、本国惣大

将ノ命ヲ受ケ、日本并ニ呂宋・琉球江渡、約束違背檢見

ノ為メ致渡来候、取守候哉ト相尋候ニ付、守居候段相

答、且ツ此地天主ノ道理信用無之候間、逗留ノ仏人本

国江帰り、其段致伝達呉候様申通、逗留ノモノ兩人共

承引仕直ニ引取り、日本江差渡候段申聞候ニ付、此義

国中一同深願ノコトニテ、故天主教ノ義、当地人心不

帰向之段、猶又事情旁申述置候処、即ち逗留仏人共引

取候用意ト相見得、家壳弘呉候様申出候ニ付、相当ノ

代銀相渡候処、琉球江壳渡候、以後仏人等不相構トノ

証書、差出候ニ付受取、役々罷帰候、然処同十九日、

逗留ノ仏人式人、本船江即乗り致出帆、戌亥ノ方江乘

行候、且ツ又同月十六日、阿蘭国ノ蒸氣船壳艘致渡来

候ニ付、子細相尋ネ候処、人数式百人乗組、横濱ヨリ

致出帆候旨申聞、約条ノ義ニ付、国王江面会イタシ度

申出候ニ付、右件ハ官人前ニテ致取扱候ニ付、何篇総

理官可承旨申達致面会候処、未ノ年約条ノ趣、本国并

ニ政事官人江相達候処、別テ相悦ヒ、弥被行候様申聞

候、約条通ノ義ハ可取守段相答候、左候テ石炭并ニ用

水所望申出候ニ付、石炭ハ無之旨相断リ、薪水相与ヘ

候処、同二十五日出帆、未ノ方江乘行候、将又九月五

日アメリカ国商船一艘渡来、乗頭等致上陸候ニ付、役

々致面会候処、人数十二人内唐人二人乗組、上海ヨリ

出帆方々江渡海ノ洋中風波強ク、致汐懸、洋次第二ハ

可致出帆候間、薪水所望イタシ度申出相与ヘ候処、同

九日出帆、申ノ方江乘行候、右之通追々致出入候得共、

何レモ違変ノ義無之、尤モ仏人住家跡ハ勿論、所々嚴

重相改メ候処、不審ノ廉モ無之候ニ付、家并ニ石垣マ

テモ都テ取毀子候様取計ヒ候段、此節琉球ヨリ飛脚ヲ

以テ申越候ニ付、委細長崎奉行江申達候、此段及御届

候、以上、

十一月

松平修理大夫内

西 筑右衛門

第五十一

先年於外櫻田、水戸様御家来等及乱妨、御仕置被仰付候者墓碑取建候義、御有免被仰出候御書付写(編者曰、真書ナリ)

松平修理大夫家来

江

今度京都ヨリ被

仰出候厚キ

御趣意ヲ以テ、御拔被

仰付候ニ付、先年於外櫻田、水戸殿家来其外申合及乱妨、夫レ〱御仕置相成候者、并ニ右江携相果候者モ出格ノ訳ヲ以テ、墓碑等取建候義御有免相成候間、其段可被申上候、

右之通水戸殿江相達候間、得其意右ニ携候者有之候

ハ、同様可被相心得候、以上、

十二月十一日

第五十二

松平修理大夫殿御国元御守衛、唯今半途ニモ不至上京仕候テハ、瓦解ノ姿ニ相成候間、暫時ノ御猶予被

成下度、且ツ公方様御上洛ノ義、当時節不可然云々

ノ義ニ付、嶋津三郎

御所へ差出候建白書写(編者曰、真書ナリ)

一今般不容易以

叡念、不肖ノ小臣御用ノ義有之、早々上京仕候様御内勅ノ趣奉拜承候、実以武門ノ冥加無此上難有仕合奉存候、就テハ不日上京仕候義当然ニ御座候得共、毎々申上候通、国本相固度トノ趣意ヲ以テ御暇奉願、帰国仕候以來、夙夜心志ヲ苦メ、海防ノ手当ハ勿論、万般ノ政事向精々所置ヲ加へ候折柄、

勅使関東江御下向、攘夷ノ命ヲ被下候段承知仕候、然

ハ弥以テ内修外攘ノ道不相立候テハ、

叡慮難貫徹候ニ付、守衛ノ術十分ヲ尽シ度差急候次第

ニ御座候、唯今半途ニモ不至発足仕候テハ、都テ瓦解

ノ姿ニ相成候ハ案中ニテ別テ心痛仕候、殊ニ於弊邑ハ

三分ノ上ハ環海ノ場所柄、且ツ先般江戸出立ノ節、於

(編者曰、主妻村ニ於ケル英人殺傷ノ事件ナリ)
神奈川夷人混雜一条ヨリ、幕府御所置被成兼候ハ、

弊邑江致廻船様御達可相成候、左候ハ、

皇国ノ御瑕瑾不相成様、穩便ニ応接可仕旨及御届置候

処、未御決着モ不相付候得ハ、自然其通御達相成候ハ

、実ニ

皇国御一大事ニ係リ候義ユヘ、前後当惑罷在候ニ付、
何卒以

御憐察暫時ノ御猶予御前ヨリ御執成被成下度、伏テ奉
懇願候、大抵三四旬モ経候得ハ、治定ノ方ニ相向ヒ可
申候間、来正中ニハ発足仕ヘク候、尤モ不容易大事
ノ御時節ニ当リ、奉蒙重命候上ハ其実相叶ヒ、被為安
宸襟候様無御座候テハ屹度不相濟義ト、只今ヨリ始終
ノ定策相立置度、昼夜忘寝食苦慮仕候、抑

皇国危急ノ節ニ臨ミ、忝モ

聖明ノ御英断ヲ以テ非常ノ大業ヲ被為創、殆ント成就
ノ時機ニ至リ、

上被為対

皇祖下万民ノ為、千載不朽ノ御偉徳誠以テ難有奉存候
得共、兎角古ヨリ有始無終何レヲモ遂ケ不申義、和漢
其例不少候得ハ、乍恐往々処置深謀熟慮、屹ト衆口ニ
無御動揺様、御卓識被為立候義肝要ト存候、既ニ攘夷
ノ命令被為下候上ハ、

諭旨不可返之道理ニテ、自ラ於幕府奉行有之筈ニ候得
ハ、来二月大樹公御上洛相成候テハ、決シテ不可然ト

奉存候、右事件左ニ奉申上候、

第一攘夷之義、仮令三五年ノ期限ヲ定メ候テモ、実地ニ
勅意奉行有之、其術ヲ施シ候場ニ至候得ハ、尋常ノ手
当ニテハ中々六ヶ敷、尤モ彼ヲ馴禦スル実備無之テハ、
我ヲ固守致シ候義決シテ出来兼候得ハ、甚至難ノ訳ニ
御座候、寛急ノ次第ハ有之候テモ、攘夷決定ノ上ハ、
即日ヨリ各国寸陰ヲ惜ミ、必死ニ磨励、海陸充分不行
届候テハ時機ニ後レ候義必然ニ御座候得ハ、上洛相成
不可然奉存候、第二ニハ当分幕府変革ノ初、人心紊乱
物議騒然ノ砌、暫時タリトモ猖獗ノ夷賊ヲ膝下ニ被養、
江府ヲ空城ニ致候義不可然奉存候、第三ハ攘夷決定ノ
上ハ、列藩ノ侯伯致在城、海防守衛ノ策專要ニテ、畢
竟參動猶予ノ場合モ不外候処、御上洛ニ付テハ先規モ
有之、大藩上京仕候義不可然奉存候、第四ニハ、近年
諸品沸騰四民困窮ノ折、如何様簡易ノ令ヲ布候テモ、
大樹公御上洛ト申候テハ、駅々奔命ニ疲勞不少候、第
五ニハ、右ニ付各藩上京、銘々及建議、衆言囂々一和
ノ道相立兼御取捨之上ニハ、或ハ恨ミ或ハ憤リ其害不
少候、第六ニハ、変革ノ時ニ当リ正邪進退等ニ付、小
人俗吏ニ至候テハ、私怨ヲ含ミ候得ハ如何様邪心ヲ包

藏シ、密ニ夷賊ニ応シ、御上洛ノ虚ニ乗シ不軌ヲ図リ
候者有之モ難測御座候、攘夷被

仰出候上、大樹公御上洛ノ害右之通ニ候得共、於幕府
ハ、或百年ノ廢典ヲ起シ、君臣ノ大礼ヲ正シ、天下人
臣ヲシテ尊

王ノ道ヲ知ラシメ候義至当ノ訳ニテ、今ニ至リ幕府ヨ
リ願立相成候テハ人心ノ居合ニモ相係、大礼ヲ欠キ候
場ニモ当リ可申候間、前条ノ訳天下ニ示諭シ、暫ク御
上洛猶予有之様仕候テ、一橋・越前ノ内名代上京ノ義
不苦ノ旨、

勅命ヲ以テ御達有御座度、乍恐奉存候、幕府内情ニオ
イテハ別テ大幸ニ奉存候、且ツ尊

王ノ道ハ、外ニ時世相当可奉施行件々余多可有之候得
共、只今ニ至候テハ先以テ攘夷奉行ノ処、尊

王ノ一大急務ト奉存候間、早々御評議ノ上、速ニ被
仰遣候様御座候得ハ、実ニ

皇国ノ御為メ此上無キ大幸ト奉存候、

右ハ実以テ重大ノ事件ニ付、小臣恐懼ノ至ニ奉存候
得共、篤ト勤考仕候処、不容易時節、黙止罷在候テ
ハ却テ不忠奉存候間、不省多罪愚慮ノ趣以家臣奉建

言候、誠惶誠恐頓首、敬白、

十二月

島津三郎

第五十三

青蓮院宮様御出格ノ訳ヲ以テ御還俗被仰出度、且ツ

松平相摸守殿等御政事向江被致御関係候様云々ノ義

ニ付、嶋津三郎差出候建白書写(編者曰、真書ナリ)

一青蓮院宮様御還俗ノ一条先般奉願候得共、非常ノ御事

ニ御座候得ハ、御評決御六ヶ敷義ト奉存候、併シナカ

ラ不容易時世、天下有志ノ人心奉帰嚮御方ニ被為在候

得ハ、何卒出格ノ訳ヲ以テ、御還俗ノ義此度被

仰出候様偏ニ奉願候、左様御座候得ハ、宮様ニモ猶更

御奮励、御大政ノ御為メ別シテ可然御事ト乍恐奉存候、

一松平相摸守(池田慶徳、因州藩主) 山内豊信、前土州藩主・松平容堂閣老上席ニテ、一橋・越前ヲ補

佐シ、政事向致関係候様被

仰出度奉存候、是モ相摸守ハ一橋兄弟ニモ有之、殊ニ

徳川家御家門ノ列ニモ御座候得ハ、子細ハ無之筈ト奉

存候、容堂ハ外藩ノ事ニ御座候得ハ、評決六ヶ敷可有

之候得共、方今ノ世体例格ニ不拘登用有之様、別テ被

仰出度御事ト奉存候、

一別紙申上候大樹公御上洛ノ發端ハ、先度

勅使大原卿関東下向ノ節、三ヶ条ノ内其一ヲ奉行可有
之トノ

御内命有之模様、早ク関東江相洩、一橋・越前出頭相
成候テハ不可然ノ義ニ付、専ラ安藤(信應)・久世(伝)ノ私計ヲ以
テ速ニ御上洛ヲ發候由、就テハ

叡慮遵奉ノ実意ニハ無之、心術ハ一橋・越前ノ出頭ヲ
忌ミ、

勅命ヲ奉拒候奸計ニ御座候、且ツ又唯今サヘ東海道駅
々人馬ノ差支不一方、内実ハ愁歎ノ声路傍ニ滿候旨相
聞得申候、今般御上洛ノ入費、凡八拾万兩ノ賦ニ伝承
仕候、誠ニ莫大ノ失財ニ御座候間、右ヲ全武備充実ノ
方ニ被差向候ハ、第一攘夷ノ

叡慮奉行ノ基本ニ可有之ト奉存候、

右ハ重畳奉恐入候得共、書副奉備尊覽候、以上、

十二月

島津三郎

第五十四

風説

一去秋中、薩州ヨリ京都江十萬金御献金相成候由、此度

右金ニテ、諸社諸寺江夷狄退散ノ御祈禱被仰付候由ニ
テ、鹿島大宮寺杯モ上京仕候様子ニ御座候、

十二月

五七五 雜集

第一

井伊掃部頭殿御取計ニ寄テ、徳川家ヲ奉欺、遠血微
官之松平(頼学、西条藩主)左京大夫殿如キ一男ヲ以テ、將軍ニ

宣下ヲ蒙リ候云々之義ニ付、嶋津三郎ヨリ

御所江指出候建白書写(編者曰、偽書)

一今ノ將軍家ハ先ツ將軍甥ト称シ、御血流第一之御取扱
ヲ以テ、御幼君江將軍

宣下被為

在候義一円承伏難仕、先年紀州侯ハ先君御隠居之後、

伊豫ノ西條ノ領主松平左京大夫殿嫡男ヲ以テ、紀州御

家督ニ相成候処、紀州侯御隠居御妾腹ノ御子ニシテ、

左京大夫殿江家督ニ被為附候趣相唱へ、西條ノ内ニ何

某ト申ス医師ヲ証人トシテ、今般井伊掃部頭殿万事取

計ニ寄テ徳川家ヲ欺キ、遠血微官ノ左京大夫殿如キ一

男ヲ以テ、將軍ノ

宣下ヲ蒙候事天罪恐奪之至、重々奉恐入候義ト歎息仕候、御婚礼御取結之上奉訴

奏候、緩延之次第只々糺明延引之罪不遁義ニ御座候得共、深キ遠謀之企ニ候故、漸当三月上旬慥成証人召捕、一々白状之上ハ不及是非候条御覽察奉仰候事、^(實カ)

附

此条目秘説証人之事御下知ニ随ヒ可申上事、

一 將軍家御引下ケ御跡目御血統御撰ノ事、

一 皇妹御取戻シノ事、

一 井伊侯罪状并ニ隨順諸侯向御改革ノ事、

一 井伊侯御大法不相立候ニ付、諸大名ノ内減祿申立候

事、

一 御家門方并諸向御咎依怙之御失体御欺キノ事、

一 水府浪人御呼返シ本領安堵并ニ忠義ノ土方斬罪跡目

御加恩ノ事、

一 蛮夷交易御断、諸大名軍備御整、後難身命ヲ以テ御

受合申上候事、

一 朝恩陪臣諸氏御仁政ノ事、

一 金銀建白蘭学停止ノ事、

一 亞墨・阿蘭陀通信別段御免許ノ事、

一 諸大名家老京詰ノ事、

一 御老中年番替リ京詰ノ事、

寺^マ 御糺明^コ

神社^マ 尊崇 天尊 改正^コ

右上書何月頃差出候哉更ニ相知レ申サス、且ツ真偽

モ相決兼候ニ付、暫ク雜集ニ相記置申候、

第二

風説

一 薩州・長州・加州何レモ屋敷普請ニテ、近傍ノ町屋敷ヲ買求相弘候ヨシ、町方ニテハ迷惑ノ事ニ候得共、価ノ高下ニ拘ラス、強テ買求申度相談ニ被及候故、右様之強談彼レ是レ申候テハ、追々如何様之害ニ逢ヒ候モ難計、止ムコトヲ得ス其相談ニ随ヒ売渡候由、尤モ薩州ニテハ屋敷近傍ニ価十五貫目ノ町屋敷有之候処、右ヲ是非買入(編者曰、巷説)申度相談相成候得共、借財等有之故、辻テモ売渡可申様無之段相断候得ハ、其借財ト申スハ幾許之金高二可有之哉ト被相尋、右屋敷主無抛二千両位ト申候得ハ、其金高二テ買受可申トノ相談ニ相成、止ムヲ得ス売渡候由、扱十五貫目ト申スハ、

京地相場ニテ七貫目百五十兩位ノ相場ニテ、十五貫目

八月

様申居候故、弥評判宜敷相聞得候、

第四

ハ高価可申様無之候得共、是レ又薩州之計策ニテ、何

同断

一島津三郎出京ノ節ハ西国浪士ヲ催シ候ニ、関東ニテ京

事モ黄金ヲ以テ人心ヲ得候事ト外相見得申サス、且ツ

都ヲ蔑シ、最早

長州ニテモ人数多ニテ、狭隘之屋敷為致止宿候処モ無

帝京危ク候間、出張守護仕度趣ニ申唱へ誘出シ候処、

之、依リテ暫時ノ積ニテ、東福寺ト申寺之内一房ヲ強

此度空手ニテ帰国ニ付、右浪士共勇ヲ失ヒ、其内日向

テ借り受ケ、右人数ヲ為致止宿候処、追々上京之者許

秋月浪士二十人計帰国候由、其内三人ノ魁首、何ノ面

多有之、段々房内ヲ借り受ケ、當時ト相成候テハ方丈

目有リテ致帰国候哉ト、歎息致シ居候ニ付、薩人申ス

ノ居間モ無之様罷成、方丈却テ裏手ノ小舎ニ引籠居候

ニハ、播州江一先參リ、暫ク時ヲ待チ、然ルヘキヨシ

仕合、一旦承知ノ上ノ事故、是非ニ及ハス事ニ御座候

ニテ同船帰帆、船中ニテ右三人三郎ニ被欺候ヲ怒リ、

第三

議論ニ及ヒ、遂ニ日向江上陸、薩人二十人江三人ニテ

同断

切合、薩六人討死、右三人モ致討死候由ニ御座候(編者

一薩州此間京師ニオイテ又以テ屋敷相求候処、四千兩程

日、事実ナシ)、名元等不相分候間、猶追々取調差上可

ノ土地幸ヒ有之候処、其地主倍ヲ以テ八千兩ト申候ヲ

第五

其通ニ買入レ、且ツ引越料ヲモ遣シ候、先達テ寺田屋

同断

一薩長ハ一旦攘夷ヲ以テ事ヲ始メ候ユヘ、只今ト相成候

テハ、迎テモ攘夷ノ義被相行候事相叶ヒ不申義ハ、何

之騒キモ座敷拵ヒ直シ、其外宛行等宜敷候由、凡テ右

等ノ事ニテ、京師ニテハ唯薩州ト申セハ尽ク誉居候、

殊ニ攘夷ト申事故、世人ハ唯薩ノ御陰ニテ攘夷出来候

レモ心付候得共、素心ヲ変候ヲ憚リ、且ツ數百年來ノ
〔疾乙〕
疾弱、是非共兵争ヲ經不申候テハ、相振申間敷トノ所
存ニテ、勝敗江ハ相拘ラス、一先攘夷仕候方然ルヘク
ト決心相成、

今帝モ右之

思召ニ被為成候様取巧ミ、種々ノ偽書ヲ入

上覽候由(原註、英・仏ヨリ兵端ヲ開キ、我國ヲ奪領仕候ト

ノ次第、横文字ニテ相認有之候ヲ、薩州ニテ拾ヒ取候テ、翻
訳仕入 上覽候由、全ク偽ト相見得申候)、且ツ又右一条

ニ付、自国疲弊ニ相及ヒ、町人等江上納金等申付候程
ニ相至候得共、一旦相始候事ニ候得ハ、一國ヲ傾ケ候

テモ相果シ候積リノヨシ、右之次第迎テモ永久ノ策ニ
モ參申間敷、屹度衰敗罷成可申、尤モ其奸謀ヲ心付候
者モ、往々有之様相見得申候(編者曰、偽説)

一薩州ニテ近衛家江深ク取り入り、自己ノ計策ヲ施シ候
積リニ相見得候得共、遠カラス其奸謀相頭レ可申、其

節ハ近衛家モ自然連及罷成、関白職ノ權モ終ニハ鷹司
殿江相帰シ可申抔ト風唱御座候、

一叙慮ニテハ、妄ニ攘夷ト申ス詛ニハ被為在間敷候得共、
薩長ニ藩ヨリ種々ノ義申立候故、外夷ト申ス者ハ実ニ

犬獸無知之様被

思召、右様之者ニ

神州ヲ被汚候テハ、大恥辱可申様無之トノ詛ヲ以テ、
是非共速ニ攘除被

遊候事ニ御決心相成候様相見得申候、

一先日、(徳川慶喜) (松平定徳)一橋侯・會津侯近々御上京相成候義申上候処、

此度

主上ヨリ御指留ニ相成候様子ニ御座候、其子細ハ、薩
長ニ藩只今ニ罷成候テハ、関東之

御所向都合宜敷相成候ヲ相嫉ミ、何事モ不都合相成候
様取巧ミ、関東ヲ

朝敵同様ニ仕候所存ト相見得、即今一橋侯・會津侯御
上京有之候テハ、自然右ノ奸謀相頭レ可申、右等ノ詛
ヲ以テ種々ノ義申立、御上京不相成様取巧候事ニ相見
得申候、一橋侯ノ義ハ、此度三條殿

勅使被

仰付、御下向相成候上ハ、別段一橋侯御上京ニハ相及
ヒ申サスヨシヲ以テ、御差留ニ相成候由、會津侯ハ先
年井伊侯御在職中、溜詰上席ニ列シ、一言建白モ無之
上ハ、定テ井伊侯同腹ニモ可有之、只今ニ至リ御改心

ハ可有御座候得共、右様之御方守護職被仰付候筈ハ之レナキヨシヲ以テ、御上京御差留ニ相成候由、何レモ薩長ノ奸謀ト相見得申候、歎息ノ至ニ御座候、

一將軍御上洛ノ義モ、薩長ニテ殊ノ外相厭ヒ、成ラハ御上洛無之様仕度所存ニテ、是又周旋仕居候様子ニ御座候、弥右様之訳ニテハ追々如何相成候哉、又々

叡慮ヲ以テ御差留ニ罷成候哉モ相分り申サス、風唱專ラニ御座候、

一薩長ニ藩堂上方江深ク取入、

御所向殊ノ外都合宜敷、既ニ

主上ヲ背ニ奉負候テ、諸事取計ヒ候故、即今ノ勢益盛ニシテ、他藩ヨリ彼是異議相入候義、迎テモ相叶ヒ申サスヨシ、尤モ右ニ藩ノ計策ニテ種々ノ偽書ヲ作り、是非共攘夷不被遊ハ不相成事ニ申立、

主上ヲモ其術中江入レ奉リ候様子ニ御座候、元ヨリ攘夷ノ義ハ、日本一統其心有之筈ノ事ニテ、薩長ニ相限候訳ハ無御座候得共、攘夷ニモ夫レ々次第順序有之者ニテ、理非曲直ヲ更ニ考ヘス、妄ニ攘夷仕候テハ、候忽彼等ニ蹂躪被致候ハ、頭然ノ事ニ御座候、然処薩長ハ自己ノ私意相遂ケ申度所存ニテ、妄ニ攘夷ヲ申立、

一戦ノ上関東ノ權ヲ奪領仕候様子、奸謀取巧候事ニ相聞得申候(編者曰、皆之レ巻説)

第六

同断

一薩州侯御息女御元江御下リノヨシニテ、先日中此表江御着、過ル六日御発駕、御在京中嵐山御室其外所々御遊覽ニ相成、祇園江被為入候節ハ、茶店江御休ニ相成、芸妓數十名被召寄、歌舞等御遊覽ニ相成、芸妓一人江金五両、外ニ花代千疋ツ、従僕ノモノマテ百疋ツ、被下、惣費ニ三百両ト申スコトニテ甚タ盛ノヨシ(編者曰、事実ナリ)、京人驚歎罷在申候、右等モ皆世人ノ心目ヲ相驚候手段ト相見得申候、薩州人皆市店ノ間ニ寓居罷在、幕等相張、何某ト大札江大書仕、態ト肩書無シニ仕故、更ニ事ヲ張大ニ仕、京中薩人ト見受候ハ、畏歎雷ナラス、既ニ外藩ノモノナトハ侮慢ヲ極メ、其体誠ニ可惡様子ニ相見得申候、

第七

同断

一嶋津三郎頗ル威福ヲ専ラニ仕、薩ノ老候遺命相受候、(編者曰、老臣中類名ノ者ナシ) (編者註(軍談)老臣高津左衛門・西郷吉兵衛(原註、当時京師ノ留守居、

(編者曰、三右衛門ノ悪
大島五左衛門) 右兩人ヲ逐ヒ遣リ、一藩望ヲ失ヒ候由、

一 三郎京都ニ着、武器ヲ

御所ノ外郭マテ相入レ、右ハ

御所ヨリノ御優待ト申來候得共、全ク左ニ無之、既扈

往々如是ノ由、

一 薩州全国疲弊、朋党分争之由、長州百姓重歎ニ苦居候

由、二藩人恟々ト申事ニ相聞得申候(編者曰、巷説)

第八

同断

一 此節薩・長・土専ラ此表ノ事ヲ相行罷在ト申内、薩州

ハ一切他藩江相談不仕、専ラ一藩ノ独断ヲ以テ沙汰仕

候由、依リテ長・土刃ヨリ色々申入相諭申候得共、更

ニ相手ニ仕ラス、先々私共致方ヲ御覽被成杯申挨拶ニ

テ、長・土ノ二藩モ甚タ不満ノ風、尤モ三郎守護職、

同家中藤井良節杯、折角奔走懇願仕候風ニ相聞、永々

三郎ヨリ御辞退申ヘキ勢ヒ相見得申サス、先日中一万

石ノ献米モ、専ラ右等ノ為メト相見得申候(編者曰、事

実之ニ反ス讒ニ誣説)、此表ニテハ右等ノ始末故、長・

土憤激、薩ト相モチレ、関東ニテハ横濱一条ニ付、長・

土争端ヲ相開、三家之者共東西ニ奔走相騒居候哉ニ御

座候(編者曰、事実)、併右ハ深ク他藩江相秘シ、只内
同土ニテ頗ル相揉罷在候風ニ相見得申候、

第九

同断

一 当時ノ模様、不遠何レノ道ニモ兵乱ハ不免様ニ相見得

申候、然ニ薩・長・土当時合体ト申候得共、決テ始終

相和シ候理無之、殊ニ薩州本多彌右衛門此節専ラ事ヲ

用ヒ、万一争乱ニ相及候ハ、

乘輿ヲ鹿兒嶋府江奉迎(編者曰、藩内巷説ニモ涉レリ)、

日・薩・隅ノ兵ヲ以奉擁護候杯申居候由、既ニ只今ヨ

リ少々互ニ相争ノ機相見得、三家始終相全カラサルハ

必然ノ勢ニ御座候、

第十

享保年中達上聞候薩州大家并高調書写(編者曰、偽書)

古書ニテ薩摩享保中高調見当候、御参考ノ為メ左

ニ抄録ス、

薩摩守家來大勢所持仕候由達上聞、書付ヲ以可有上覽

由、上意ニ付如斯、

享保七寅年十月

一廿四万石

琉球口

嶋津 内膳久松

一十八万石

九州口

町田 左近

一十三万石

町田 甚之丞

一九万石

嶋津 圖書久松

右兩人ツ、年替江戸江詰申候、

一八万石

城代

伊勢 兵庫

一八万石

嶋津 因幡

一六万石

嶋津 和泉

一万石ヨリ五千石迄和泉組中十五人

一五万石

嶋津 下野

一三万石

嶋津 外記

一三万石

伊勢 帶刀

一

大友 勘四郎

一

嶋津 勘次郎

右組子五百石ヨリ千石迄知行取

一 一万石

一 八千石

嶋津 勘左衛門

右組子五百石ヨリ千石迄、一組ニ五十人宛、小頭

三千石ツ、此内兩人ハ江戸詰、

大名方

一 六万石

大内 大學

一 六万石

嶋津 石見

一 一万三千石

嶋津豫左衛門

伊藤 甚介

荷代又右衛門

高井伊太夫

海老源藏

三好大膳

朽木信濃

多田與八郎

白川八藏

酒依外記

平松源六

嶋津十左衛門

矢部出羽

牧田長門

酒井萬之助

白藤下野

浦部藤助

町田筑後

内藤瀬兵衛

右一萬石以上之大名

伊勢 但馬

嶋津 伊勢

曾我 修理

八木 勘介

菊地門九郎

藤原 徳輔

秋津 半藏

小徒 大膳

熊谷 半藏

貳千石ツ、

弓大将四人

千石ツ、

大目付二人

五百石ツ、

平目付廿五人

八百石ツ、

使番八人

五百石ヨリ七百石迄

小役人十五人

四百石ツ、

使番五人

九百石ツ、

広間番廿人

五百石ツ、

大小性三十人

七百石ツ、

切支丹奉行二人

七百石ツ、

大納戸八人

四百石ツ、

小納戸六人

千石ツ、

腰物奉行六人

千石ツ、

勤定役八人

三百石ツ、

近習番八人

三千石ツ、

船大将八人

千石ツ、

石頭二人

千石ツ、

寄合百人

右之外親懸り無足之人数二千三十人、在国騎馬^三

千三百人、

惣高琉球・大隅・薩摩取合四百万石余、

御前帳七十万石余、

右盈縮出入モ可有御座候得共、実ニ 將軍家之外、

海内薩摩ニ統キ候大國無御座候ト奉存候、

(官武通紀 圖書刊行会志にて校訂)